資料２

新総合計画

シナリオ集

目 次

1. 地域福祉の推進 …… 1
2. 高齢者福祉の充実 …… 6
3. 障害者福祉の充実 …… 10
4. 健康づくりの推進 …… 13
5. 地域医療体制の充実 …… 18
6. 災害に強いまちづくり …… 20
7. 消防・救急体制の充実 …… 22
8. 安心安全の地域づくり …… 25
9. 子育て環境の充実 …… 28
10. 青少年の育成 …… 32
11. 学校教育の充実 …… 38
12. 産業・就労環境の整備 …… 41
13. 商業の振興 …… 44
14. 観光まちづくりの推進 …… 47
15－16. 農業・水産業の振興 …… 50
17. 文化遺産の保存と活用 …… 53
18. 芸術・文化の振興 …… 56
19. 生涯学習の振興 …… 59
20. 生涯スポーツの推進 …… 62
21. 環境共生型地域づくり …… 65
22. 資源循環型社会形成の推進 …… 68
23. 生活環境の保全（衛生美化） …… 70
生活環境の保全（緑公園） …… 73
24. 自然環境の保全と再生 …… 76
25. 快適で魅力ある生活空間づくり（市街地） …… 80
快適で魅力ある生活空間づくり（住環境） …… 82
26. 景観形成の促進 …… 84
27. 安全で円滑な地域交通の充実 …… 88
28. 安定した水供給と適正な下水処理（下水道） …… 91
安定した水供給と適正な下水処理（水道） …… 94
29. 共生社会の実現 …… 97
30. 協働による地域経営 …… 101
31. 情報共有の推進 …… 104
32. 経営指向の行財政運営（行政） …… 107
経営指向の行財政運営（財政） …… 110
33. 市町合併と広域行政の推進 …… 113

01　地域福祉の推進

概要

作成：福祉政策課

シナリオのタイトル：地域福祉の推進　「地域での支え合い」

サマリー（概要）

・少子高齢化、核家族化、近隣関係の希薄化が進みますが、地域福祉の推進には顔の見える近隣関係の再構築が望まれます。

・市民は顔の見える近隣関係を再構築した後、信頼関係を経て、行政やボランティアの情報をきっかけとして、各種地域活動へ参加します。

・比較的元気な高齢者は、豊かな人生経験等を活かし趣味や地域活動を通して、地域の新たな担い手になります。

・子どもや成人への福祉教育を通して福祉の心の醸成を図り、市民、行政、事業者が支え合い、生活していくことができるまちである「ケアタウン」の実現を図ります。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「少子高齢化」「核家族化」「孤立化」「近隣関係の希薄化」「顔の見える近隣関係の再構築」

「高齢者の生きがいづくり」「福祉教育」「市民が活動に参加しやすい環境づくり」

「知人からの誘い」「ケアタウン」「サロン活動」「活動・相談拠点」

平成23年ごろ

・Aさんは、現在、58歳。60歳の定年退職を前に、今までは就職してから日本全国を転勤族で飛び回り、あまり住んでいる地元のことには関心がありませんでした。

・5年前に小田原に住み始め、鉄道路線が発達し、東京にも近く、気候も温暖で、食べ物もおいしい小田原を今後の生活拠点にしようと、退職後を見据えて、最近、市内に家を建てました。

・妻のBさん（55歳・専業主婦）も夫のAさんとともに日本全国を転勤で引越しが多かったので、隣近所とは親しくはなるのですが、丁度慣れ親しんだ頃に次の夫の赴任先に引っ越すので、新しい土地と新しいご近所づきあいを楽しみと思う反面、慣れ親しんだ隣近所とのご近所づきあいがなくなる寂しさをいつも抱えていました。

・「俺も58歳になって、今まで仕事仕事で日本全国を転勤ばかりしてきて、お前には苦労のかけっぱなしだったなあ」Aさんはある日の夕食のときに、切り出しました。

・「今までは、月曜日から金曜日まで仕事ばかりで、住んでいる地元のことはあまり知らず、隣近所とは会えば挨拶はしたけど、積極的に地元の地域に関わっていこうとはしなかったな。でも、あと2年すれば、定年で会社とも一応おさらばだ。定年後も会社で再雇用や嘱託で働く道もあるが、今まで地域にほとんど関わってこなかったから、俺の考えとしては、定年後は地元で様々な活動して地域の役に立ちたいと考えるようになったんだ。」

・「いいことだと思うわ。お父さんの地域デビューというわけね。でも、60歳で地域デビューなんて遅すぎるんじゃない。まして、あなたは転勤族で、ここに住み始めたのも5年前の新参者よ。顔見知りや親しい人もそんなにいるわけじゃないし、これからどうやってゆくつもりかしら。」妻のBさんは賛成しますが、現在仕事が忙しい夫がどうやってこれから地域と関わりを持っていけるかなどについて、思案顔でした。

・「まあ、やれることからやってみるよ。頭で考えるより、いろいろやってみたほうが話が早いし。」Aさんは前向きでした。

△△

・Cさんは65歳、一人暮らしの男性です。5年前に妻に先立たれ、3人の子どもたちは皆結婚して、子どももうけ、

東京で暮らしています。会社勤めが長かったので、生活していくだけの厚生年金で暮らしています。

- 「今は、元気なので、食事や買い物、洗濯などは自分ひとり分なので何とかやっていけるけど、この先どうかなあ。」遅い昼食を食べていたとき、何の気なしに口からひとり言を口走っていました。
- 「食べていけるだけの年金はあって、今のところは健康だけど、俺ももう65だ。まして一人暮らしだから、何かあったらと考えるのはどうかとは思うけど、考えなくちゃいけないよな。」
- いつしか、Cさんの口調は自分自身に言い聞かせているものに変わっていきました。
- 「自分の健康の心配から子どもたちに一緒に住んでくれとは、言いづらいし、第一、妻が亡くなってからもう5年。俺も全部自分のペースで生活でできる一人暮らしペースに慣れてきたし、食事、買い物などは、夜遅くまで営業しているスーパーやコンビニエンスストアでほとんど用が足りる。一人分の食材だと店で買って調理するより、一人分のできている食事などを買ったほうが値段も安いし、手間も省けて一人暮らしには合理的だな。まあ、高齢者に限らず、一人暮らしが増えている現状に世の中が合ってきているということかな。」
- 「でも」とCさんは一人で思いをめぐらしました。「今は健康だからいいけど、これから具合が悪くなったり、寝たきりになるようなことになった場合、一体俺はどうなるんだ？子どもはいるけど、東京でそれぞれ世帯を持っているし、まあ、来れない距離ではないけど、毎日様子を見に来るのは、ちょっと大変じゃないか。後で、市役所に電話して聞いてみよう。」
- 市役所に問い合わせたところ、地域には高齢者の相談窓口であって、保健師又は経験のある看護師、主任介護専門員、社会福祉士がいる地域包括支援センターがあるので、住んでいるところの地域包括支援センターに相談してみることを勧められました。
- 数日後、Cさんは地域包括支援センターを訪れ、自分の考えている今後の不安なことなどについて相談しました。地域包括支援センターの方は電話や窓口対応など忙しかったのですが、Cさんの今後の不安などについて、よく話を聞いてくれ、介護保険や各種サービス、民生委員児童委員などの見守りなどについて詳しく説明してくれました。
- Cさんは初めて聞くことが多かったので、全部が分かったわけではないのですが、今後のことなどについて、いろいろな福祉の制度やサービスが自分や自分と同じような境遇の人達を取り巻き、支援しているんだなあということを実感しました。

平成28年ごろ

- Aさんは、63歳になりました。当初の予定通り60歳まで会社に勤め続け、定年退職をきっかけに、地域の様々な活動に顔を出すようになりました。
- まず、毎朝、ごみを出す集積所で会う同じ集積所を使っている人に挨拶を心がけました。
- 「おはようございます。今日はごみが多いですね」
- 「この前の週末に掃除をしたからたくさんごみが出てね。」
- 「今は春だから、生ごみもそんなに臭わないですけど、夏場はすごい臭いですね。それに、カラスがごみの袋を破って、生ごみを食い散らかしたりしていやですね。」
- 「私も気にはなっていたんですがね。」
- 「うちは集積場に近いので、なるべく散らかっているのを見かけたら掃除するようにしましょう。」
- 「そうですね。私も気にはなっていましたから気づいたら掃除しましょう。」
- そんなことで近所の同じくらいの年齢のEさんと知り合いになり、散歩や買い物で近くへ出かけるときに会話交わすようになりました。
- そんなある日、Eさんから「毎年秋に、近くの神社で秋祭りがあるんだが、そのお手伝いをしてくれないか」と話がありました。
- 聞けば、Eさんはもう40年くらい現在の家に住んでおり、自治会や子ども会の世話役などを経験しており、現在は自治会で神社の秋祭りを主に担当しているとのことでした。
- 「いろいろ教えてもらいながら、楽しみながら、やらせてもらうよ」Aさんは承諾しました。いろいろな人の物とに出会えるとあってAさんは久しぶりに胸がわくわくしてくる感じを味わいました。
- また、市の広報で見たのですが、市では地域で支えあって暮らしていける「ケアタウン」づくりを進めており、市民向けには生涯学習講座の一つとして「ケアタウンについて」の出前講座が用意され、関心のある市民誰もが、

ケアタウンについて知り、参加し、支え合える仕組みができ始めています。

・Aさんは、「住み慣れた地域で支えあっていく」というフレーズが今の自分の心境と重なっている部分があったので、生涯学習講座「ケアタウンについて」を最寄のタウンセンターで受講してみました。

・ケアタウンの考え方に「市民の身近な場所で分かりやすい情報が手に入り、相談もできる場所」というのがあり、既存施設を活用した簡単な相談や交流もできる地域の活動拠点が広まっていけばケアタウンに少しずつ近づいていくということでした。

・Aさんは、「ケアタウンについて」を受講しながら、住み慣れた家の近くにこのような地域福祉の拠点整備が進められていることはあまり知りませんでしたが、だんだん住みやすい地域になってきたのだなと思いました。

△△

・Cさんは70歳になりました。一人暮らしは変わりませんが、足腰が弱くなってきたので、あまり外出することは控えるようになりました。

・とはいっても、日常の食事、洗濯、掃除などは週3日ヘルパーさんに来てもらってお手伝いしてもらっています。

・住んでいる地区の民生委員もCさんが70歳で一人暮らしをしている現状なので、定期的に訪問してくれて、現在の生活で困った点とか悩んでいる点などの相談にのってもらい、近くに相談できる身寄りがいないCさんにとっては大変頼りになる存在となっています。

・また、定期的に地区の公民館などで開かれる地区の社会福祉協議会主催の一人暮らし高齢者等昼食会やサロン活動等に民生委員のお誘いで出かけて行って、同じ境遇の一人暮らしの人と話ができることはとても共感できる楽しい時間ですし、全く違う状況の人と話ができることは日常と違う刺激になりますので、それはそれで大変刺激になる良い時間だなとCさんは思っています。

・一人暮らし高齢者等昼食会やサロン活動等で出会った方々の何人かは、老人クラブに入っており、Cさんも最初は「おれもいよいよ老人クラブか」と思いましたが、いろいろな話を聞いてみると、Cさんのような一人暮らしの方は、老人クラブなどの行事がないと出かけるのが億劫になってしまうし、「何より自分が一人でなく、誰がと繋がっている、属している安心感があるよ」という知りいの言葉が決め手になり、Cさんも老人クラブに入り、様々な活動に顔をだすようになりました。

・今日は、地区の老人クラブの集まりに地元の小学生が遊びに来てくれる日です。と言いますのも、最近小学校や中学校ではケアタウンを目指すため、福祉学習が根付き始めており、地元の小学校では月に2回、学区内の高齢者、障害者のいずれかを地区社協のボランティアとともに訪問し、植木の水やりや掃除の手伝いなどをするようになってきました。

・少子高齢化、核家族化が進んで、子どもたちの身近に高齢者等があまりいない現状においても、こうして子どものうちから高齢者等に接することによって、他人を思いやる優しい心を育み、将来のケアタウンを担っていく人材の育成に向けて努力しているとのことです。

・どうしても男性高齢者のひとり暮らしは、静かなもので、身近に孫もいないCさんは、始めは小学生の話しに上手くあわせるのができませんでしたが、老人クラブの女性はさすが、普段から子どもと良く話しているだけあって、慣れたものでしたので、Cさんも合わせてみると次第に話しの受け答えもスムーズになってきて、楽しいひと時でした。

・このとき、Cさんは風邪気味でしたが、小学校1年のDちゃんが「おじいちゃん、風邪ひいてかわいそうだね。次に来るときはよくなっているといいね。私が神様によくなるようにお願いしておいてあげる。」という言葉に思わず心がほろりときました。

平成34年ごろ

・Aさんは、69歳になりました。数年前に地元の神社の秋祭りにお手伝いで加わったのをきっかけに、神社関係者、地元の自治会、老人クラブ、子ども会、消防団など地域の様々な団体と関係者と知り合いになり、地域での朝の挨拶運動とか、地元の河川清掃、老人クラブの世話役とかいろいろなことを頼まれるようになりました。

・もともと、頼りにされると嫌とは言えない性格のAさん「Aさん、いつものとおり、たのむよ。あんたしかいないんだよ」と頼られるとAさんもまんざらでもなさそうです。

・もっとも、Aさんが外に出かけることが、ほぼ日常茶飯事なので、妻のBさんも自然と外へ出かけるようになりました。

・とはいっても、妻のBさんが出かけるのは、Aさんと同じ所ではなく、趣味の日本舞踊で知り合ったお友達のとこ

ろです。

・「亭主元気で留守がいい」とはこのことだわ。Bさんはお友達と日本舞踊のレッスンをひとしきり終えた後、友達に切り出しました。

・「私の知り合いが週に1度、一人暮らしの人のおうちに行って話し相手のボランティアをやっているの。日本舞踊だけじゃなくて、今度一緒に行ってやってみない？」お友達のお誘いに、「私に、そんなことできるのかしら」と思ったBさんでしたが、いつ何時自分も同じような一人暮らしになるかもしれない年齢ということもあって、また、興味もあって、お友達も一緒に行ってくれるって言うし、少しためらいもありましたが、新しい世界を知りたい気持ちから「じゃ、今度ね」と一歩を踏み出したのでした。

・Aさんも妻のBさんも出かけるたびに立ち寄るのが、近所のタウンセンターにある「ふれあいサロン」です。市民、行政、事業者が一体となって地域で支え合うケアタウンが次第に広まりを見せ、市内の各所に市民が気軽にふらっと立ち寄れ、地域の情報を手にいれることができる「ふれあいサロン」が広まっていました。

・運営は、市社会福祉協議会の指導のもと各地区社会福祉協議会がやっています。地区の方が運営しているだけあって、新聞、テレビ、タウン誌などでは手に入りづらい地元の地域ならではの情報を手に入れることができ、また、市役所や県からの情報も入手できるので非常に便利です。

・地域で活動する地区社協、民児協、各種ボランティア団体等もこのサロンを活用して地域福祉に役立てていることです。

・Aさんも妻のBさんも現在も暮らしやすいですが、もっと暮らしやすい、思いやりに満ちたまちができればいいなと思いました。

△△

・Cさんは76歳になりました。一人暮らしは変わりませんが、最近めっきり足腰が弱くなってきたので、外出することは控えるようになりました。

・日常の食事、洗濯、掃除などは週5日ヘルパーさんに来てもらってお手伝いしてもらっています。

・住んでいる地区の民生委員もCさんが76歳で一人暮らしをしている現状なので、定期的に訪問してくれて、現在の生活で困った点とか悩んでいる点などの相談にのってもらい、近くに相談できる身寄りがいないCさんにとっては大変頼りになる存在となっています。

・定期的に地区の公民館などで開かれる地区の社会福祉協議会主催の一人暮らし高齢者等昼食会やサロン活動等に民生委員のお誘いで出かけて行って、同じ境遇の一人暮らしの人と話ができることはとても共感できる楽しい時間ですし、全く違う状況の人と話ができることは日常と違う刺激になりますので、それはそれで大変刺激になる良い時間だなとCさんは思っています。

・老人クラブのいろいろな行事のお誘いが来て、行きたい気持ちはあるのですが、残念ながらよる年波には勝てないようです。しかし、老人クラブのお友達が2～3日ごとに様子を見に来てくれたり、「元気かよ」と立ち寄ってくれて、世間話をしてくれるのでとても気晴らしになっています。

・「最近一人暮らしの高齢者宅に来てくれて、あまり表に出かけることのない高齢者等の話し相手になってくれるボランティアができて、お前のところに近々来るようにしておいたぞ」ってさっき来た友達が言ってたな、Cさんはつぶやきました。

・それから2～3日経って、老人クラブの友達が、そのボランティア数人と地元の民生委員といっしょにやって来ました。

・「ああ、この前の話の方ですね。男一人暮らしのところへようこそ。」Cさんが切り出すと、友達に伴われて靴を脱いだ一人は、Bさんでした。

・Cさんが今までの人生の取り留めのない話は2時間近くにも及びましたが、あまり外出する機会がなく、人と話したい気持ちが溜まっていたのだろうと、皆は思いました。Bさんは自分と違った人生を聞いて、参考になることもあると思う反面、自分の人生を見直す良いきっかけにしようと思いました。

・BさんとCさんの2人の境遇はもちろん全く違うのですが、それぞれ、いくつになっても、顔の分かる人との出会い、またその人を介しての人との出会い、が自分を変えて、成長させてくれたのではとそれぞれが思うのでした。

・それから数日後、Cさんは、中学校1年になったDちゃんの訪問を受けました。中学生になったDちゃんは、バレーボール部に所属している活発な女の子ですが、将来は、福祉関係の仕事につきたいと思っています。

・Dちゃんは家が、Cさんの近くであったこともあり、また、Dちゃんの家族も非常にやさしい方なので、道で会えば挨拶する間柄になっていました。

・近くに孫が住んでいないCさんは、Dちゃんを自分の孫のように可愛がり、ある意味一つの生きがいともなってい

ました。

・Cさんは、Dちゃんと始めて会った日のことが忘れられず、このようなめぐり合わせになったことをありがたいと思うとともに、近所にできた「ふれあいサロン」も「ケアタウン構想」を実現するためにできた施設だということを知り、「ケアタウンというものが、このように人とふれあうことを手助けしてくれるのなら、これからもケアタウンが進んでいけばいいなあ」と思いました。

02　高齢者福祉の充実

概要

作成：高齢介護課

シナリオのタイトル：地域支え合いコース

サマリー（概要）

・少子高齢化などに伴い家族やコミュニティのかたちが変わる中で、高齢者はそれぞれの老後を過ごしています。

・会社を定年退職したある男性は、趣味の活動を続けながら、地域に溶け込み、元気に暮らし続けます。

・少し足腰が衰えたある男性は、介護予防事業に取り組みながら、地域での役割を果たします。

・自宅で介護サービスを受けていたある女性は、住み慣れた家で安らかな最期を迎えます。

・夫が認知症になったある女性は、各種サービスや地域住民の支援を受け、苦労しながらも夫を支え続けます。

・高齢者一人ひとりが自立と社会参加を心がけ、家族や地域がともに支え合うことにより、まちには元気な高齢者が増え、社会保障も安定に向かうのでした。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「高齢化」「少子化・核家族化」「生きがいづくり」「社会参加」「生活支援サービス」「介護予防」「介護サービス」

「介護保険」「地域包括支援センター」「家族介護」「認知症」「ひとり暮らし」「老人ホーム」

平成23年ごろ

・Aさんは 64 歳。定年後の再就職先も、間もなく雇用契約が満了しようとしていました。

・「これで勤め人暮らしも終わりと思うと、寂しいな」

・夕食をつつきながら、Aさんはふと妻に漏らしました。

・「うふふ。本当に仕事が好きなのね。角のおじいちゃんも 80 近いけど、シルバー人材センターで植木仕事をしてるって」

・「へぇ。でもまぁ、僕は釣り三昧の毎日ってことで…」

・「毎日釣りばっかりでどうするの。魚をさばくのは私だし…。そうだ、あなたもフラダンスやりましょうよ。近所に友達もできるし、あなたも地域デビューしたほうがいいわよ」

・「そうだなぁ…」

◇　◇　◇

・無職の男性Bさんは 66 歳。少し足腰が弱くなってきたと感じていました。ある日、パチンコから帰ると、市役所からの手紙が届いていました。

・「特定高齢者選定通知書…？」。そういえばBさん、前の月に「生活機能チェック」を受けたのでした。手紙には、Bさんの「生活機能」が低下していて、いずれ介護を要する状態になってしまうかも…、などと書いてありました。

・3、4日して、地域包括支援センターの職員から電話がかかってきました。

・「あまり心配はいりませんよ。でもBさん、外で転びそうになることが多いようでしたら、少し運動を始めてみませんか？　いろいろな参加方法がありますよ」

・説明を聞いたBさんは、体操やストレッチなどの軽い運動をする「貯筋教室」に参加することにしました。会場が自宅近くの自治会の公民館だというのも、気軽でよかったのです。

◇　◇　◇

・Cさんは 78 歳の女性。夫が5年前に他界してから、一人で平屋の家で暮らしていました。去年心臓の持病で少し入院したあとに要支援1の認定を受け、現在は週1回のデイサービスを利用していました。

・小田急線の2駅先でアパート住まいをしている娘夫婦は、そんな母のことがいつも気掛かりでした。

・「母さん、そろそろ一人じゃ大変なんじゃないの」

・できれば娘と一緒に暮らしたいと思っていたCさんでしたが、「いよいよになったら老人ホームでも何でも入るから」などと適当にごまかしてしまうのでした。

◇　◇　◇

・74 歳の無職男性Dさん。3年前に妻のEさんから最近物忘れが多いと言われて医者に相談した時に、軽度認知障害の診断を受けました。認知症は思いのほか早く進行し、自立生活が困難な状態になりつつありました。

・「このままどんどん悪くなったらどうなっちゃうのかしら…」

・福祉ガイドブックをめくると、「認知症の相談窓口・地域包括支援センター」とありました。Eさんはとにかく電話してみることにしました。

・ほどなく地域包括支援センターの職員がEさんの自宅を訪れ、親切に在宅介護の相談に応じてくれました。

・Dさんは要介護認定で要介護1の認定を受けた後、認知症通所介護サービスの利用を始めました。おかげで、Dさんの表情はおだやかに落ち着きました。介護者のための認知症教室を案内してもらったEさんも、ずいぶん気が楽になりました。

◇　◇　◇

・このころテレビでは、「超高齢社会の介護」などの特集番組が繰り返し放送されていました。平成 20 年代後半は高齢化率の伸びが最も急激で、国と地方の財政の悪化と世界的な不況とが相まって社会の活力が大きく低下するとの見通しが示されていたのです。国は、介護保険制度改革に次ぐ医療制度改革を進めつつあり、消費税の増税も議論されていましたが、いずれにしろ高齢者の負担の大幅な上昇は不可避と考えられていました。

・また当時、特別養護老人ホームの入所を待っている市民は約 500 人いました。これだけの規模の施設を建設すれば、その分の介護サービス費の負担のために、介護保険料の大幅な上昇は避けられない状況でした。

平成28年ごろ

・妻に誘われてフラダンスを始めたAさん。始めは照れくさかったけど、このころにはすっかりサークルの中心メンバーになりました。

・「世話人もたいへんね」と妻。

・「まぁ、会社でも庶務をやっていたし、そうでもないよ」

・「でもあなた、フラダンスを始めてから、姿勢もよくなったし、若返ったみたいよ」

・「みんなと一緒に体を動かすのはいいね。君に誘ってもらってよかったよ」

◇　◇　◇

・Bさんが貯筋教室に通い始めてから4年。毎週2回の教室と、自宅での毎日の体操を欠かさず続けていました。

・教室の効果は、通い始めてすぐに現れました。3か月で足腰のおぼつかない感じはなくなり、半年もすると体全体がすっかり軽くなりました。地域が自主的に運営する貯筋教室のスタッフも務めるようになりました。

・仲間の紹介で、老人クラブにも誘われたBさん。

・「今まで近所には世話になりっぱなしだったし、ひとつやってみるか」と、役員も引き受けました。

◇　◇　◇

・自宅での独居生活を続けていたCさんですが、80 歳を過ぎたころから徐々に体の衰えが目立ってきました。2年前から配食サービスを利用し始め、要支援2になってからは、ホームヘルパーも週2回お願いしていました。

・じきに要介護1になったCさんに、ケアマネジャーは地域密着型サービスの利用を勧めました。小規模多機能型居宅介護というサービスなら、デイサービスやホームヘルプ、必要に応じてショートステイも利用できるというので

す。

・「1か所でいろんなサービスを使えるのは安心ね」

・それからCさんは、夜中の介助や発作への備えのために、夜間対応型訪問介護サービスの契約もしました。

・Cさんは住み慣れた家で暮らし続けられると思うと、気持ちにゆとりが生まれました。その晩の電話で、Cさんは娘に言うのでした。

・「まだまだあんたたちの世話にはならないわよ」

◇　◇　◇

・認知症のDさんの妻Eさんは、地域包括支援センターや医師の支えを得て、おだやかな気持ちで夫の介護を続けていました。

・よくお世話になっているのは、同じ立場の介護者の集いの仲間です。介護の悩みを話し合える人がいるだけで、ずいぶんと介護疲れが解消されることを感じていました。

平成34年ごろ

・76 歳になったAさん。今日は敬老行事に招かれています。地区の公民館で、地域の皆さんが協力し合って長寿を祝ってくださいます。Aさんのサークルもフラダンスを披露しました。

・席に戻ったAさんに役員さんが話し掛けます。

・「やっぱしこうやってみんなが集まんのがいいんだよなぁ。敬老行事なんかいらねっせぇ人もいんけどよ、こういうのを大事にしねぇと地域はダメになっちまぁんだな」

・Aさんは、確かにそうだと思いました。地域に顔の見える関係があればこそ、安心して暮らし続けてこられたんだ、と。

・その晩、Aさんは妻と話し合いました。

・「僕たちも体力が少し落ちて苦労も多くなってきたけど、この街でずっと暮らし続けたいね」と。

◇　◇　◇

・Bさんは 78 歳になりました。このごろは、貯筋教室の活動は若い人たちに任せて、老人クラブの活動に熱心に取り組んでいます。

・クラブの会員による友愛訪問では、独居の高齢者宅を訪問して、世間話をしたり、貯筋教室を勧めたりしています。地域の清掃活動にも率先して参加し、子どもたちの見守りや声掛け運動にも励んでいます。

・体力は若干落ちたとはいえ、身のこなしは 60 代の人にもひけをとりません。今日も「ほんとうにお若いですねぇ」と声を掛けられて上機嫌です。そんなBさんの周りには元気な仲間が集まり、笑顔が絶えません。

◇　◇　◇

・自宅で地域密着型サービスを利用しながら独居生活を続けていたCさんは、2年前から要介護2になりました。そのころから、娘も1日おきに様子を見にくるようになりました。Cさんは嬉しそうに迎えてくれますが、薄暗い寝室をのぞくと、娘としては少し気の毒な気持ちになるのでした。

・この間、介護制度と医療制度の見直しが進み、心臓の持病があっても自宅でどうにかこうにかうまいぐあいにやってきたのです。

・そして 90 歳のある日、Cさんはずっと暮らし続けた自宅の居間で、娘と医師に見守られながら安らかに息を引き取りました。

◇　◇　◇

・認知症のDさんは、自宅での生活を続けて、4年前に亡くなりました。

・最期は妻のEさんのことも分からなくなってしまいました。思えばこの 10 年間は本当に苦労ばかりでした。

・それでもEさんは、地域包括支援センター、ケアマネジャー、地域密着型サービスの事業所、民生委員、保健福祉事務所、そのほか地域の多くの方々に支援してもらいながら、自宅で夫を看取ることができてよかったと思うのでした。

◇　◇　◇

・公園では、地区の高齢者 20 人ほどが集まって、太極拳をやっています。それを見ながら2人の主婦が、ベビーカーを寄せて話しています。

・「イマドキのお年寄りは元気よねぇ」

・「ウチのお義母さんも、近くで『脳トレ』っていうのが始まって、もう3か月ぐらい通ってるわよ」

・「認知症を予防するっていうアレね」

・「それが、脳だけじゃなくて足腰も元気になったみたいで。前は毎朝クリニックで井戸端会議だったのに」

・「ほんと、介護予防ブームよねぇ。地域の人が体操とか料理とか認知症予防の教室を開いてるって。あの太極拳もきっとそうよ」

・「空き家を使った交流サロンみたいのもあるんですって。隣のうちは、おばあちゃんと小学校の女の子がいっしょに参加してるって」

・「やっぱり、年をとっても住み慣れた場所で元気に暮らせるっていうのが一番ね」

・「年寄りが元気だと、私たちも助かるわよねぇ」

・「老人ホームも増えてきたから、昔みたいに1年も2年も入所できないなんてことはないみたいね」

・「10 年前には、社会保障はパンク寸前なんて言われていたけど、どうにか見通しが立ってきたっていうし」

・「将来に安心感が広がって、ここ数年は出生率もずいぶん上向いてきたそうよ」

・「あら、そう。ウチももう一人がんばっちゃおうかしら」

03　障害者福祉の充実

概要

作成：障害福祉課

シナリオのタイトル：共同型社会構築コース

サマリー（概要）

・障害者が地域で安心して生活できるように、心のバリアフリーを推進するための市職員や民生委員・自治会役員などを対象とした、障害ごとの特性や支援方法などの研修会や、企業の採用担当者や障害者支援担当者を対象とした、障害者雇用に対する公的な支援制度や障害者の就労を支援するための方法などの研修会など、障害者を社会で受け入れていくための啓発を拡充するとともに、地域や企業でのトラブルの際の相談窓口や生活を支える福祉サービスを充実していく。

・この結果、企業での障害者の雇用が徐々に拡大するとともに、企業での就労が困難な障害者が工賃作業を行う就労継続支援事業所や地域活動支援センターへの企業からの発注が増加していく。

・また、身体障害者や精神障害者も利用できる障害者グループホーム・ケアホームが、徐々に設置されていく。

・さらに、地域の自治会活動などでは、障害者の受入体制が整備されていき、障害者も地域住民としてできる役割を担う社会が構築されていく。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「障害者の増加」「高齢化」「障害の重度化」「核家族化」「自立支援」「施設から地域へ」

「施設から就労へ」「社会参加」「発達障害」「制度の狭間」「障害者福祉費の増加」

平成23年ごろ

・Aさん家族は、42 歳のAさんと 44 歳の夫Bさん、12 歳のC君の 3 人家族。C君は知的障害があり、小田原養護学校の中学部 1 年で、A2の療育手帳を持っています。普段は気持ちを伝えることができるのですが、理解できないことや自分の思いが伝わらないとパニックを起こすことがありす。学校の夏休みが近くなり、AさんとBさんは話し合っていました。

・「夏休みの間、Cをどうするか。去年と同じように児童デイサービスに頼むか。」

・「でも、希望者が多くて、毎日は難しいみたいよ。去年は週 2 回だったわね。児童デイサービスが利用できない日は移動支援を利用してプールに連れて行ってもらったりして、それも無理な日は私がパートを休んで家にいるようね。」

・A子さんは市役所の障害福祉課に相談に行き、C君の夏休みの過ごし方について相談しました。

・市によると、「障害児に対し集団生活の訓練などを行う児童デイサービス事業所は市内に5か所あり、そのうち特別支援学校や小学校に通っている児童が利用できる事業所が3か所ある。また、児童デイサービスは1回の利用が2時間から3時間の場合が多く、昼間ずっと預かるものではないが、市が昨年度から児童デイサービス事業所などと契約して行っている夏休みの日中一時支援事業と組み合わせて利用すれば、日中ずっと見てもらえる。ただし、利用希望者が増えているので、毎日の利用は難しい。国でも、障害児に対する放課後や夏休みの支援型の児童デイサービスを検討しているので、今後児童デイサービス事業所が増えるかもしれない。」とのことでした。

・C君は、今年は、児童デイサービスと日中一時支援を週3回利用できることになりました。

◇　◇　◇

・K民生委員さんは、地域の精神障害者Lさんのことで、近所の人から相談を受けました。Lさんは、38 歳。うつ病を患い、家に閉じこもっている生活が続いていますが、先月、同居していた母が亡くなり、今後誰がどのように面

倒を見るか、とのこと。K民生委員さんは、市役所障害福祉課に相談に出かけました。

- Lさんは精神障害者に該当するので、居宅介護サービスとしてホームヘルパーを頼むことができるということでしたが、K民生委員さんは、精神障害者と接した経験も少なく、どう接したらよいかわからないので、市のケースワーカーに訪問してくれないかと頼み、一緒に訪問することにしました。
- Lさんは、思いのほか家の中も整理されており、落ちついていました。病院へは月に 2 回通院していますが、デイケアの利用も相談して見ることとしました。また、買い物や調理が困るので、居宅介護サービスを利用することとした上、民生委員や市から委託を受けた相談支援事業所の指導員や市のケースワーカーが定期的に訪問し、様子を見守ることになりました。
- K民生委員さんは、Lさんのように、単身生活に不安がある障害者はどうすればよいかとケースワーカーに尋ねました。
- その答えによると、障害者が共同で生活する障害者グループホーム・ケアホームがあるが、残念ながら精神障害者が利用できるグループホームは、県西地域にはまだないとのことでした。また、国の制度改正で身体障害者もグループホームを利用できるようになったが、バリアフリーなどの関係で身体障害者が利用できるグループホームも市内にはまだないとのことでした。精神障害者のグループホームを作るには、地域の住民の理解と協力も必要とのことで、今度、自治会長や民生委員を対象に、身体障害、知的障害、精神障害といった障害ごとの特徴や障害者への接し方などの「こころのバリアフリー研修会」を行うので、ぜひ参加してくださいと誘われました。
- K民生委員さんは、心のバリアフリー研修会に参加しました。
- そこでは、どういった障害の方は、どういった手助けを求めているかや、どのように支援したらよいかなどが説明され、障害者が地域で生活していくためには、健常者の側の理解が不可欠であることが説明されました。
- それと同時に、市としては、地域の自治会の防災訓練や清掃活動などを、障害者にも周知して、参加できる方には参加してもらい、障害者も地域の一員としてできることをやっていくような社会を作っていきたいとの説明がありました。
- K民生委員さんは、Lさんとどういうふうに付き合っていくか、少しわかったような気がし、また、様子を見に、訪問してみようと思いました。
- しばらくして、Lさんが病院のデイケアと地域活動支援センターにそれぞれ週2回ずつ通い出したとの連絡が市からありました。

平成28年ごろ

- C君は小田原養護学校高等部の 3 年生になりました。今年は、卒業後の進路を決める大事な年です。幸い、C君は、企業などでの実習でも今までのところ大きなトラブルはなく、実習先での評価も好評価を得ていると聞いていますが、Aさん夫婦は何かのきっかけで職場でパニックを起こすことがないか心配しています。
- 「障害者の就職は、まだまだ大変のようだな。制度としては、10 年ぐらい前から障害者雇用率の義務付けが強化されてきているけれども。Cも、最近はパニックを起こすことは少なくなってきたが、実習先で起こさなければよいが。」
- 「この間、担任の先生から、実習受入れの経験が浅い企業のかたは障害者への接し方の知識が少ないので、学校では担当教諭が訪問する回数を増やすなどして、具体的に教えるようにしているらしいわ。最近は、実習先の担当のかたも事前にいろいろ勉強をしてくれて接してくれることが多くなってきたと話していたわ。市でも、企業の人事担当のかたなどを対象とした、障害者雇用に対する公的な支援制度や障害者を雇用した場合にどのように支援すればよいかなどの障害者雇用の研修会も開催し始め、障害者を雇う特例子会社を作ろうとする企業に、設立のための支援をし始めたらしいわ。」
- A子さんは、先日の新聞に、小田原市役所で、知的障害者や精神障害者も含めた障害者の職員を募集するという記事があったことを思い出しました。夫のB男さんが働く会社でも身体障害者が働いていますが、A子さんは知的障害者や精神障害者を雇う企業がふえることを願いました。A子さんは、どういう企業が障害者の雇用に積極的か調べて見ようと思い、インターネットで調べると、市のホームページに障害者雇用促進優良企業表彰の記事がありました。A子さんは、こういう企業の製品を買うことも応援につながらないかと考えました。

◇　◇　◇

- ある日、K民生委員さんは、市の障害福祉課と社会福祉法人の職員の訪問を受けました。K民生委員さんの担当地域に、精神障害者を対象としたグループホーム・ケアホームを作りたいとのことで、地域の住民への説明会

を開きたいということで、自治会長や民生委員に説明しているとのことでした。

- K民生委員さんは、民生委員としてベテランの域に達し、高齢者や障害者など、いろいろなかたに接してきましたが、障害者のグループホームというものは、近くにありません。K民生委員さん自身、精神疾患が悪化した住民のトラブルで苦労した経験もあり、精神障害者のグループホームができて、地域は大丈夫かと質問しましたが、そのグループホームに入る人は、精神科の病院に長く入院している人だが、家族がいないために退院ができないだけで、病状は非常に落ち着いているので、日常生活で様子を観察してくれる人がいれば十分生活できる人であるとのこと。また、グループホームと病院と連携し、万一何かトラブルがあれば病院で対応することになっており、相談支援事業所や市の障害福祉課でも相談に乗る。説明会のときに、入居を考えている障害者に話をしてもらうので、説明会を開催させてほしいとのことでした。
- 説明会では、精神障害者が、退院して生活するための訓練として、外出して買物をしたり映画館を利用するなどをしてきたこと、また、最近は毎日地域活動支援センターに通って箱づくりなどの軽作業を行っていることなどを話し、退院して生活したいという希望を話しました。その様子は、健常者と変わりないものでしたが、地域の住民の中には、何かあったらという思いから、反対の意見も出され、病院や市役所、社会福祉法人からの説明もありましたが、なかなかまとまりませんでした。
- K民生委員さんが、地域として協力した気持ちはあるが、やはりトラブルが心配で、今日だけではわからないので、住民の代表が地域活動支援センターでの様子を見学させてもらい、社会福祉法人、病院、相談支援事業所と市役所がどういうふうに連携してグループホームをバックアップしていくのかも具体的に示してもらった上で、地域として考えたらどうかと話すと、そうしようということになりました。
- その後、代表が地域活動支援センターを見学した上、2回ほど説明会が開催され、精神障害者のグループホームが作られることになりました。

平成34年ごろ

- C君は、箱根のホテルに勤め、部屋の清掃やベッドメーキングといった作業を行っています。最初は、先輩の従業員となじめず、仕事を休んでしまったこともありましたが、会社のジョブコーチや就業・生活支援センターにも相談をしながら、何とか続けてきました。
- 今では、実習に来る養護学校の後輩に、先輩として体験を話す役もこなすようになりました。この役をやりだしてから、だいぶ自信もついたようです。
- C君ががんばっていることで、会社としても障害者の雇用を増やそうとしているようです。

◇　◇　◇

- K民生委員さんは、今日は毎月定例のグループホームとの懇談会の日です。精神障害者のグループホームができることになったときに、どんなトラブルが起こっても、グループホーム、地域、病院、市役所が話し合って解決していこうということで、毎月懇談会を開くことになったのです。
- この間、まったくトラブルがなかったわけではありませんが、今では、グループホームの住民も地域の行事に参加し、一人暮らしのお年寄りの話相手になってくれることもあります。K民生委員さんは、あのときいろいろ話し合ってよかったと思っています。
- 隣に、市の障害福祉課の職員が座っていたので、K民生委員さんが話しかけました。
- 「このグループホームができるときには地元は大変な騒ぎになったが、今では地域の活動の担い手にもなってくれて、よかったと思っている。」と。
- 「そうですね、ほかの地区でも障害者が地域の活動に参加することが多くなってきています。障害者をサポートしようという地域も増えてきていて、この間は、ある地域で、障害児の学校の登校下校を地域のお年寄りが交代で付き添ってやれないかという話を投げかけたら、考えてみようということになって。市でも、うまくいくとよいと思っています。」
- 「その話は、うちの地区でも考えられないか、自治会長にも話してみるよ。」

◇　◇　◇

- 発達障害者の増加や高齢の身体障害者の増加などにより、障害者数は、毎年増え、障害者福祉に必要な予算も増えているようです。市でも、なかなか大変とのことですが、小田原市では、地域の住民にも協力を求め、また、障害者やその家族にもできる範囲で地域の活動に参加を求め、地域の支えあいを進めながら、障害者福祉を充実していこうとしています。

04　健康づくりの推進

概要

作成者：健康づくり課

シナリオのタイトル：①個人の健康観は変わる？　②市民は「健康なまちづくりの担い手」

シナリオ①:「個人の健康観は変わる？」

サマリー（概要）

・小田原市の健康への意識は、病気の予防から健康づくりへと年々変化してきております。保健センターを拠点とした保健事業だけではなく、地域においても保健師を中心としてさまざまな事業を活発に展開しております。また、健康に関するイベントには地域住民も参加意識が高く、小田原市周辺地区住民も含めて大勢の参加者が来られております。小田原市では、市民一人ひとりの健康への意識が高まることが地域全体の健康状態の向上につながると考えております。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「経済環境」「健康ブーム」「食への関心」「時間に追われる生活」「少子高齢化」

平成23年ごろ

・Aさん（45歳）は、結婚して東京から小田原に嫁いで20年目になります。嫁いだころは、田園風景がまだみられる場所に住んでおり、子育て中は自然豊かな小田原で育児をしており、子供との会話を楽しみながら、歩いてめだかの学校によく連れて行きました。

・夫（47歳）は土日以外に休みがなく、東京勤務のため、朝は早く家を出て、夜は毎晩遅く帰宅し、ウィークデーの大半は一人で育児をする環境でした。Aさんは子供の健康には気をつけていたものの、自分の健康にはまったく無頓着で、夫の職場の主婦検診もまったく受けたことはありませんでした。TVを見ながらM氏の健康情報を聞くのが日課で、体によい食品があると真っ先にスーパーに買いに行っておりました。

・ところが、最近、友人の勧めで特定健診を受診したところ、腹囲・高血圧・脂質異常症で再度保健指導を受けることになりました。健康に自信があったAさんは、検査データが悪かったことに、とてもショックを受けました。

・ちょうどそのころ、夫も会社のメタボ健診で保健指導を受けることになりました。長年の不規則な生活で食事も毎日外食ばかりで、土日は疲れて一日中ごろごろしており、すっかり肥満体型になっておりました。またタバコも一日3箱吸っており、職場は男性ばかりで吸っている割合も高く、受動喫煙防止条例ができたことにより、内心、タバコをやめなければならないという危機感に襲われていましたが、皆が吸っているのでまだ、大丈夫と、毎日吸い続けておりました。とうとうAさんの夫も奥さんと同様に保健指導を受けることになりました。

・一方、Bさん（50歳）は一人暮らしの義理の母（74歳）が脳梗塞による寝たきり状態となり、介護保険を利用するようになりました。今まで義母は元気に畑に出て農作業をやっていたので突然の病気の発症に驚きを隠せません。もっと早く義母の体調をわかってあげていたらこんな病気にならなかったと後悔しておりました。

・義母のことでまったくは健康に関心がなかったBさんは、寝たきり状態になった義母の状態からももっと早く病院で健診を受けていれば病気の治療ができたのにと後悔する日を送っていました。

・Bさんはある日、義母の受診の付き添いで病院の待合室にいたところ、友人のCさん（50歳）会いました。Cさんの母も病気（透析）になって、ひとごとだと思っていた介護という現実をつきけられました。はじめて親の病気を通して健康のありがたさを痛感し、薬に頼る前に何かできないか考えるようになりました。

・Cさんは以前より保健センターの健康講座を参加しており、そこで知り合った保健師に介護のことを相談しておりました。保健師はCさんの家に家庭訪問し、介護者の話をよく聞きながら、介護方法を教えてあげました。またヘルパーやデイサービスなどの介護保険のサービスの種類や地域包括支援センターのケアマネジャーを紹介

したことで、介護の負担がずいぶん軽減したことをBさんに話しました。

- Bさんは一人で介護をしなければいけないと思っておりましたが、Cさんの話でずいぶん楽になりました。さっそく、Bさんも自分の地区の保健師に家庭訪問してもらい、寝たきり状態の義母の相談をすることで、介護を一人で抱え込まないことについてアドバイスを受け、身近なかかりつけ医に定期的に往診してもらうことになりました。
- ある日、Cさんは買い物帰りに、健康イベントをやっており、立ち寄ったところ、以前、家庭訪問してくれた保健師が会場で健康相談をしておりました。この場で、保健師と話をしているうちに、幸せな生活をするためには家族の健康や自分の健康がとても大切だと気づき始めていました。

平成28年ごろ

- Aさんは、特定健診を受けた後の特定保健指導で栄養指導・運動指導などを受け、毎日、体重計にのることや腹囲を測定することを保健師と栄養士からアドバイスを受けました。はじめは「めんどくさいな」と思っていましたが、夫と一緒ならば「何とかやってみるか」、「どちらが早くメタボから脱出できるか」など夫婦で話し合うようになりました。
- 5年前は夫を駅まで毎朝車で送っていましたが、朝、少し早起きして夫と一緒に駅まで歩くようになりました。この朝のウォークは効果てき面で体重が1か月に 1kgずつ減少してきました。体重が減ると見る見るうちに検査データも改善し血圧もコレステロールも正常値に戻ってきました。
- 何よりうれしかったのは 9 号サイズの洋服をまた、着られるようになったことです。最近では娘の洋服も一緒に買い物に行き、交換したりすることができるようになりました。
- また、小田原市の「ウォーキングタウンおだわら散策マップ」を見ながら土日には夫と一緒に、富士山を見ながらウォーキングすることが日課になってきました。以前は、夫とはめったに話もしない状態でしたが、子供も成人し、二人の生活を楽しむようになってきました。また、歩くことで今まで車では通り過ぎて、見ていなかった自然の景色や草花や家並みなどをゆっくり探索するようになり、若いころのように、夫との会話も弾むようになってきました。
- 夫も以前は、会社ではエレベーターを使用していましたが、朝は階段で 5 階まで早足で昇るようになりました。
- 最近の特定健診では腹囲も 85cmプラス 1cmとなり、もう一息でメタボ脱出です。
- 一方、Bさんは介護にも慣れ、介護保険で上手にサービスを使うようになっていました。義母の状態からBさんの夫も高血圧の傾向が出てきており、塩分控えめの食事を作り義母にもとても好評です。
- また、義母が耕していた畑も今はBさんが夫と一緒に作物を育てています。今まで野菜など作ったことがない二人でしたが、義母に種まきや苗の植え方など、いろいろ教えてもらいないながら、今ではご近所に配れるほど作れるようになりました。食卓にはいつも自分たちで作った野菜がたくさん出てきています。
- Bさんは最近、市から送付されてきた黄色いはがきのがん健診を今年は娘と一緒に受けようと思っています。娘さんも最近の映画で、若い人でもがんになることを知り、予防のため健診を受けようと思いました。一人では不安なので二人で行くつもりです。
- Cさんは、透析になった母をみており、原因であった糖尿病にならないよう、気をつけております。市で行っている糖尿病週間行事には毎年参加し血糖値と検尿をしており、今のところ異常値は出ていません。
- Cさんは最近、フィットネスクラブに通うようになりました。一週間に 3 回ほどヨガ教室に通い教室の友達もできました。体を動かすことで、肩こりや頭痛もなくなり、気分転換にもなります。また、いつもと違う友達と会話することで、精神的にも肉体的にも疲れがたまらないようになりました。
- 特に、食事には気をつけており、手作りで安全な食品を選んで作るようにしています。
- Bさんは、毎月一回かかりつけ医が来ることで、義母の脳梗塞の健康管理をしていただき安心して介護ができるようになりました。また、かかりつけ医が介護者にいつも声をかけてくれることで、介護者の健康状態も一緒に相談にのってもらい、負担感が少なくなりました。介護保険での住宅改修で手すりもつけ、今ではトイレまで義母は歩いて行けるようになりました。

平成34年ごろ

- Aさんはとうとうメタボから二人とも脱出することができました。夫はまだ、タバコはやめられませんが、以前 3 箱吸っていたタバコも今では 1 箱までになりました。これも保健センターでの禁煙チャレンジに参加し今でも保健師

にサポートしてもらっているためです。受動喫煙防止条例が施行され、あちこちに喫煙できる店と禁煙の店の表示もされるようになりました。娘さんも結婚し孫が生まれたら、一緒に外出する機会を楽しみにしており、かわいい孫にタバコの煙を吸ってほしくないし、会社内での喫煙所もなくなったため今年こそはやめるつもりでがんばっています。

- Aさんの夫は会社に行くと外食もしますが今ではできるだけカロリー表示してあるものを選び、どんぶりものだけでなく、野菜を一緒に食べるようになりました。また、昼は昼食もAさんの作った手作り弁当をできるだけ持参するようになりました。残業は相変わらずありますが、朝のウォーキングは欠かさず続けています。
- Aさんは、10 年前、健診でメタボと診断され、10kg やせて、9号サイズの服が着れたり、検査値が改善し、息切れしなくなったことなど、改善されたことを近所の人や友人に教えてあげました。また、夫も会社でのメタボ健診からの改善例として表彰されました。今年は、病院受診しなくなり浮いたお金で、夫と海外旅行に行く計画をしております。
- 二人で歩いているだけではもったいないと感じ、今度はご近所のご夫婦も誘って一緒にウォーキングをするようになりました。また、1 泊2日で小グループでのウォーキングミニ旅行も今年は計画しております。
- Bさんは脳血管疾患の後遺症の会の自主グループに参加するようになりました。この会に参加することで介護した者しかわからない介護者の気持ちがわかったり、患者の気持ちがわかるなど、共感できる場として毎月かよっています。Bさんの義母もだんだん外出する機会が増え表情も明るくなってきました。
- Cさんは、ミニ介護家族の会を発足し、地域の介護経験のある男性や女性を集めて時々話をしたり、お茶を飲んだりして愚痴を話したり、介護者がいつまでも元気で健康にできる介護方法を学び心のリフレッシュができるようになりました。

シナリオ②:「健康なまちづくりの担い手」

サマリー（概要）

- 小田原市の健康ブームはますます盛んになり、健康番組は毎日のように TV から流れています。すべての市民が健康で明るく幸せな生活を送るためには、自分の健康はもちろんのこと、家族の健康、さらには地域の健康も市民が自ら考え、工夫した健康づくり活動が進んでいます。健康づくりサポーター・健康おだわら普及員・食生活推進団体などが一緒になって地域の健康課題を考え、自分たちの地区にあった健康づくり事業の展開をはじめました。病気がある人もない人も一緒に楽しめる機会が増え、活気にみちた健康なおだわらのまちが活動を進めています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「体の健康」「心の健康」「地域のつながり」「行政」「食育」「健康ブーム」

「健康なまちづくりの担い手（健康おだわら普及員・食生活改善推進団体・健康づくりサポーターなど）」

平成23年ごろ

- 小田原市では生活習慣病が死亡原因の六割以上を占めるようになったことから、生活習慣病の改善・保健予防行動の継続が重要視され、「いきいき健康ひろば」という事業をはじめました。
- 「いきいき健康ひろば」の参加を通して個人の生活を見直し、問題を認識し、改善していくことを目的としています。運動・栄養・ストレス対処などを含み、最終的には個人の成果を自身でも評価できるような体力・身体測定を行う内容で実施を始めました。
- Dさん（37歳）は、結婚して東京から小田原に嫁いで 10 年目になります。夫の仕事は農業で無農薬野菜を作っております。嫁いだころは、東京から嫁に来ることが珍しい地域だったせいか「地の人か」「よそから来たのか」と近所の人からよく聞かれていました。
- Dさんはある日、「いきいき健康ひろば」に行き、保健師から血圧が高く、このままだと生活習慣病になって脳梗塞や心臓病になると指摘されました。まだ子供が小さいDさんは、びっくりし、何とか子供のため家族のためにもっと生きなければ、大変なことになると思い、その日から、健康に関するいろいろな情報を集め始めました。

・手始めに、自分の血圧を改善するため食事を減塩にし、野菜を多く取ること、また、運動経験のなかったDさんはウォーキングを家の周辺で一週間に 1 回程度から始めました。

・ある日、地区の婦人会長さんが家に来て、食生活改善推進員にならないかと持ちかけられました。嫁に来て 10 年とはいえ、近所以外の地理も知らず、友達が少なかったDさんは、小田原にもっと友人がいたらいいなと思っていましたし、自分の血圧が高かったので食生活も改善できるならと快く引き受けました。

・Dさんの夫は若いころから農業をしており、腰痛が時々出ておりました。夫は農作業が忙しく「いきいき健康ひろば」に参加できなかったものの、Dさんが「いきいき健康ひろば」に行き、専門的にアドバイスを受けていたことを知っていました。

・Eさん（45歳）は小田原の地元で生まれ、地元の人と結婚しずっと小田原市で生活している主婦です。

・ある日、自治会長さんがEさんの家にやってきて「健康おだわら普及員をやってもらえないか」と相談されました。もともと引っ込み思案だったEさんははじめ断りましたが、何度も説得する自治会長に根負けし、受けることになりました。

・はじめは自分の健康に無頓着だったため、自分の地区の健康おだわら普及員は何をすればよいのかわかりませんでした。そのときの地区の担当の保健師に「私は何をすればよいのですか？」と尋ねたところ、「自分のできることから、一緒に考えて活動しましょうね」と言われ、大役を引き受けた重荷が少しずつとれて、相談しながら活動を始めようと思いました。

・まずはいつも送られてくるがん検診を受け、また夫の職場で実施している主婦健診も積極的に受けるようになりました。初めてがん検診を受け、病気になる前の予防の大切さに気づき、友達にも誘っています。

・夫（37歳）は土日以外には休みがなく、忙しいポジションに移動になったため、朝は早く家を出て、夜は毎晩、残業で帰りが遅い生活で精神的に疲れておりました。

・徐々に月曜日は出勤できなくなり、職場から紹介された病院で、うつ状態と診断されました。

・Eさんは夫の病気を治すための、きっかけづくりを模索し始めました。

平成28年ごろ

・「いきいき健康ひろば」も 5 年目に入り、生活習慣の改善や疾病にとどまらず、事業を通して住民相互の交流や、仲間意識の高揚、地域の連帯感の強化とともに、地域での健康づくりの輪ができつつあります。

・Dさんは食生活改善推進団体に所属して5年目になります。生活習慣病の食事作りやメニューの種類も豊富になりました。

・また「いきいき健康ひろば」に食生活改善推進団体の仲間と参加することにより、だしを多く使った減塩食や運動実践することで血圧値が見る見るうちに正常値に下がってきました。

・食生活改善推進団体の仲間もたくさんでき、活動を通して仲間に会うことが楽しくなってきました。自分自身の体の変化を近所の人や友人に伝えると、ぜひ、食生活改善推進団体に参加したいという地域住民が増えてきました。

・腰痛のあった夫も「いきいき健康ひろば」に参加し、腰痛予防の運動を教えてもらうことにより、農作業での合間をぬって運動し、改善がみられるようになりました。

・Eさんは、はじめ、健康おだわら普及員は何をすればよいのかわかりませんでしたが、健康おだわら普及員を三期継続することで自分の体調にも気を配ることができ、家族の健康も考え、地域の健康を考えると、もっと継続して行うためには地区の食生活推進団体とも一緒に活動することが効果が出ると思い、声かけをしてみました。

・地区の食生活改善推進団体に声かけすると、快く一緒にやりましょうといってDさんの地区をモデルとして、少しずつ共同で健康づくり事業を実施する機会が増えてきました。

・また、地区の健康の情報を収集し企画していくボランティアとして、健康づくりサポーターにも参加してもらい、その地区の健康問題にあった、健康機器での測定会や試食の食事作りなど実施するようになりました。

・Dさんの地区で開催している事業で、「よかった情報」はだんだん地区全体に広まっていき、健康について専門家のアドバイスがほしい人は「いきいき健康ひろば」に参加することで専門的知識や健康相談を受けるようになりました。

・Eさんの夫は、忙しい職場でうつ状態となり、休みがちになり休職となっておりましたが、転職を決めました。しかし以前の職場と違い、なかなかなじめず、退職し今では、自然食のお店を開店をするようになりました。

・今までの会社勤めとは、違い、規則正しい生活の元、地元の旬の食品を取り扱う店を立ち上げ販売するようになりとても好評で、市外からも口コミで健康を意識する住民がだんだん、買い物に来るようになりました。

・お店の仕事を通じて、買い物客から、自分の健康を振り返るきっかけづくりをもらったりしています。

平成34年ごろ

・健康ブームはますます盛んになって、コンビニやファミレスなどの飲食店では、カロリー表示をした食品やバランスのよいチョイスメニューの見本が提示されるようになりました。

・商店街でも地場産の食品を扱っている店やカロリー表示をした店には、健康マークを要望で渡し、貼るようになり、「いきいき健康ひろば」の申し込みもその店で、できたり、地区の健康おだわら普及員さんの連絡先がのっており、気軽な場所で、健康チェックや簡単な相談もできるようになりました。

・「いきいき健康ひろば」も地区の 25 の小学校の空き教室で実施され、地元の食材を使った生活習慣病予防メニューを食生活改善推進団体の地区員さんが作り、キッチンカーで試食品を出したり、体育館では健康おだわら普及員も市民体操や軽いストレッチ体操なども教えるようになりました。

・「いきいき健康ひろば」を参加した卒業生が主体となって、周囲の人にウォーキングを勧めています。

・地区ではウォーキングコースがあちこち表示され、自分の体力にあったコースを選べるようになっています。また、そのときに健康器具の貸し出しを行い、万歩計でどのくらい歩いたかと自分の消費カロリーがわかるようになりました。

・Eさんも夫の病気が改善し、ますます健康づくりの大切さを感じるようになっていました。夫が病気になったときに気軽に相談できる人として、一定の研修を受けた健康おだわら普及員が窓口となり、保健師へ精神面での相談もつなげる役割も担うようになりました。

・健康おだわら普及員も退任した今では、OB 会を立ち上げ、地区の特色ある活動を、同じ地区の普及員と一緒になって行い、自主活動をすすめています。

・健康づくりサポーターが地区の健康問題と健康づくりの状況をチェックし、健康データマップを作成して、回覧をまわしています。

・健康おだわら普及員・食生活改善推進団体・健康づくりサポーターが一体となって地域に根ざした健康づくり事業を展開しています。

・健康づくりの考え方も、「行政任せでなくて自分たちで何かをする」という市民一人ひとりが、自助の必要性も自覚し始めました。

・また、地域全体で考えていく問題として、行政は地区の健康づくり事業を住民パワーでは足りない部分を支援していくような働きかけに変化していきました。

・行政では、これからも住民の要望を把握し、参加者が楽しく継続でき、仲間意識や連帯感の高揚につながる事業としてどのようなものが適しているか、また、効果的な活動を推進するために、身近などのような場所で実施していくか市民と一緒に考えていきます。

05　地域医療体制の充実

概要

作成：経営管理課

シナリオのタイトル：地域医療の充実：発展型

サマリー（概要）

・小田原市を含む県西地域では全国的な医師・看護師不足などの影響により、分娩を取り扱う医療機関や二次救急を担う医療機関の減少、また医師不足や診療報酬制度の見直しにより市立病院など自治体病院の経営環境の悪化が徐々に進行していた。こうしたことから小田原市では、平成 20 年 11 月に市民、有識者などからなる「地域医療体制の整備に係る懇談会」を設置し、救急システム、地域医療連携及び在宅医療などの課題と市立病院との係わりについて協議を行った。

・平成23年度にスタートした新総合計画では、医師会をはじめとする地域保健医療関係との協議によりこうした課題に対して市民、行政、医療関係者が取り組むべき方向性を明らかにし、様々な取組を行っているところである。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「医師不足」「産科医・小児科医の確保」「救命救急センター」「在宅医療」「地域医療連携」

平成23年ごろ

・小田原市では新総合計画がスタートし、県西地域の保健医療計画を統括する保健福祉事務所、地域医師会、その他保健医療関係者や市立病院を含む市行政担当者などによる協議が活発化している。

・県西地域における産科・小児科を含む医師不足、看護師不足は国・県の取組によりようやく改善の兆しが見え始めたが引き続き地域連携により限られた医療資源の効率的な活用が行われている。

・市立病院では、平成21年4月にスタートした救命救急センターが軌道に乗り専門医の増員などにより順調な運営を続けている。専門医の確保や高度医療機器等を用いた専門医療を提供などにより地域がん診療連携拠点病院などの基幹病院としての役割を積極的に果たしている。

・市立病院では国の公立病院改革ガイドラインに基づいた経営改革に取り組んでいるおり医師不足にも歯止めがかかったことから経営も軌道に乗りつつある。

・市内 S 地区に住む N さん（35歳、妻32歳共働き、母69歳、長男2歳保育園児）は、市外の IT 関連企業にお勤め、妻は、市内の公立学校の教員をしています。N さんのご家庭では、N さんの母が先日脳梗塞の発作で市立病院の救命救急センターに入院し早い段階で適切な医療を施すことができたことから、無事一命を取り留め、今後のリハビリをどうしようか思案中です。また妻は、現在2子目を妊娠中で市内の民間病院で分娩をする予定です。

・妻「お母さんが脳梗塞の発作で倒れたときはとてもあわてたけれど、市立病院の救命救急センターのおかげで大事に至らなくてよかったわね」

・夫「今、市立病院の相談室で今後のリハビリのことを相談しているけれど、市立病院とリハビリを行う病院との連携もスムーズに行っているようで転院先も紹介してもらえるとのことだよ。元気なときには医療や病院のことなど考えたこともなかったけれどいざとなると本当はとても重要な問題だということがわかるよ」

・妻「このあいだも夜に A 男が発熱したときは医師会の休日夜間急患診療所のおかげで助かったわ。日頃からかかりつけ医を決めておくことが大切ね」

・夫「医師会休日夜間急患診療所と市立病院が連携して行っている小児の24時間救急体制や市立病院が地域に必要な小児科医の確保を担っていることは、全国的にも誇れる制度なんだ。我々市民も病気や怪我の状態に応じて医療機関を選択したり安易に救急車を呼ばないなどの協力が必要だね」

・妻「私がかかっている産科の先生も今のところ順調だけれど、問題があれば市立病院の産科を紹介するから安心するように言ってくれたわ」

・夫「二人目が生まれるまでにはお母さんもリハビリを終えて元気で帰ってくるとうれしいんだけどね。君の育児休業明けまでには保育園をお願いしないとね」

平成28年ごろ

・国・県では、引き続き医師不足や診療科や地域による偏在を解消するため様々な施策を実施している。その効果により地域の基幹病院における医師不足も次第に解消傾向にある。市立病院でも医師確保に大きな支障をきたすような状況はなくなった。

・Nさん一家では、平成23年に脳梗塞で入院したNさんのお母さんも軽い後遺症を抱えながらも家庭復帰し、共働きのNさん夫婦やNさんの二人のお子さん（7歳小1、4歳保育園児）とともに元気に暮らしています。

・お母さん「リハビリを終えて今は医師会の地域連携室で紹介していただいたO医院で定期的に診てもらっているので安心だわ。O先生からは今度市立病院で念のためにMRIの検査を受けるようにとインターネットを利用した予約システムで予約まで入れてくれたので助かるわ。市立病院では開業医の先生のところでできない検査の大半はインターネットを利用した予約システムで予約ができるそうよ」

・妻「大きな病院だと待ち時間も大変だから予約をしてもらえるとありがたいですね」

・夫「このあいだの市報によると医師不足も徐々に解消に向かっているらしいね。市立病院も産科、小児科、救急などのほか専門的な医療を担当する医師が少しずつ増えているらしいね」

・妻「お医者さん一人を養成するには、6年間の医学教育と免許取得後の2年間の前期研修、2年間の後期研修など10年近くかかるらしいけど私たちも理解が必要ね」

平成34年ごろ

・国・県では、引き続き医師不足や診療科や地域による偏在を解消するため様々な施策を実施している。その効果により全国規模で医師不足の不安も解消されるようになった。市立病院でも基幹病院として十分な医師の確保が可能となったことから地域医療機関との連携も充実している。

・市民も積極的にかかりつけ医を持つなど地域医療機関と基幹病院との役割分担を理解して適正な医療機関の利用が進んでいる。

・県西地域では、医療連携を推進するために医療従事者同士で必要な患者情報を共有化するための電子カルテシステムの導入が検討されている。

・Nさん一家では、平成23年に脳梗塞で入院したNさんのお母さんも軽い後遺症を抱えながらも家庭復帰し、共働きのNさん夫婦やNさんの二人のお子さん（13歳中1、10歳小4）とともに元気に暮らしています。

・最近脳梗塞の再発により寝たりおきたりの生活になりましたが、介護保険制度の利用や訪問看護、地域医療機関による往診などを利用し落ち着いた生活を送っています。

・妻「市役所や病院のおかげで介護保険が利用できるようになってよかったわ。訪問看護や往診の先生もありがたいわ。おかげで私も仕事を辞めずに済んでよかったわ」

・夫「医療機関の地域連携も進んで病院と診療所の役割分担もずいぶん変わったね。往診をしてくださる先生も10年前に比べてとても増えたそうだよ」

07　災害に強いまちづくり

概要

作者：防災対策課

シナリオのタイトル：地域防災力の強化

サマリー（概要）

・市が、防災リーダーの育成や、小規模な防災訓練への支援などを活発に行うことにより、市民の中に防災対策に主体的に取り組もうという動きが出てきます。こうして、防災訓練が地域主体、市民主体のものになっていき、市の防災対策に対する市民からの提案も活発に行われるようになって、地域防災計画の見直し等が適時行われるようになります。また、地域ごとの避難所運営委員会もさまざまな住民の意見を取り入れるようになり、訓練と運営方法の見直しとが連動しながら進められていくようになります。やがて、すべての地域で、災害時に全住民がなんらかの役割を担うような仕組みができ、住宅の耐震化も進んで、市の防災対策も充実していきます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「自主防災組織」「地域コミュニティ」「市民の防災意識」「防災資機材」「学校教育」「耐震化」「防災情報の発信」

平成23年ごろ

・会社員のＡさんは、今年から地元自治会の防災リーダーを務めることになりました。これまで仕事が忙しく、地域の行事など、ほとんど参加してこなかったのですが、子供の学校行事に参加することが増えてから、地域の人たちと話す機会も増えるようになり、親しくなった自治会長に頼まれて、引き受けることになったのでした。

・春から何回か市の研修会があり、救出や応急救護などの実習も体験して、A さんも防災リーダーとして、自信をつけてきたところでしたが、秋の連合防災訓練で、三角巾を使った救護法を指導することになり、改めて自分の知識がうろ覚えだったことに気付きました。その場は、消防団員の方が手助けしてくれ、なんとか乗り切れましたが、その団員が、実は近所の商店のご主人だったと知り、A さんは驚くとともに、自分ももっと防災リーダーらしくなってみようと思うようになりました。

・それからというもの、A さんは、防災のことについて、自分なりに勉強を始めました。小田原市では、ここ数年、広域避難所となっている学校施設だけでなく市役所の庁舎など、公共施設の耐震工事も進められていること。自治会を通じて防災マップや河川のハザードマップが配られていること。市内の各地域の情報は電話が通じないような場合でも、無線機や防災無線柱の送受信機などで市役所に連絡がとれるようになっていること。防災無線で流れた情報は FM 小田原や小田原ケーブルテレビでも同時に放送されるほか、携帯電話のメールサービスでもすぐに流れること。古い木造住宅の耐震工事をするときに補助金をもらえる制度があること・・・などなど、どれもＡさんには初耳でしたが、以前から広報小田原や市のホームページでお知らせされていることでした。

・また勉強を進めるに従って、Aさんはいろいろな疑問も持つようになりました。避難所の数や食料は足りるのだろうか？お年寄りや身体の不自由な人は体育館で生活できるのだろうか？一般住宅の耐震化はきちんと進んでいるのだろうか？・・・そして、A さんが何よりも気になったのは、防災訓練に来ない人は、本当に地震が来たらどうするのだろうか？ということでした。

平成28年ごろ

・Ａさんが防災リーダーになって５年が経ちました。以前は、連合会長を始め自治会長が市の防災担当職員と相談して決めていた防災訓練も、最近では、防災リーダーが相談・企画し、機材の調達などの一部の手続きを、市に手伝ってもらいながら進めていくようになってきました。

・防災倉庫の資機材の取扱いや応急救護などについては、身近な自主防災組織での訓練を通じて経験を積ん

でいる住民も増え、防災リーダーが行う指導の手伝いをする人も増えてきました。またAさんたち防災リーダーも、訓練の際の交流から消防団員との情報交換に努めるようになり、自分たちの技術を向上させようという活動を始めていました。

・平成 21 年度の TRY フォーラムで提案のあった地域と事業所や学校との共催による防災訓練も、市と自治会とが協力して調整を続け、数年前に A さんの地域でも実現できることになりました。防災訓練の雰囲気自体が以前とは違ったものになってきました。

・A さんの地域では、今年、広域避難所の運営訓練を実施することになりましたが、学区と区域割が異なる連合自治会での防災訓練との住み分けをどうするのか、地域で議論になりました。しかし、防災リーダーや小学校の PTA 役員など新たに広域避難所運営委員に加わった人たちが熱心に働きかけ、市の職員のアドバイスもあって、連合自治会の訓練と広域避難所の訓練の時期をずらすことと、連合訓練では発災直後の救出救護や災害時要援護者の避難誘導などを中心に実施し、広域避難所訓練ではその後の避難所運営を中心に実施することが決定し、今回の開催が実現したのでした。

・訓練を企画する際に、A さんたちは、たくさんの人たちと話をし、その中で、避難所の運営に必要な仕事を改めて整理しました。その中で、「従来考えられていたように避難所運営委員だけで避難所を切り盛りするのは、とても不可能だ」という意見が多く出、また、「元気な住民がなんの役割もなく、お客さんのように避難所で生活するなんてことはありえない」という意見も出されました。

・訓練では、避難者カードを集める人、パソコンで情報を集約する人、情報を掲示板に張る人、子供たちの面倒を見る人、炊き出しの準備をする人、無線で市の本部に情報を伝える人、救護所で医師の手伝いをする人、ボランティアに仕事を説明する人、、、などなど、参加者全員が役割を持つ訓練となりました。また市の耐震化相談コーナーや震災体験者による講演会にも多数の参加があり、後日、この訓練は、他に参考にしてほしい防災訓練として、広報にも取り上げられました。

・訓練後に開かれた避難所運営委員会では、マニュアルの改正点が多くの委員から提案されましたが、あわせて、洪水の際の避難所の設備について、市に要望していくことが決定しました。

平成34年ごろ

・今日は、防災の日です。A さんは地域の民生委員を中心とする自主防災組織の要援護者避難誘導班のメンバーや、市の地域担当職員といっしょに、一人暮らしのお年寄りの家を訪問し、家具の固定や非常持出袋の準備、協定のある福祉避難所までの避難などの指導をすることになっていました。

・A さんの地域では、数年前から、原則、すべての住民が、自主防災組織のいずれかの班に属することになっていました。A さんの中学生の長女も、救護班に属し、自治会と学校との共催で行われる訓練では、大人顔負けの技術を発揮していますが、日頃の近所付き合いに煩わしさを感じる住民は、まだ少なくありませんでした。しかし、「大災害が起これば、地域とまったく無関係に生活することはできない」と、A さんたちは、一軒一軒話して回り、なんとかこの体制を生み出しました。

・A さんの高校生の長男は、広域避難所の資機材管理班の一員として、市の職員といっしょに資機材の点検に出かけています。以前に比べ、被害想定の見直しで避難所の数を増やしてから、防災用の資機材もかなり充実してきたので、定期的な点検や使用期限を確認する必要がある備蓄品が大きく増えました。食糧のように市で一括で購入して消費期限まで管理しているものと違い、電池や燃料などは、地域の訓練でも適時、使用するので、自主防災組織による定期的な点検も必要なのです。

・先日、災害協定のある都市で地震が起きた際には、小田原市からも職員が派遣され、災害復旧や災害時にも必要な通常業務の手伝いを行いました。A さんも市からの呼びかけで、ボランティアにかけつけましたが、実際の災害現場で家族や家を失った人たちを見て、気持ちを新たにしました。

・市では、必要な都度、派遣職員やボランティア活動をしてきた市民の意見もとりいれながら地域防災計画の改定を行ってきましたが、今回も地域防災計画の見直しと、業務継続計画の見直しを行うことになりました。崩れ落ちた木造家屋をいくつも見てきた A さんは、市内の建築物の耐震化率が100％になることを願って、補助事業の見直しについて提案することを考えていました。

07　消防･救急体制の充実

概要

作成：消防総務課、警防課、予防課、消防署、警備第１課、警備第２課、防災対策課

シナリオのタイトル：

サマリー（概要）

・このストーリーは小田原市に住むＡさんと南足柄市に住むＣさんが主人公です。

・最近、それぞれ身近に起きた消防や救急の出来事を通じて、消防の組織･体制に関心を持ち、年間の救急件数に市消防職員では十分に対応が出来なくなってきたことを知りました。

・Ａさんは、自分にできることは何なのかを探究し、自分のできる範囲で協力することとしました。

・Ｃさんは、市境に居住しているため、近所の小田原市消防署から救急車が来てくれれば･･･と思っていましたが、消防の広域化の効果により、早く救急車が到着できることとなり、問題は解決できることとなりました。２人それぞれ違った目線で消防をとらえています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「消防組織の充実強化」「消防･救急体制の充実強化」「通信･情報管理体制の充実強化」

「大規模･特殊災害応力の充実強化」「救助体制の充実強化」「救急業務の高度化」

「市民自主救護力の向上」「火災予防対策の推進」「消防団体制の充実強化」

平成23年ごろ

・ある日の深夜、小田原市に住む Ａ さんは、近づいてくる救急車のサイレンに気づき目を覚ましました。すると自宅近くに救急車が止まったため、興味本位に駆けつけたところ、2 軒隣のＢさん宅のおばあさんが体調を崩して救急要請したことがわかりました。救急隊員の方が処置を施し、搬送病院を決定すると、あっという間に救急車は出発していきました。次の日、庭に出て元気に掃除をしている Ｂ さんを見かけたので、「大変でしたね。お体は大丈夫ですか？」と尋ねたところ、急に手足がしびれ意識が薄れてしまったようで、家族の方が救急車を呼んだそうです。救急車では、小田原市立病院へ搬送されましたが、検査や点滴等の処置を受け具合がよくなり入院することなく家に帰ってきたそうです。Ｂさんのおばあさんは、「家族の速やかな 119 番通報により救急車が早く到着し、救急隊員の適切な処置と迅速な連絡によって早くに病院が決定し、搬送してくれたおかげです。」としきりに感謝していました。

・Ａさんは Ｂ さんの話を聞き、そういえば以前に妻が具合が悪く消防に救急要請をした際、救急車は直ぐに到着したものの、妻は普段から健康体で、かかりつけの病院がなかったため、医師の不在、救急患者診察中、専門外等の理由で受け入れしてくれる病院がなかなか決まらず、ようやく 5 件目で病院が見つかったことがあったことを思い出しました。自宅に救急車が到着してから 30 分が経過していました。その経験と、今回のＢさんの話を比較してみると、救急車の到着時間や病院までの搬送時間が以前に比べ早くなった？と感じたため、小田原市消防本部に直接聞いてみると、「平成 20 年度に小田原消防の消防情報指令システムが最新型のシステムに更新されたことにより 119 番通報から現場到着までの時間が短縮されました。しかし現場到着から受け入れる医療機関を探す時間はあまり変わっていないのが現状です。」とのことでした。その話を聞き、率直に感じたことは「いくら消防が早く現場に到着しても、受け入れ病院が見つからなくては意味がない！何か救急隊と医療機関との連携でいい考えはないものか」と思いました。

・話は変わって、Ａさんとは少し違った消防の見方をしている南足柄市に住む Ｃ さんの話です。Ｃ さんの家は住所のある南足柄市と隣の小田原市との市境にあります。ある日、子供が高熱を出し痙攣を伴って意識がなくなったため、慌てて救急車を要請しました。動揺していたこともあって救急車の到着まで、だいぶ時間がかかったように感じていました。ようやく救急車が到着し、近くの病院に搬送されましたが、病院に到着したときには意識も戻り、幸いにも風邪（熱性痙攣）との診断を受けて自宅に帰れました。それから数日後、Ｃ さん家族は、ショッピ

ングのため自宅から車で小田原市にあるショッピングセンターに出かけた際に、自宅からそう遠くない場所に小田原市消防署城北分署があることに気付きました。そういえば火災の時には隣の市の消防車が駆けつけるという応援協定が出来ていることを聞いたことがありました。小田原市消防署の城北分署には高規格救急車が止まっていて、この前の救急要請のことを思い出し、市が違うとしても自宅に近い消防署から救急車を出してくれる仕組みが出来れば、もっと早く救急車が来てくれて、市民は安心でいられるのではと感じました。この前はただの風邪でしたが、もし・・・もっと重症だったら・・・子供の命が・・・と考えると怖くなりました。

・先日の一件で消防に対して興味が沸いてきたＡさんは、最近、新聞や自治会の回覧等で、住宅用火災警報器設置についての記事をよく目にするようになりました。以前、自宅をリフォームした際に、請負業者から「住宅用火災警報器を設置しなければならないことになったので、その費用も見積もりに入れました。」と言われたのですが、多額な費用でもなく設置しなくてはいけないものなのだというぐらいの感覚でいたため、あまりその重要性を感じていませんでした。その時にリフォームをしなければ住宅用火災警報器の存在さえ知らなかったと思いました。

・自宅にも火災警報器を設置しなければならない時代に、自分の勤める会社には消防の立入検査が入ったのを見た事がありません。不安に思ったので消防に問い合わせたところ、年間に実施できている予防査察数は 300 件程度であり、十分な立入検査が実施できていない。係員は、他の届出等の処理に追われ、検査の必要性を認めていても実施することが困難であるとの回答でした

・最近の出来事から、救急の話や住宅用火災警報器の話など、消防に係る経験をした中で Ａ さんは気づきました。「これからは、自分や家族のことは自分達で守る事を考えなくてはいけない。消防に頼ってばかりではなく、自分たちにできることは自分たちでやらないと！」と・・・・・・。

平成28年ごろ

・南足柄市に住むＣさんの話です。ある日のこと、Ｃさんの勤務する会社で、同僚の母親が、急に具合が悪くなり、救急車で医療機関に搬送され入院した話が話題となりました。同僚の話では、その時に来てくれた救急車は隣り町の救急車だったそうです。搬送された医療機関で、救急隊員と話をすることができたので「どうして隣町の救急車が来たのですか？」と尋ねたところ、数年前に消防の広域化が実施され、県西地域の消防本部が1つの組織となったことから、今回のような動きが出来るようになったことを聞きました。Ｃ さんは「以前、自分が思っていたことがこんなに早く現実出来るようになったんだ！」と感激しました。

・Ｃ さんは、もう1つ話を聞きました。小田原市消防局は、救急搬送業務については一定条件の元で患者等搬送事業認定事業所として消防長が認定した「民間救急事業者」が消防救急車に変わり患者を搬送出来るようになったとのことでした。

・小田原市に住むＡさんの話です。Ａさんは子供の小学校でのPTA総会の後、知人との雑談の中で、火災予防の話題になり、住宅用火災警報器は設置が義務であるため全国的にほぼ設置されて、現在ではスプリンクラー付の住宅用火災警報器が開発されそうだと聞きました。これが開発できたら警報と同時に消火もある程度効果が期待できるので、従前の住宅用火災警報器と同様に、義務的に設置することとしたほうが良いのではないかという意見が圧倒的に多く、皆さんの火災予防に対する意識が強まったと感じました。

・最近では全ての幼稚園児、保育園児が幼年消防クラブに所属し、小さい頃から「火災についてのおそろしさ」や、「火遊びはいけない」と言った基本的なことを習得できるようになりました。

・また、会社には消防の立入検査が入るようになり法の遵守が進み、一方では災害のときに援助が必要な高齢者宅なども消防職員が訪ねるなど、守られているという安心感と共に、日ごろの防災意識の高揚にも繋がっていると感じました。これは消防が広報に今まで以上に力を入れ広報活動をするときにも聞き取りやすい放送に心がけたり、子供たちだけでなく市民を惹きつけるような楽しいイベントを繰り出していったことが効果を現したようです。

・Ａさんは、毎年行われる地区の運動会にも地区長として参加しています。先日の運動会で 40 代の男性が競技参加中に倒れ、意識がなく、呼吸もしていないようでした。出席者の中で医師がいないかの放送が流れましたが医師はいないようで、会場は騒然となっていました。そんな中、一人の男性が駆けつけてきました。その男性は「小田原市の消防団員です。応急手当普及員の認定を受けているので私の指示に従ってください。」と、AED の要請や、心配蘇生法の補助など、的確に周囲の人に指示を出し、救命手当を実施していました。まもなくして、救急車が到着し救急隊員による救命処置が開始され、倒れた男性は救急車に収容され、医療機関に搬送となりました。運動会は継続されましたが、救急車到着までの応急手当状況がよかったため、一命は取り留めたとのことでした。

・運動会終了後各地区で慰労会が行われましたが、各地区ではこのことが話題となり、市で行っている応急手当

普及活動に積極的に地域住民が参加するような一人ひとりの意識が高まればいいという意見が圧倒的に多かったと聞きました。Aさんも同じ気持ちであったので、早速、夫婦そろって、インターネットを使って小田原市消防局のホームページから、応急手当講習のオンライン申し込みを行いました。

・そんな最中、Aさんは、救急車利用の有料化制度の検討が始まるという新聞記事をみました。その理由として救急隊が重篤な病人やけが人に対して行う高度な応急処置を施すために使用する資機材が高額であり、なおかつディスポーザブル（使い捨て）のため消防の予算を圧迫していることや、救急車の適正利用を呼びかけているが、現在でも軽症での救急要請が増加しつづけていることなどから検討を始めると書いてありました。

・消防行政の改革のみならず、最近では市民や地域の住民による消防に対する認識や救急、火災に対する予防意識が向上し、自ら消防団員を志願し地域住民のためにボランティアで活動する若者の増加や、自分、家族、地域は住民が自ら災害から守っていくという意識が芽生え始め、積極的に各地域で活動が行われるようになっています。

・また、近年、大規模化、多様化している災害に対しては、広域応援体制の強化を図り、消防救急無線のデジタル化の運用開始や、緊急消防援助隊設備の充実強化がされています。

平成34年ごろ

・Aさんは、ある日の小田原市議会定例会で、消防の広域化実施後の成果及び更なる消防の発展についての質問がされていることをインターネット中継でリアルタイムに見ていました。市長からの答弁内容は「小田原市とその近隣市町の消防が一つとなり、新たに小田原市消防本部としてスタートし、県西地域 2 市 8 町の住民約 40 万人に対しての効率的な消防行政を提供できるよう努力してまいりました。スケールメリットを生かした活動により、広域化前に比べ、多くの市民の生命、身体及び財産を守ることができたと思っております。また、多種多様化している災害等に対する職員教育として、消防、救急、救助の担当職員の研修機会が充実し、効率的な人員配置が可能になり、消防職員全体の資質向上が図られてきました。これらの事はすべて市民の「自分の身は自分で守り、自分達の地域は自分たちで守っていく！」という市民主体の消防に対する意識が浸透してきたことが一番大きな要因となっていることは確かです。しかしながら、小田原市消防局のあるべき姿であります「消防力の整備指針」で示す消防力の整備を実現するには、引き続き施設、装備等の整備を計画的に推進していくことが必要となっております。未だ来ない大地震や、大規模・特殊災害に備えて、施設、車両、装備及び組織や機能の更なる消防力の充実強化を図り、これからも市民と行政が協力して、安心・安全な小田原市を造っていきます。」という力のこもった答弁内容でした。

・その数年後、景気は回復し、市税等一般財源も増収になってきたことから、消防車などの車両整備や防火衣などの被服費、ホースなどの資機材も年次計画どおりの執行が可能となりました。

・また、火災原因調査体制が充実・強化されたことにより、市民に対しホームページ等で火災の原因等を広報することができるようになりました。特に、出火原因が「放火（放火の疑いを含む）」の場合は、出火場所の特定や放火された状況を周知することにより、放火されない環境づくりに役立ち、その他にもコンロのかけ忘れなども減ってきています。

・市民による市民のための応急手当普及活動が充実され、従来からの普通救命講習（3 年有効後更新）から、新たに普通救命講習の指導者講習制度が始まり、この講習を受講し合格した人は各地域で行う講習の講師や地域住民が集まる場（自治会会議や地区運動会など）で普及活動が出来ることになりました。3 年に 1 回の更新が必要で、消防から「市民救命士」と任命され、活動内容から報償費が支払われます。現在、市で任命された市民救命士の数は 300 人に登ります。「市民救命士」が新たな組織作りを計画し、消防と民間救急事業者との連携をしつつ救急に関して全国で初めてのモデルとなる「市民救命士」主導型の救急行政を構築していくことになりました。

・時は流れある年の正月。新しい市民ホールで挙行された消防の伝統行事である消防出初式の式典にAさん家族、C さん家族はそれぞれ出かけました。その式典の中で 10 数名の消防団員や市民が火災時の初期消火や水難事故者の救護などを行ったということで消防長から表彰を受けていました。顔見知りの消防団員がいたので聞いてみたところ、長年この出初式で表彰しており、毎年 10 数名が対象となっており、消防団の活動の中でも火災予防、防災意識の啓発に日ごろから取り組んでいるそうです。帰りの車の中で家族とこの話題となりましたが、やはり暮らしの中での安心・安全は市民の力によって守られていることを痛感し、そのためには、市民一人ひとりの意識を今まで以上に向上させることが必要であると感じました。

《あとがき》

・A さん、C さんのお子さんたちは、現在、小田原市消防局の職員として採用され、消防学校で毎日勉学に励み、過酷な訓練をとおして命の尊さを学んでいるそうです・・・・。

08　安心安全の地域づくり

概要

作成：暮らし安全課

シナリオのタイトル：安全安心のまちづくりを目指してー顔の見える関係づくりー

サマリー（概要）

・市が実施した地域防犯活動に関する調査結果によると、80％以上の自治会が防犯パトロールや児童の見守り活動などに取り組んでいます。

・しかし、地域防犯活動の取り組み内容に差があるため、市では地域での防犯・交通安全活動を普及、充実させることと、「顔の見える関係づくり」を構築し、地域での人と人とのつながりを強めることが課題と考えていました。

・そこで、地域自治会と民間防犯指導員（25 人）、警察署、市、交通関係団体などの連携強化を図りながら防犯・交通安全活動を推進するとともに、市も地域住民が主体となった活動を支え、協働していくことで、犯罪のない安心・安全のまちづくりを実現します。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「地域を見守る活動の普及、充実（見守り活動・防犯パトロール）」「地域住民等の参加と協働」

「人材確保と組織・団体間の連携」「地域コミュニティの強化」「顔の見える関係づくり」

「高齢化社会の進展」「核家族化」

平成23年ごろ

・小田原市内に住むAさん（41 歳）は、妻と子ども 2 人（小学校 2 年生と 1 年生）の 4 人家族です。

・Aさんは小田原市内の会社に勤務しています。Aさんの地域では、毎朝、車の通行の多い交差点で児童の交通安全を見守っている自治会の方々がいます。

・Aさんも、小学生の子を持つ親として自分も見守り活動に参加したいと思いますが、会社への出勤時間などから難しい状況でした。自分にできることを考えていたところ「広報おだわら」に地域防犯活動に取り組む自治会等を紹介する記事を目にし、地域活動の重要性を感じていました。

・市では、地域防犯活動に関する調査を実施したところ、80％を超える自治会が防犯活動に取り組んでいましたが、活動内容に差があることもわかりました。

・安全・安心のまちづくりを進めるためには、警察の警戒や取締も重要ですが、地域住民 1 人ひとりが「自分の安全は自分で守る」「地域の安全は地域で守る」といった意識を持ち、地域住民による防犯・交通安全活動を普及、充実させていく必要がありました。

・また、犯罪を起こさせないために、日ごろからの隣近所のおつきあいや地域の行事等を通じた地域の絆を強めることなど、地域における「顔の見える関係づくり」を構築することも課題でした。

・市では、防犯事業の取り組みを地域密着型とするとともに、地域防犯を強化するため、地域自治会、警察署、民間防犯指導員などと話し合いを重ね、防犯事業の全体的な見直しを行いました。

・見直しの結果、市では地域自治会、警察署などと連携して小田原市内の犯罪の発生状況や地域における自主防犯活動の取り組みなどを勘案しながら防犯モデル地区を指定し、防犯パトロール、犯罪抑止啓発看板の設置、自主防犯啓発チラシの回覧、防犯教室の開催、防犯座談会などの防犯事業を行うこととしました。

・交通安全事業についても、交通事故の発生状況を勘案しながら、交通事故の多い高齢者、子ども、自転車利用者などを対象に重点的に対策を図るとともに、地域での交通安全活動や対策を強化するよう見直しました。

・交通安全の取り組みの目標として、平成 34 年には市内全域で毎月 1 日と15 日の交通安全日には児童の見守り活動が実施されていることを掲げました。

平成28年ごろ

- 平成 28 年頃には、犯罪の発生状況をはじめ、地域運営協議会の活動状況や地域別計画などを勘案しながら、順次、防犯モデル地区を指定し、防犯・交通安全活動の取り組みが地域密着型に移行していました。
- 今年、Aさんの住む地区は防犯モデル地区に指定され、地域自主防犯組織を設立する発会式が行われていました。発会式では、警察署から地域の犯罪発生状況と自主防犯対策についてアドバイスがありました。
- 発会式では、Aさんの地区の地域運営協議会と警察、小田原市の三者で「(仮称)安心・安全地域づくり協定」が締結されました。協定は、地域と警察、小田原市がお互いに連携・協力しながら地域防犯活動の強化、充実に取り組むという趣旨で、地域、警察、市の役割も掲げられています。
- 地域の役割は、自主防犯パトロールや自主防犯チラシの回覧の実施など、警察の役割は、地域への犯罪情報の提供や自主防犯活動のアドバイスなど、市の役割は防犯パトロールに必要な腕章や犯罪抑止啓発看板の提供、自主防犯活動に関する研修、情報提供などです。
- Aさんの地区では、地域運営協議会の中に防犯・交通安全部会が設置され、地域の自主防犯活動や交通安全活動などを担っています。部会には、Aさん、民間防犯指導員Bさん、青少年育成推進員、少年補導員、交通指導員などの方々が所属していました。
- 防犯・交通安全部会は、警察や市などと連携して「地域自主防犯活動計画」を作成し、計画には防犯パトロールの実施、自主防犯チラシの回覧、犯罪抑止啓発看板の設置、防犯教室及び防犯座談会の開催などが盛り込まれていました。
- 防犯パトロールは、防犯・交通安全部会のメンバーを中心に無理のない実施回数で開始しました。防犯パトロールには、地域ボランティアをはじめ、交番の警察官や他地区の民間防犯指導員なども参加協力するとともに、青少年育成推進員や少年補導員の声かけでAさんの地区に所在する小学校のPTAの方々の参加もパトロールの回数を重ねるごとに増え、地域内での「顔の見える関係づくり」も段階的に進みました。
- また、小田原市と警察との連携のもとで、犯罪抑止啓発看板をAさんの地区内の目立つ場所に 30 枚程設置するとともに、自治会回覧で自主防犯対策も呼び掛けて地域住民の自主防犯意識の啓発に努めました。
- 防犯座談会では、防犯・交通安全部会のメンバーや地域防犯活動に携わる方々と警察、市などで情報交換を行い、効果的な地域防犯活動について活発な話し合いが定期的に行われました。
- 防犯座談会の中で、活動の課題も明らかになりました。課題としては、地域防犯活動に携わる人の高齢化(世代交代)、活動のマンネリ化、活動の継続性(経費面を含む)、犯罪多発地区への取り組みなどがあげられました。
- 市では、こうした課題を解決するため、地域防犯活動に携わる人たちと話し合いを重ねるとともに、他市の防犯活動の事例紹介や地域防犯に携わる方々を対象に研修会などを行いました。また、防犯モデル地区や地域防犯活動の取り組みを広報紙やホームページなどで紹介し、多くの地域で自主防犯活動が行われるよう努めました。

平成34年ごろ

- 平成 34 年頃には、市内 25 地区における地域運営協議会の活動が充実してきており、協議会には地域防犯に取り組む部会が概ね設置されていました。
- 全市的に地域防犯は協議会の防犯部会を中心に担われていました。防犯部会には、民間防犯指導員、青少年育成推進員、少年補導員、交通指導員などの方々が所属し、お互いに連携を図りながら地域防犯、青少年健全育成、交通安全といった視点で活動が行われていました。
- 以前は、地域防犯、青少年健全育成、交通安全といった観点で、別々にパトロールを行っていた方々が協議会の同じ部会に所属することで、活動の一本化が図られていました。活動が一本化されたことで、地域での人的な負担も軽減されていました。
- Aさんの地区では、「地域の安全は地域で守る」という自主防犯意識が段階的に浸透し、地域の中で防犯経費として 1 世帯当たり年間 100 円を集めて、青パト(青色回転灯装備車両)の燃料費などに充てていました。
- 青パトの導入は、防犯パトロールの範囲が拡大するとともに、広報装置を備えているために直接、地域住民に自主防犯を呼び掛けられるなど、より効率的、効果的に行われていました。

・地域防犯活動の活発化に伴って、市内全域で青パトの導入が進みましたが、青パトの導入にあたっては、市や警察署なども連携して支援しました。

・交通面では、市内 25 地区全域で毎月 1 日と 15 日の交通安全日に地域の方々が通学路で見守り活動が行われるようになっていました。また、登校時の見守り活動はPTAを中心に、下校時の見守り活動は自治会等の地域ボランティアを中心に行うといった役割分担がされている地域もありました。

・地域防犯活動の課題である、地域防犯活動に携わる人の高齢化（世代交代）、活動のマンネリ化、活動の継続性（経費面を含む）、犯罪多発地区への取り組みについては、地域運営協議会の活動の充実や警察署・行政との連携強化などに伴って少しずつ解消されていました。

・地域運営協議会の活動の充実や地域防犯活動の推進により、地域内での顔見知りが増えたことで地域防犯力の向上、地域コミュニティの活性化にもつながっていました。

・Aさんの地区でも、多くの人たちに自主防犯、地域防犯意識が浸透するとともに、多くの人たちが暮らしの安全、安心を実感していました。

09　子育て環境の充実

概要

作成：子育て支援課

シナリオのタイトル：子育てが楽しい環境づくり

サマリー（概要）

・小田原市では、持続可能な市民自治を標榜する新総合計画をスタートさせました。将来の小田原を担う子どもたちの育成を支援し深刻な少子化に歯止めをかけるため、保育環境の充実など子育ての負担を軽減し、子育てが楽しく感じる環境づくりに取り組んでいます。

・子どもの数は年々減っているものの、母親の就労意欲が高まり、保育所入所を希望する待機児童の数は増えています。当初は、定員を超える柔軟な受け入れや施設拡充による定員増などを図ることで対処してきましたが、より一層の対策を講じる必要に迫られ、定員数に余裕のある保育所への送迎サービスの実施、幼稚園への保育機能の整備、認定子ども園の新設など、新たな保育サービスの拡大を図ります。

・また、市内に3箇所の子育て支援センターを拠点としたさまざまな事業が展開され、同じ子育て奮闘中のお母さん同士が知り合うきっかけが増え、子育てサークルの活動が市内に広まっています。

・子どもと一緒に仲間と楽しい時間が持てるようになり、口コミによる子育てに関する生きた情報もたくさん入ってきます。母親一人で悩んでいた育児の孤立化は徐々に解消され、子育てが楽しいと感じるお母さんが増えています。

・サークル活動が発展し、近くの公民館や小学校の空き教室を活用した自主的な子育てひろばが各地域で積極的に運営されはじめます。これまで疎遠であった子育てをする若い世代が地域に関わるようになり、ケアタウン構想やスクールコミュニティともうまく連動し、子育てを地域で支える意識も深まっています。

・次世代育成支援対策推進法が一部改正され、子育て支援のための具体的な行動計画の策定と届け出が義務付けられる事業者の対象が101人以上の従業員がいる会社（事業者）に拡大されました。これを契機に、市では働き方の見直しによる仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の実現を図るため、子育て中の従業員を積極的に応援する企業や事業者を支援する事業を開始します。

・子育て支援は企業の社会的責任として、自社における従業員の育児休業制度の拡充、社内保育の実施、男性の育児休暇制度の充実などさまざまな取り組みを行う市内企業も徐々に増え始めています。

・また、子育て世帯への料金割引や特典などのサービス、あるいは、子育て家庭が外出しやすいようなやさしい設備や付加的サービスを行う店舗なども見られるようになりました。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「核家族化」「待機児童」「育児休業」「子育て不安」「育児の孤立化」「職場復帰」

「父親の育児参加」「ワーク・ライフ・バランス」

平成23年ごろ

・Aさん（29歳・女性）は、秦野にある製造会社にフルタイムで勤める会社員です。2年前に、小田原で生まれ育った市内の金融機関に勤めるBさん(31歳・男性)と結婚し、二人で栢山の賃貸マンションに住んでいます。現在妊娠6ヶ月ですが、今も電車で通勤しています。出産後も仕事を続けたいと考えています。

・Aさんは、結婚を機に秦野市から小田原に引っ越してきたため、近所にあまり友達はいません。初めての出産でわからないことが多いので、何かあると、秦野のお母さんに電話で相談していますが、さすがに30年も昔のことは良く覚えていません。

・妊娠してから、市の広報やホームページを良く見るようになりました。また、妊娠の届けを市役所に出しに行った

ときに、母子健康手帳を手渡しながら、様々な子育て情報を職員の方が丁寧に説明してくれました。ママパパ子育て知恵袋メールの案内もあったので、すぐに登録しました。定期的にメールが届き、妊娠時、出産時、赤ちゃんの月齢に合わせて、親切な子育て情報が入ってきます。市役所も気の利いたサービスをしているなと感じました。

- Aさんは、ママパパ子育て知恵袋メールで知った城北タウンセンターいずみで開催される「マタニティひろば」に初めて参加しました。3階の子育て支援センターの会場には自分と同じ大きなおなかをした妊婦さんが約10名ほど参加しています。助産師さんから出産や出産後のケアについて話を聞くことができました。参加者のほとんどがAさんと同様初めての出産を迎える新しいママさんだったのでたくさんの質問がでて大変参考になりました。会話も弾み、会社以外で久しぶりのおしゃべりの時間を楽しく過ごすことができました。隣に座っていたCさんと話があい、ひろばが終わった後もしばらく二人でおしゃべりしました。
- Aさんは、次の「マタニティひろば」にもCさんに誘われ参加しました。子育て支援センターのアドバイザーの方から、出産後の赤ちゃんとお母さんを対象とする「赤ちゃんデー」のことや、地域で活躍する主任児童委員さんが、それぞれの地域の公民館などで子育て世帯の交流を図る催しをしていることなども教えてもらいました。
- Aさんはご主人のBさんと子どもが生まれてからの生活について話し合いました。子どもが 1 歳になるまではAさんが育児休業を取得し子育てに専念し、職場に復帰後は保育園に預けようと考えています。
- Aさんは、市のホームページで近くの保育園の情報を探し、市の子育て支援課にも電話して話を聞きました。市の職員の方は保育園に入る手続きの方法や流れについて親切に説明してくれましたが、最近は保育園に入所を希望する方が増えていて、定員をオーバーしている保育園が多いので希望する保育園に入れないこともあると言われ、1 年後に無事に入所できるか少し不安になりました。
- 4ヵ月後、元気な男の子を出産したAさんは、2ヶ月ほど秦野の実家で過ごし、自宅に戻ってきました。市役所から「こんにちは赤ちゃん事業」のお知らせが届いていました。小田原市では昨年から、赤ちゃんが生まれた世帯すべてのお宅に保健師さんなどが伺い、母子の健康状態のチェックをはじめ、子育てにかかる様々な情報提供や相談に応えてくれる訪問事業を開始しています。
- Aさんは保健師さんが訪ねて来たときに、赤ちゃんのことでいろいろと相談することができました。また、赤ちゃんと一日中二人でいる日が続くとストレスがたまるので、適度に気晴らしをとるようにアドバイスを受けました。渡された「月間こそだてカレンダー」を見て、子育て支援センターを始め、いろいろなところで、さまざまな催しがあることを知り、赤ちゃんを連れてたまには出かけてみようと思いました。
- Cさんに誘われたこともあり、Aさんは友達を作るため、いずみの「子育てひろば」を利用していました。ひろばはいつもたくさんの親子が参加していて、何回か通っているうちに顔見知りも増え、そこでのおしゃべりが楽しいひと時になっています。
- 1年間の育児休業を終え、いよいよ職場に復帰する日が近づいてきました。息子はつかまり立ちができるようになり元気に育っています。心配していた保育園への入所も無事に自宅近くの保育園に通うことが決まりました。
- いずみの子育て支援センターで知り合ったSさんも同じ保育園に申し込みをしていましたが、第3希望の保育園に通うことになったことを聞き、保育園に入るのが厳しい状況であることを実感しました。また、Sさんから、鴨宮に住む友達のFさんの話も聞きました。Fさんは、近くの保育園に入ることができなかったため、2年前に待機児童解消のためマロニエ子育て支援センターの子育てひろばに整備された送迎ステーションを使って早川保育園に通うことにしたそうです。朝、マロニエの送迎ステーションへ子どもを送り、ステーションから早川保育園までは、市のバスを使って保育士さんが連れて行ってくれます。帰りはその逆で、夕方ステーションに子どもを迎えに行くシステムです。バス代は別にかかりますが、送迎ステーションの利用者は、徐々に増えているそうです。
- 次世代育成支援対策推進法が一部改正され、101人以上の従業員がいる会社（事業者）は行動計画を策定し、届け出が義務づけられました。これを機に小田原市では職場における従業員の子育てを応援する事業者の取り組みを促進するためさまざまな支援や啓発活動を開始します。

平成28年ごろ

- Aさんは職場に復帰しています。息子は4歳になり、かなりの暴れん坊ですが、毎日楽しく保育園に通っています。朝はご主人のBさんが出勤前に保育園に送り、帰りはAさんが会社帰りに迎えに行く生活です。夜7時までの延長保育サービスがある保育園なので助かっています。また、仕事の都合で、どうしても帰りが遅くなる時は、ファミリー・サポート・センターに会員登録しているので、近くの支援会員の方に迎えとその後の預かりをお願いすることができます。
- Aさんは育休の間、いずみの「子育てひろば」で知り合った何人かと親しくなって、今も連絡を取り合い、たまに

子どもを連れて、土日に集まり、おしゃべりを楽しんでいます。同じ年齢の子どもを待つ母親同士の集まりは、子育てに役立ついろいろな情報を得ることができて、普段働いているAさんにとっては、大変貴重な時間になっています。

・最近は、長男の保育園のお母さん方も加わって人数が増えてきました。お互いの家や、いずみの「子育てひろば」よりも近くの公民館を会場にしようと提案があり、定期的に地域の公民館を借りて集まることにしました。ちょっとしたサークル活動のようになっています。子どもを遊ばせるため、公民館にそれぞれが絵本やおもちゃを持ちこんでいましたが、公民館長の許可をもらって、絵本やおもちゃを置いておくことができるようになり、また、地域の主任児童委員さんのアドバイスを受け、市の子育てサークル運営費の助成制度を使って、室内用の遊具も購入しました。

・会場が定着したことにより、さらに口コミで、地域の幼いお子さんを持つお母さん方が集まり始めました。やはり、育児の悩みや相談、日頃のストレスの発散など、気軽に友達や仲間作りを求める人は多いのでしょう。ただ集まるだけでなく、季節の行事や、子供服のフリーマーケットなどいろいろな催しも行われるようになりました。催しの準備に男手が必要な時や父親が参加する催しなどもあり、半強制的に、Bさんたち若いお父さんもサークル活動に関わるようになってきました。徐々に近所の子育て家族の顔と名前が一致するようになり、外であったときにあいさつが交わせる顔見知りのお父さんも増えてきました。

・Aさんの会社では、優秀な人材を確保でき、従業員の会社への愛着度の向上、企業のイメージアップにもつながることから、社内の子育て応援体制が強化されています。特に女子社員が子どもの出産で育児休業を取得した場合、経済的な支援や、職場復帰ための教育訓練など復職しやすい環境が整い、その結果、子どもを産むほとんどの後輩女子社員は、2年間もしくは3年間の育児休業を取るようになってきています。

・Aさんも、子供の病気や保育園の行事で会社を休まなければならないときがありますが、上司や同僚の理解があり、介護・育児の特別休暇が取得できて助かっています。ここ数年で、自分の会社の子育て応援意識がずいぶん良くなり、この会社に入って良かったと感じています。

平成34年ごろ

・Aさんの長男は10歳になり、小学校の5年生です。5歳になる妹は保育園の年長さんです。Aさんは、今も子育てサークルのメンバーとして、公民館に時々娘と一緒に顔を出しています。

・今日は地域運営協議会の定例会です。今日のテーマは地域での子育て支援についてです。小・中学校のPTA役員や子供会の役員に加え、子育てサークル活動に5年間参加しているAさんは、未就学児の保護者の代表として意見を伝えるため参加することになりました。

・Aさんは、地域にある児童遊園地の滑り台がかなりさびていて危険な状態であることや、砂場に犬のフンがあるため砂場が使われていないこと、また、幼児が楽しめるスプリング遊具などを設置してもらいたいことなどを伝えました。どう対応したらいいか話し合われました。

・滑り台の修繕については、ペンキや刷毛などの道具は自治会費で負担し、老人会の指導のもと、実際の作業は、子育てサークルのパパの会が行うことになりました。砂場の犬のフン対策は、回覧板を回してマナーの向上を図るとともに、環境衛生部会長が、市役所から啓発看板をもらって砂場の近くに設置します。新しい遊具については、来年度の地域の事業計画案に加えることが了承され、遊具の選定を主任児童委員さんとサークルメンバーで検討することになりました。

・また、主任児童委員であるEさんから、月2回公民館で開催している平日の「子育てひろば」が好評なので、週1回に回数を増やせるように公民館の優先利用をお願いしたところ、公民館長から支障ない旨の意見があり、これも了承されました。Aさんは、このやり取りを聞いていて、地域の方が子育てに協力的だなと感じました。

・Aさんの長男は小学生なので、子ども会にも所属していますが、子ども会の活動も活発です。それは子育てサークルの仲間のつながりが、そのまま子ども会にも継続され、子どもも親もある程度顔見知りが多く、その土台がすでに出来上がっているからだと思っています。ご主人のBさんも、もちろん小学校の「親父の会」に入っていて楽しそうです。

・Aさんは、子どもを通じて仲間ができたことや地域の方と関わりを持つことができたことに感謝しています。次回のサークルにも参加して、若いママさんたちとおしゃべりを楽しもうと思っています。

・Bさんは相変わらず取引先周りの営業で毎日市内を忙しく駆け回って仕事をしています。最近小田原駅周辺では、子供連れの親子が多くなってきたと感じています。特に夕方の時間帯に買い物袋を提げた親子が駅に向かう姿が目立っています。

・小田原駅前の商店街の会長さんのところへうかがった際に、聞いた話によると、以前空き店舗だったところを改

装し、私設の保育所を始めるところが増えているのだそうです。市内でも子育てを応援する会社が増えてきたため、自社の従業員の子どもを預かるための事業所内託児施設として、私設保育所が提携利用されているのだそうです。

- パートや会社勤めの帰りに子どもを小田原駅周辺の保育所に迎えに行き、それから小田原駅周辺で食料品などの買い物をしてから自宅へ帰るパターンが多いのだそうです。
- ・商店街では、空き店舗対策にもなるし、買い物客が増えてきているので、保育所ができることを歓迎しています。このため、授乳室や、おむつ替えシートの設備を備えた子育てにやさしいお店も増え、最近では夏と冬のボーナス時期をねらって、子育て世帯を対象に、プレミアム商品券を発行する商店街もでてきているそうです。
- 子育て市民アンケートでは、仕事と子育てが両立しやすく、子育てが楽しいと感じている子育て世帯が増えているとの結果が出ています。

10　青少年の育成

概要

作成者：青少年課

シナリオのタイトル：おだわらっ子を育てよう（地域及び行政支援参加交流型）
多方面で活躍する青少年ストーリー

サマリー（概要）

・将来を担う大切な存在、「おだわらっ子」は、大人たちの見守りにより、地域の様々な営みに参加しながら、すくすくと育っています。一方、市では、全市的な立場から自立した視野の広い子どもたちを育成するために、地域や学校とも連携した体験学習プログラムを提供し、たくさんの子どもたちが参加しています。また、これらを支える担い手の育成にも力を入れて取り組んでいます。地域と行政の役割分担による、健全な青少年の育成が効を奏し始めています。

・地域活動やボランティア活動への積極的参加・貢献、そして、市の様々な施策への参画など、ふるさと小田原を大切に想い、愛着を持った、自立した青少年が確実に増えてきました。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「個人」「家庭」「学校」「地域」「行政」「社会」「自治会」「子ども会」「スポーツ少年団」

「おじいちゃん・おばあちゃん」「お父さん・お母さん」「近所」「担い手」「体験学習」「リーダーシップ」

「指導者講習会」「ボランティア」「実行委員会」「多様でグローバルな社会」「少子高齢化・核家族化」

「ふれあい交流」「ふるさとは小田原」「地域への愛着」「地域とのかかわり」「家庭の教育力・躾力低下」

「地域の見守り・育成力」「子どもの居場所」「家庭の教育力・躾力低下」「自立」「安心・安全」

平成23年ごろ

・***特別に用意された研修や学習の場だけが、子供たちの育成の場所ではありません。***

・***生まれ育った地域での様々な出来事の中で、子供たちは人と人との絆を学び、郷土への愛情を育みながら成長していきます。***

・***市は、子供たちの『地域参画』への、お手伝いをします。***

■公民館での将棋

・A太郎の家から歩いて5分ほどの所に、公民館がありました。公民館では週末になると、近所のおじいさんたちが集まり、よく将棋をやっていました。

・ある日、A太郎が友達2人と公民館前の道を通ると、空いている窓の向こう側に、将棋に熱中するおじいさんたちの姿を見かけました。

・「毎週、公民館で将棋をやってるよ。小学生や中学生のみんなも、一緒に将棋をしませんか」。

・こんなチラシが、A太郎の家にも届いていました。チラシは教育委員会と自治会が作ったものであったことなど、A太郎は全く知りませんでしたが、チラシが自宅のテーブルの上にあったことは何となく覚えていました。

・A太郎たちは恐る恐る公民館の中に入り、そして、2人のおじいさんの対局を見守りました。

・すると、はじめは物珍しさから、ただ眺めているだけのA太郎でしたが、2時間後には自分でも駒を動かしたくなりました。

・そんな時、ひとりのおじいさんがA太郎に声をかけました。

・「お前もやってみるか？」

・「やっていいの？」

・A太郎の将棋デビューの瞬間でした。

・それから、A太郎と仲間たちは、週末になると公民館に足を運び、おじいさんたちから将棋を教わるようになりました。将棋の腕前はぐんぐん上達しました。いつの間にかA太郎たちから話を聞いた同級生も、公民館に集まるようになっていました。

・公民館に子どもたちが増えると、半世紀をも超える世代間交流の手段は将棋だけにとどまらず、多種多様なものへと変わっていきました。

■町内掃除活動

・A太郎は、ある日、自治会での町内清掃活動に参加しました。自分から望んで参加したわけではありません。むしろ、参加は嫌だったのです。母親に強く言われて、仕方なく、の参加でした。

・母がA太郎を清掃活動に参加させたのには理由がありました。民生委員を務める母は最近、教育委員会の職員と話す機会が何度かあったのですが、この話し合いの中で、子どものころからの地域活動への参加は、子どもの成長にきっとよい結果をもたらすにちがいないと強く思うようになっていたのでした。

・春先のまだ少し寒さが残る日の早朝、A太郎はホウキを片手に、近所の福祉センターの駐車場にやってきました。周囲を見回すと、同級生の姿はなく、ほとんどが自分の父や母、或いは祖父母といった年齢の人たちばかりでした。それでも中には、A太郎に近い年齢の子どもの姿も何人か見受けられました。

・自治会長から指示が出ました。その日のA太郎が掃除を担当するのは、自宅から100Mほど南側にある小さな路地でした。同じ場所の担当となったおばさんは、よくしゃべる人でした。

・A太郎は知らず知らずのうちにおばさんのペースにまきこまれ、この前の算数のテストで20点をとってしまったことや、将来は役者になりたいことなど、実にたくさんのことを、いつの間にかおばさんに話していました。

・おばさんからも、たくさんのことを教えてもらいました。昔、この近くに競馬場があったこと。スーパーのB屋は、もともとは魚屋であったこと。Cおばさんは、実は二宮金次郎の子孫であること。近くの川には、いまでもメダカがいること……。

・掃除が終わると、自治会からアイスクリームがごちそうされました。A太郎は、「働いた後のアイスクリームは格別」とは思いつつも、掃除が好きになったわけではありませんでした。おばさんとの会話は面白かったし、このまちについて、少しは詳しくなりましたが、自ら進んで次回の清掃活動にも参加しようとは思いませんでした。

・しかし、次の清掃活動の日、福祉センターの駐車場には、ホウキを持つA太郎の姿がありました。今回も、母の命令に従う形での参加ではあったのですが……。

・***多くの大人たちとのかかわりの中、さまざまな体験学習を通し、子供たちは視野を広げ、一回り大きく成長します。***

・***市ではよりたくさんの子どもたちに、体験学習の機会と、仲間作りの場を提供します。***

■体験学習　～　田植え体験　～

・A太郎は、5年生の体験学習授業の中で、田植えを体験しました。

・今回は他の体験学習とは少し様子が異なり、農家の方や先生以外にも、たくさんの大人たちが参加していました。この体験学習は、学校と地域と教育委員会が協力して、企画されたものだったからです。参加した大人の中には、学校の先生はもちろんのこと、自治会のおじさん、こども会のおばさん、学校の周辺をパトロールしている人たちに加え、A太郎の家の隣に住むおじいさんもいました。

・農家の方の指導を受けた後の子どもたちへの指導や指示は、先生以外の大人たちに任されていました。大人たちは、子どもたちの間に混ざり、一緒に田植えもしました。手馴れた手つきで田植えをする人もいれば、A太郎と同じようにおぼつかない手つき・足つきの大人もいました。

・A太郎が先生に聞いたところ、小田原市の小学校では、ほとんどの5年生が体験学習の中で、田植え体験を行っているとのことでした。しかも、どの学校もA太郎の学校と同じように、地域のたくさんの大人たちが参加し、楽しく指導にあたっているということでした。

・後にA太郎の書いた作文には、『家の近くに水田はなく、A太郎も他の多くの同級生と同じように、これまで田んぼに入ったことはなかった。はじめて素足で田んぼに入ったときの冷たくてヌルっとした不思議な感触を、今

でも強く覚えている。 ・・・・・・泥の中にはまった足をうまく抜くことができずに何度も転びそうになった。 ・・・・・・顔に泥がはねてむずがゆくなったが、両手も泥だらけだったので拭き取ることができずに、そのまま田植えをつづけた。 ・・・・・・かがみながらの作業で、腰が痛くなった。 ・・・・・・たいへんだったが、達成感があった。・・・・・・農家の方の苦労が、よく分かった。食べ物を粗末にしてはいけないことを強く感じた。 ・・・・・・苗と泥のにおいが、不思議とここちよかった ・・・・・・近所のおじさんやおばさんたちから、自分の生まれ育ったまちのことを聞いた。知らないことがたくさんあった。 ・・・・・・秋の稲刈り体験が楽しみだ。また、あのおじさんやおばさんに会いたいと思った』こんな内容が記されていました。

・秋には、稲刈り体験が予定されています。その後、収穫した米をハンゴウで炊き上げ、カレーを作る予定です。

・稲刈り体験やカレー作りには、田植えのときと同様に地域の大人たちが参加してくれることになっています。また、中学生や高校生も参加するそうです。A太郎は、秋の体験学習が楽しみになりました。

■体験学習　～　林間学校　～

・A太郎は、5年生の夏休みに、学校行事としての「林間学校」を体験しました。A太郎の学校では、昨年まで林間学校は行われていませんでした。学校にとっては、十年ぶりの復活です。

・A太郎の父が子どものころは、どこの小学校でも当たり前のように林間学校が行われていたことを、A太郎は父から聞いていました。

・ただ、実際にA太郎が体験した「林間学校」は、父から聞いていたものと少し違っていました。学校行事ではあるものの、田植えの体験学習と同様に、近所のおじさんやおばさんなど、学校の先生以外にも多くの大人たちが参加していたからです。

・A太郎たちにとって、林間学校はいつになく楽しいものとなりました。友達同士で遊ぶ感覚とはひとあじ違う、大人たちとの交流の楽しさがあったからです。また、一緒にさまざまな作業をしながら、大人たちからは、同世代の友人からは当然に学ぶことができないことを、たくさん教えてもらいました。

■地域の見守り拠点づくり事業

・A太郎の家の近くに大きなお寺がありました。今まで、このお寺に入ったことはありませんでした。

・ある日、広報誌で、このお寺で小中学生向けの講座の開かれることを知りました。主催は教育委員会だった。

・講座の内容は、お寺とは結び付けがたい「ドライアイスの不思議」や「ペットボトルを飛ばそう」、「夏の夜空を眺めよう」などなど、自然科学系の内容が盛りだくさんでした。

・科学が大好きだったA太郎は、「よし参加を！」と意気込みましたが、広報誌の記事をよく見ると、そこには「宿泊」の文字が記されていました。「お寺での宿泊！」。A太郎は正直、怖かったのでした。それでも、講座メニューへの興味が勝り、講座への参加を決めました。

・A太郎にとって、予想どおり、それぞれの講座はとても面白いものでした。ただ、小中学生に混ざり、近所に住む何人かの大人たちも講座に参加していたことが、A太郎には不思議でした。大人たちは、参加した子どもたちの面倒を見ながら、夜も一緒にお寺へ泊まりました。

・講座が開かれてから数日後、A太郎がお寺の前を通りかかると、講座で一緒だったおばさんたちと数人の小学生が、お寺の境内で「ゴムとび」をして遊んでいました。

・話によると、おばさんたちは定期的にこのお寺に来ているということでした。小学生も、おばさんたちの来るときに合わせ、お寺に遊びに来ていたのです。お寺には、このほかにも、近所の大人たちがよく足を運んでは、子どもたちの面倒を見ていました。

・その後、A太郎も友達を連れて、ときどきお寺へ遊びに行くようになりました。お寺に来る地域の大人たちからいろいろな遊びを教わるのがとても楽しかったのです。そして今度は、大人から教わった遊びを、自分より年下の子どもたちに教えることに、楽しさを覚えるようになっていきました。

平成28年ごろ

・***生まれ育った地域や、自分の通う学校の枠を超えた活動や交流、或いは社会問題や専門的な学習機会への参加により、子どもたちの視野は大きく広がります。***

・***また、交流範囲の拡大により、集団をまとめることの難しさを知るようになります。***

・***市では、子どもたちの視野が広がり、そして集団をまとめていくリーダーシップを身に付けるための、プログラムを提供していきます。***

■指導者研修講座

・A太郎は、市の主催する地域指導者育成講座に参加しました。県の主催する同様の講座にも参加した。講座では、アイスブレイキングなど、グループ活動を円滑に進めるための手法を学びました。

・A太郎は、リーダーになりたかったわけではありませんでした。ただ、小学5年生の稲刈り体験学習のとき、自分にやさしく接してくれた高校生のようになりたかったのです。そして、自らも学校や地域での活動に積極的に参加したいと思ったことが、指導者研修へ参加した理由でした。

■ジュニアリーダーズクラブ

・A太郎は中学生になり、ジュニアリーダーズクラブに入りました。クラブの事務局は教育委員会にありました。

・稲刈り体験や、お寺での遊びの中で、学年の異なる子供や大人たちとの共同作業や世代を超えての交流の楽しさを知ったことが、クラブに入るきっかけとなりました。

・実際にクラブに入ると、清掃活動、運動会、ハイキング、夏祭りなど、自治会からクラブへの参加依頼があり、A太郎は地域での催しものにもよく参加しました。ただの参加者ではなく、主催者側の一員として、さまざまな地域で多くの人と接しながら、催しの運営を手伝いました。大変なことも多かったのですが、それよりも充実感のほうが勝っていました。市内に知り合いも増えました。

・住む地域や学校の異なる仲間たちとの行動は、自ずと活動エリアが広くなったこともあって、とても楽しかったのです。

■中学生体験事業

・A太郎は、中学3年のとき、教育委員会が中学生を対象に実施した地球環境に関する講演会を聞きました。中学校の担任に促され、何人かの同級生と一緒に参加したものでした。

・正直なところ、A太郎は、講演会の参加には気乗りはしませんでした。地球環境と言われても、何かピンとこなかったからでした。

・ところが、講演会が始まると、A太郎は講師の話の中に引き込まれていきました。今までよりも地球環境というものが身近な問題であることを実感することができたからか、講師の話し方が面白かったからか、用意された映像資料が興味深いものだったからか、示されたデータが分かりやすく具体的だったからか・・・・・・一番の理由ははっきりしませんでしたが、講演会はあっという間に終わったような気がしました。

・学校の授業では聞くことのできない専門的な話を聞いたのがきっかけで、A太郎は、今まで興味のなかった環境問題に、少し目を向けてみようと思っていました。

■海岸清掃

・ある日、学校の掲示板に海岸清掃活動の参加者募集のポスターを見つけました。この海岸清掃への参加は、教育委員会が市内の小中学生に呼びかけていたものでした。また、同じポスターを見たジュニアリーダーズクラブの友人からは、電話でこの海岸清掃への参加を誘われました。A太郎は以前に参加した地球環境の講演会のことと、小学生の頃に母に言われて参加していた町内会の清掃活動のことを思い出しました。そして、小学生の頃はとは違い、今回の清掃活動は、自らの意思で参加することを決めたのです。

・A太郎は、海岸清掃に参加して、改めてゴミの多さにびっくりしました。それ以後、街中のゴミも気になり、しばらく参加していなかった町内会の清掃活動にも、何年かぶりで参加してみました。

平成34年ごろ

・***小学生のとき、生まれ育った地域の人たちや自然との触れ合いが、たくさんありました。***

・***中学生になると、自らの学校や地域の枠を超えた学習機会への参加により、視野が大きく広がりました。***

・***そして、大学生の頃、自らが主催者側の一員となり、ふるさと小田原での活動が始まります。活動範囲は小田原の外へも飛び出します。***

・***市は、一緒になって、まちづくりに取り組みます。また、活動の援助をしていきます。***

■大学生へ片道２時間

・A太郎は、東京都内の大学へ通い始めました。理工学部に在籍し、片道2時間かけての通学を続けました。

・片道2時間の通学となるのであれば、友人の間では、学校の近くにアパートを借りての一人暮らしを選ぶケースが多かったのですが、A太郎は「自宅からの通学」を選びました。

・「ただなんとなく。小田原を離れる理由がないから」。それが片道2時間の通学を続ける理由でしたが、A太郎にとって、小田原が居心地のよい場所であることに間違いはありませんでした。

・そして、大学生になったのを機に、ジュニアリーダーズクラブ時代の友人と一緒に、小田原のシニアリーダーズクラブ」にも入会しました。

■ビーチ・クリーン活動

・A太郎は、子どものころ母に言われて、よく町内の清掃活動に参加しました。それほど嫌ではなかったのですが、自分の意思によるものではありませんでした。

・中学生のとき、海岸清掃に参加しました。ジュニアリーダーズクラブの仲間の誘いもあったのですが、自分の意思での参加でした。

・大学生になり、シニアリーダーズクラブの仲間に誘われて、西湘ビーチ・クリーン活動の実行委員を務めるようになりました。実行委員のメンバーには、小田原市内の人はもちろん、市外・県外の人たちもいました。

・A太郎が実行委員になったのは、シニアリーダーズクラブの仲間からの誘いと、中学生時代の海岸清掃の思い出がきっかけではありました。しかし、何よりも生まれ故郷の海岸がゴミで汚れるのが不快であったのが、実行委員を申し出た一番の理由だったのです。それに、小学生の頃一緒に掃除をした近所のおばさんの思い出もあり、A太郎は清掃活動が好きになっていました。

・仲間にも恵まれました。次は西湘ビーチ・クリーン活動の実行委員を中心に、山岳清掃の実行委員会を立ち上げることになりました。

■サイエンス・アカデミー

・ある日、A太郎はひらめきました。「小学生を集めて、サイエンス・アカデミーを開こう」。

・アカデミーの講師には、A太郎と小学校時代からの友人2人に加え、シニアリーダーズクラブの仲間にも協力を求めました。そして、3人の通う大学からも講師を呼ぶことにしました。

・会場や資金や小学生への募集広報などは、教育委員会に協力を求めました。

・アカデミーのメニューは、もちろん3人で考えました。

・こどものころにお寺で受けた自然科学講座。実は、このときの講師と同じように、いつか自分も近所の子どもたちを集めて、「楽しく教える」自分の姿を、A太郎はずっと心の中に思い描きつづけていたのです。

■地域での指導者　～指導者養成講習会

・A太郎はある日、シニアリーダーズクラブの友人との会話の中で、教育委員会が実施している「青少年育成指導者養成講習会」の存在を知りました。そしてA太郎が、楽しい思い出の多い地域活動に、今度は指導者として参加することを決めるまで、さほど時間はかかりませんでした。A太郎はすぐさま教育委員会に問い合わせ、参加可能な直近の講習会に申し込みをしました。

・A太郎が講習会場に行くと、子ども会や育成会、PTAや自治会など、青少年に関係する団体からの多く人が参加者していました。もちろん、個人単位での参加者もたくさんいました。また、A太郎のような大学生もいれば、A太郎の両親と同世代や高齢の人もいました。

・講習会では各種の講義に加え、キャンプ活動などでの実習も行われました。

・講習修了者のうち、希望者は「青少年指導者名簿」へ登録され、教育委員会が主催する事業や地域の事業などへ、子どもたちの指導者としての参加が要請されました。知識の習得だけで終わるのではなく、講座を終了した人たちを実際の活動に生かすこと、つまり青少年育成の「担い手づくり」が、この講習会の一番の目的でした。

・A太郎も教育委員会の依頼により、母校での田植えと林間学校の2つの体験学習に指導者として参加しました。

・A太郎は、自らの小学生時代の楽しい思い出でもある田植え体験や林間学校で、過去の自分がそうしてもらったように、一緒に体を動かしながら、自分の知っている多くのことを話しました。自分たちの住む「まち」のこと、「自然」のこと、「人」のこと・・・・・・・　。

■全国での活動

・A太郎は、大学の友人に誘われ、日本赤十字団の活動に参加することにしました。小田原を飛び出してのボランティア活動は初めてでした。

・大学近くでの活動も、次第に関東、全国へとエリアを広げていきました。そして、仲間からの信頼も厚く、関東エリアの学生リーダーとして活躍したのでした。

11　学校教育の充実

概要

作成：教育総務課

シナリオのタイトル：みんなの学校（学校は地域コミュニティの核）

サマリー（概要）

- 地域のランドマークである学校では、児童・生徒、教員、保護者、地域の方々の声を活かし、みんなで協力して教育環境の整備に取り組んでいます。
- 地域での幼保小中一体教育が充実し、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学と地域の教育機関の連携が進んでいます。
- 子どもが成長している姿を見て幸せを感じる人たちが増え、スクールボランティアも保護者だけでなく、地域の方を始め多くの方々に支えられています。子どもの教育を学校だけに任せるのではなく、地域の力で子どもを育てることが必要であるとの認識が共有され、ふるさと小田原への愛着が深まっています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「少子高齢化・核家族化」「家庭・地域の教育力の低下」「教職員の多忙化」「子どもの幸せ」「生きる力」

「主体性」「学力」「体力」「心」「学校・家庭・地域の連携」「教育環境の整備・充実」「教職員の資質向上」

「誰もが主人公」「みんなの学校」「郷土愛」

平成23年ごろ

- 教育委員会では、各教育委員が学校や生涯学習施設に出向き、教育現場の現状や課題の把握に努めるとともに、教育委員会定例会では、教育委員会の施策について、様々な意見が取り交わされ、小田原独自の教育行政が進められています。
- 多くの市民から、今の子どもや若者は「ルールを守れない」「躾がされていない」という声が聞かれるようになっていたため、小田原市では平成19年1月に「おだわらっ子の約束」を創り、その実践を呼びかけています。また、早寝早起きやきまり事を守るなど、基本的な生活習慣を身につけるために、小学校1・2年生を対象に少人数学級編制を実施し、学校生活の良好なスタートができるよう支えています。
- 市内の小中学校では、10 年ほど前に始まったスクールボランティアが広がりをみせています。算数・数学や英語の学習支援、書道、剣道、箏の演奏など、スクールボランティアと教師が両輪となり、子どもたちを育んでいます。また、スクールボランティアの推進のため、各校のコーディネーターが地域の皆さんと学校の橋渡しをしています。
- この結果、いくつかの学校では、ミニ水族館や乗馬教室、学校農園、落ち葉拾いと堆肥化、校庭の芝生化、海岸清掃など、地域の特性を生かした様々な取り組みが始まっています。
- 多くの学校では、まだまだスクールボランティアは保護者が中心で、人員確保が課題です。保護者以外の地域の方々の力を得るために、スクールボランティアの登録制を始めましたが、「登録しても学校から一度も声がかからない」という不満の声もあります。いろいろな課題はあるものの、地域の特性に応じた取り組みが進んでいます。
- ある日の小学生の一日です。「おだわらっ子ドリームシアター」を見るため、市民会館に行きました。物語にドキドキ、楽しい歌やダンスにワクワクしながら、人間の温かさや仲間の大切さを感じました。学校から市民会館までは、歩いていきます。行き帰りの安全確保のため、児童のお母さんがボランティアとして付き添ってくれました。
- また、ある日の中学生の会話です。「今日、ファミリーレストランでピザを作ったんだ。終わった後、先生から「将来何になりたいですか。」と質問されたけど、ピンとこないし答えられなかった。小学生のときはサッカー選手に

なりたかったけど、そんなの現実的じゃないし、どんな仕事をしたいかって言われたって、どんな仕事があってどんなことをするのか分からないし、困っちゃったよ。」

- 職業教育を目的とした本が話題になりました。子どもが職業観を持ちにくくなっており、様々な体験学習の工夫が必要です。
- 学校では、担任だけではフォローしきれない教育ニーズに対応するため、支援スタッフを派遣したり、専門機関と連携し、どの子どもにも対応した優しい教育を目指しています。
- 学校、地域及び行政が話し合いながら進めてきた「T小学校リニューアル事業」が完了し、地域のランドマークとなる校舎に生まれ変わりました。多様な学習形態に対応した授業が行われるとともに、明るくきれいになった教室に子どもたちはもちろん、教員や地域の人もとても喜んでいます。
- K中学校では、食の大切さを生徒自身が考える機会として、自分の力でお弁当をつくり昼食に食べる「うMY弁当」の日があります。各学級では、食の大切さを考え、話し合う時間もあります。
- 小学校では、新学習指導要領が完全実施となりました。思考力、判断力、表現力を育てるため、授業では、自分の考えを論理的にまとめて記述したり、話し合ったりすることが増えました。
- 理数教育では、理科備品を充実し、多様な実験や実習を取り入れることで、「理科好きな児童生徒」が少しずつ増えています。また、小学校 5，6 年生へ導入された外国語活動も始まりました。担任の教員と小学校専属のALT（外国語指導助手）が楽しい授業づくりを展開し、中学校の英語授業へスムーズにつながるようになりました。
- 中学校では、新学習指導要領の完全実施を来年に控え、伝統や文化に関する授業では、箏や武道（柔道、剣道）を取り入れて、日本古来の伝統文化に触れ、そのよさを体験しながら新しい時代つくりの基礎となる考えを生徒一人一人に身につける工夫をしています。
- 児童生徒の不登校対策には、どの学校も力を入れていますが、その要因は多様でありなかなか減少しない状況にあります。

平成28年ごろ

- 校舎リニューアル事業で新しくなった学校には、スクールボランティアの活動スペースがあります。地域の拠点として、学校と地域の交流が深まり、地域の人が気軽に学校に足を運べるようになりました。
- いろいろな人が気軽に学校に来ると、不審者が混じって入ってくるのではないかと懸念する声もありましたが、登下校時の見守り隊や定期的な学校巡回など、多くの地域の方々の目がそれを防いでいます。
- 授業についていけなかったり、家庭等の問題から生活態度が荒れたりする生徒がいますが、小さいときから知っているおじちゃんおばちゃんには、親や教員に話さないことも話したり、相談しているようで、学校の雰囲気が以前に比べ和やかな感じがします。
- 近くの学校では、中学校の英語の先生が小学校の外国語活動の授業をしたり、小学校の子どもたちが中学校のお兄さんやお姉さんたちと一緒に勉強もしたりします。
- 学校では、小田原の街の全体を生きた学習教材として、地域との関わりを大切にした授業を行っています。
- ある小学生の会話です。「私たちの小学校では地域の方に協力してもらい、農業体験学習を行っています。以前は、苗を植えたり、収穫したりしただけでしたが、今は、収穫まで通してずっと頑張ってます。採れた野菜は、調理実習や給食の食材にして食べています。自分たちで育てた野菜が給食に出ると、食べ残しが少なくなり、食べ物を大切にする心が芽生えてきました。収穫祭ではお手伝いしてくれた地域の方に私たちが作った料理を食べてもらいます。どんな献立にしようか皆で話し合いました。」
- また、ある小学生からは、「私たちの小学校の校庭は芝生です。転んでも痛くないので、校庭を走り回って遊ぶことが大好きになりました。」と聞きました。この小学校の芝生は地域の方が育てています。たくさんの人が水撒きや芝刈をするために学校にやって来ます。子どもと一緒に運動をしたり、遊んだりもします。
- 「うMY弁当」の日を設定する学校が増えました。英語の授業では自分の一日の食生活を英語で表現する授業も行っています。PTAでも同じ日に「簡単朝食メニュー教室」を開いており、食育の重要性について、多くの人が考えるようになってきています。
- F小学校では、「自分の考えを論理的に説明し、相手に上手に伝える力を育むこと」を学校教育目標として、言語活動の充実に取り組んできました。今までだったら、些細なことで言い争いから喧嘩に発展しまったことでも、今では自分の気持ちをきちんと相手に伝え相手の話もじっくりと聞ける力が子ども達についてきました。

・いじめ・不登校へ対応する体制も整備されてきています。不登校の子どもが学校に復帰するための場が充実し、本人の努力と家庭・友人・教職員そして地域の人たちとの多くの関わりもあり、不登校の子どもが減ってきました。

・特別なニーズのある子どもたちのための特別支援教育も通常級との積極的な交流を進めるとともに、家庭と学校が一緒になって特別支援教育を推進しています。

平成34年ごろ

・校舎リニューアル事業の完成から 10 年が経ちましたが、子どもたちは生き生きと充実した活動をするとともに、学校を我が家のように大切に使っており、教室等は、とてもきれいな状態です。

・地域の人が毎日学校に出入りするせいか、子どものことや困ったことなどをお互いに話をする機会が増えて、保護者も地域との繋がりが深まり、目の前のことだけでなく先を見通した家庭教育を考えてくれるようになりました。

・「わたしの子ども」から「わたしたちが育てる子ども」にみんなの意識が変わってきたように感じます。

・学校では、さまざまな授業で、地域の人が自分の職業経験などを生かして子どもたちに教えています。職場体験学習も地域の農家や工場、商店などの方の協力により、いろいろな体験ができます。一週間以上の職業体験を行う学校もあります。お客様として体験するのではなく、仕事の厳しさにも触れることが出来、職業について真剣に考えるきっかけとなっています。

・子どもたちが自ら進んで学ぶことができるよう、教職員が教材等の工夫をしたり、授業を改善したりする時間が生まれました。授業では、学習内容ごとに違ったグループに分かれたり、科目やその日に勉強する内容によって学習時間の長さも変えたりしています。分からないことは学年に関係なく学び直すこともできます。

・身体の不自由な子どもも、そうでない子どもも、共に学びあっています。地域の人たちも、身体の不自由な子どもたちの介助を手伝ってくれます。

・お年寄りや身体の不自由な人も学校に来る機会が増え、学校施設には、段差もなく、安全で移動しやすいように改善が進んでいます。

・子ども達は、学校の近くに住むお年寄りのところに行ってお手伝いをします。お年寄りとの交流を通じて、生活の知恵や昔の地域のことを教えてもらっています。

・子ども達は、たくさんの人との関わりを通して、いろいろな考え方に接し、自分の考えを持つとともに、他の人の考えや立場も理解できるようになってきています。

・子ども達の体力テストを行ったところ、校庭を芝生化した学校では、子どもの運動能力が向上しているという結果が出ました。また、芝生化を通じて、学校と地域が一体となっていろいろな事業に取り組んでおり、「うちの学校でもやってみたいので、ノウハウを持った人を紹介して欲しい」という声が教育委員会に届いています。

・子ども達は、健康に良い食事を自分で管理する能力が身に付き始めるとともに、朝食を食べて学校に来るようになりました。その成果でしょうか、落ち着いて学習できるようになり、学力も体力も向上してきています。

・子ども達には、自分の食べるものを自分で育て、収穫し、調理することによって、食べ物への感謝の気持ちが育まれています。中学生の食べ残しも減ってきました。また、種まきから収穫までおこない、さらにその収穫物を売るという一連の活動を学習の中に組み入れたD小学校では、地産地消の重要性に気づいたり、日本全体の食料自給率を高める工夫を考え、農林水産省や文部科学省宛に「提言書」を送付し、食育からグローバルな視点へと発展させている学校もあります。

・不登校児童・生徒の学校復帰の取り組みとして、地域の方々やNPO団体との協力で農業体験やキャンプ体験が数多く行われるようになり、学校復帰を果たした児童生徒数は増加しています。

12　産業･就労環境の整備

概要

作成：産業政策課、高齢介護課、子育て支援課、障害福祉課、都市計画課

シナリオのタイトル：ワーク・ライフ・バランス小田原ドリーム

サマリー（概要）

・優良企業誘致による雇用の創出と、地場産業の発展による雇用の拡大により地域を活性化しようとするまち小田原。

・小田原に住み、小田原で働き、地域に密接にかかわりを持ちながら、家族･友人などとの充実した時間の中で生活することが豊かな生活であるというライフスタイルに応えるまち小田原の創造。

・若者がいきいきと働き、経済的に自立し、結婚や子育てへの希望が実現するまち小田原。

・性別や年齢などにかかわらず、誰もが自らの意欲と能力を活かして様々な働き方や生き方に挑戦できるまち小田原。

・子育てや親の介護など住む状況に応じて多様で柔軟な働き方ができるまち小田原。

・市民と企業と行政が協同してまちづくりに取り組む、住みやすいまち小田原。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「経済状況」「少子高齢化」「人口減少」「女性の社会進出」「都市基盤整備」「工業団地の整備」「企業誘致」

「大型商業施設」「非正規労働者」「障害者雇用」「外国人労働者」「ライフスタイルの多様化」

平成23年ごろ

・Aさんは、東京に住む大手電気メーカー勤務のサラリーマン。妻(42歳、小田原生まれ)と子供2人(長男「太郎」5歳、長女「花子」2歳)と暮らしています。

・Aさんの勤める会社は、金融危機後の厳しい経済状況の中、Aさんは、製品の配送コスト削減の特命を受けています。

・Aさんは、打開策として、ライバルメーカーとの垣根を越えた共同配送センターの建設に取り組まなければならないと考えており、毎日のように、首都圏はもとより、静岡県までを視野に入れて候補地の選定に取り組んでいます。

・候補地の中には、妻の実家がある小田原も含まれています。小田原にある西湘テクノパークの分譲募集の新聞広告ももちろん切り抜いて資料としてあります。

・Aさんは、結婚前から小田原には度々訪れていて、特に子供が生まれてからは、夏休みや冬休みに限らず折を見ては妻の実家を訪れていました。

・小田原は、海･山･川の自然が豊富で、子供たちも自然の中で遊ぶ事が大好きなので、小田原に行くのを大変喜んでいます。もちろん、おじいさん、おばあさんに会うのも大変楽しみにしています。

・海の幸･山の幸が豊かで美味しいし、加えて、妻の実家から少し足を伸ばすだけで、箱根、湯河原の温泉地に行けることから、Aさん自身も、小田原を尋ねるのを楽しみにしています。両親も気さくな人柄なので、小田原は非常に居心地が良く、第二のふるさとのような気持ちです。

・Aさんの妻は、結婚と同時に医療事務をしていた病院を退社してパートをしながら子育てをしています。小田原の両親も高齢となり、健康が心配なことや自然の豊かな所で子育てをしたい思いもあり、両親との同居についてこのごろ良く考えています。

・小田原のお父さんの話によると、世界的な不況の影響により、小田原にある大手企業の工場や事務所も業績

不振のために、小田原から撤退したり、雇用調整や季節労働者の契約更新ができなかったりと働く環境は厳しくなっていて、神奈川県労働局で公表されている有効求人倍率は過去最低の0.4倍に落ち込んで就職環境は厳しさを増しているそうです。大手企業でさえも企業経営の方向性を誤ると崩壊してしまうからこそ、必ず、プロジェクトを成功させるとAさんは強く思いました。

・小田原市では、新たにビジネスを始める人向けに支援するとともに、100年に一度の不況の対応策として、国の景気浮揚政策を活用した、景気対策予算が含まれた予算が組まれ、継続的な経済対策も実施され始めています。

平成28年ごろ

・政府の緊急経済対策が実を結びはじめ、景気も底を打ち、基幹産業を中心に徐々に景気回復に向かってきています。

・Aさんの会社でも生産が上向いてきて、残業も増えてきました。特に国が強力に推進している環境に配慮した製品については、家電製品を中心に売り上げを伸ばしています。

・Aさんの会社では、この機を捉えて、配送センターの建設計画を進めることとなり、ちょうどタイミングが合ったことから、小田原の工業用地が有力候補に上がっています。小田原の工業用地は、設備投資に対する市税の優遇措置があることや担当者が熱心なことなどが表向きの理由ですが、Aさんの本心は、配送センターの窓から望む日本一の山富士山と、緑と川の流れが美しい足柄平野を眺めながら、仕事ができる環境で、仲間に仕事をしてもらいたいと思っているからです。

・Aさんの会社では小田原に開設準備事務所を開設することになったので、これを機に、Aさん一家は、妻の実家に引っ越すことにしました。

・Aさんが進める配送センターの建設計画により、工業団地の整備が一段と現実化してきました。この地域周辺は、県道や酒匂川を渡る橋、市道などの道路網などの都市基盤の整備が進んできており、Aさんの会社の要望に十分応えられることから、ついに配送センターの建設が決定しました。さっそく、建設準備室を設置するところまで話が一気に進みました。

・Aさんとしては、配送センターの機能の設計をしながら、働く人の募集も考えなければなりません。雇用に関しては、企業内保育所設置への補助、非正規雇用から正規雇用への転換の補助、職業訓練を積んだ障害者の雇用による補助等、行政からの補助金を有効に活用する計画を考えています。さらに、配送センターの従業員のための住宅地の開発も要望しようと考えています。

・小田原市の地場産業製品も駅前のアンテナショップの情報を基に世界に通用する製品開発を進め、ビジネスモデルが出来上がりブランド力が定着してきたことで、徐々に活性化してきています。

・小田原の食についても、「小田原どん」、「小田原おでん」が引き続き好調で、全国に知られることとなってきており、販売をしている飲食店は売り上げを伸ばし、まち全体に活気が戻りつつあります。

・Aさん家族も小田原に引っ越してきたことにより、Aさんは、通勤時間が自転車で10分となったことから、建設準備のために忙しいながらも、家族との時間が多くなったし、地域の活動に参加したり、地元の商店街や小田原の街中に出かけることも多くなりました。

・妻も、同級生の知り合いから紹介された、歯科医の受付の仕事を週に3日ほどすることにしました。一緒に働く方もパートタイムの方で、お子さんを保育園にあずけて勤務していますが、ここ数年来、比較的容易に保育園に入園ができるようになって働きやすくなってきたと言っていました。

・子供たちも新しい学校に慣れてきて、毎日元気に登校しています。先日は、学校で小田原についての授業があり、海、山、川などの自然に恵まれ、水産物や農産物とその加工品、畜産関係品の販売、商店街、ショッピングモールや百貨店など、それに小田原の特産品もたくさんあって驚いていました。

平成34年ごろ

・配送センターが稼動し始めて3年が経過しました。業務は順調に進んでいます。社内からの転勤者と地元採用の社員により、効率よく運営されています。自国に宅配制度を作るのが目的の外国人研修生も受け入れたところ、非常に熱心で、社員の刺激にもなっています。配送センターは、通路も広くコンピュータ管理のため、職業訓練を受けた車椅子の障害者にも非常に働きやすくなっています。徹底的に省力化されたシステムと太陽光パネルを活用した環境共生型社屋による配送業務では、あと10年は他の追随を許さないと思っています。最近で

は他業種から配送のビジネスモデルを作ってみないかとのオファーがあり、高齢者の労働力を活用した新たな事業の立ち上げに取り組もうと考えています。

- 新たな事業への取り組みはAさんだけではありませんでした。先日、友人が小田原の体験型農業ツアーで下曽我に泊まりに来ていました。そのツアーを組んだのは、小田原で起業した旅行会社で、小田原、箱根、湯河原、真鶴方面の体験型観光ツアー企画をたくさん商品化しているようです。
- 小田原に移り住んでから5年が経過しましたが、通勤ラッシュから開放され、家にいる時間も多くなり、地域への貢献や、会社としての地域への貢献を含め、公私共に充実感を持って働けた5年間でした。
- 妻も、働きながら、親しみ慣れた地元の自然の中で、子育てができて、両親も身近にいることから、今後起こりうる介護などの心配も解消され、引っ越してきて良かったと言っています。
- 妻の話によると、住んでみたいまちのランキングで、小田原が上位に入ったことが、自分が褒められているようで嬉しいと言っていました。
- 配送センターの近くには、共同で配送を始めようとする他業種の事務所も進出し始めてきているので活気付いてきています。
- 10年以上前に提唱された「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」、一人ひとりが、やりがいや充実感を持ちながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期、それぞれの場面に応じて多様な生き方が選択できて、実生活ができるまち。今の私は、それが実現できているのかもしれない。そういえば、市の担当者が、数年前から、地域の特徴や地場産業製品の授業を増やし、小さいころから小田原のことを学習する時間を増やし、地場産業製品の消費を増やすとともに、できればUターンしてきて地域の企業に勤めてもらいたいと言っていたのを思い出しました。子供たちも、こういう生活が選択できる時代であって欲しいと、会社の窓から富士山と足柄平野を眺めながら思いました。

13　商業の振興

概要

作成者：産業政策課

シナリオのタイトル：潤いと賑わい（自主努力型）商店街活性化ストーリー

サマリー（概要）

・少子高齢化などの社会環境の変化にともない商店街の役割も多様化しています。また、「食の安心・安全」をはじめとする消費者ニーズへの対応も求められています。市内各地域の商店街では、自らが主体となり、それぞれの地域特性を生かした事業を展開しています。中心市街地では、再開発事業等により活性化が図られ、商店街も賑っています。また、川東地区の商店街では、自治会や市民団体など様々な主体とともに、地域コミュニティの核として賑わいを創出しています。インターネット販売や「地域ブランド」創出への取組みも進んでいます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「中心市街地の活性化」「地域ブランドの創出」「インターネットの普及」「食の安全・地産地消」

「コンパクトシティの整備」「後継者育成」「人口動態」「新業態」「商店街の役割の多様化」「安心・安全」

「基盤整備」「少子高齢化」

平成23年ごろ

・市や商業団体では、『小田原どん』や『小田原手形』、『小田原の匠』事業、街かど博物館の整備など、『地域ブランド』の創出や街なかの回遊性を高める取組みを進めています。また、小田原駅前の地下街に『小田原魅力発信館』がオープンしました。

・Aさん（商業者、30代、6人家族）は、小田原駅周辺で商店を営んでいます。Aさんの商店街では、市等が開催する大きなイベントや観光シーズンに合わせイベントを開催し、売り上げ向上を図るとともに市のアドバイザー派遣事業などを活用し、特色を活かした商店街と個店づくりに取組んでいます。

・Aさんは、ここ数年、観光客が増えつつあることを感じています。Aさんは、「このまま観光客や来街者が増え続けるといいな。」とオープンした「小田原魅力発信館」の集客力に期待しています。

・Aさんは、「小田原魅力発信館」の集客力を見込んで、観光客を商店街に取り込む仕掛けづくりを近隣商店街の若手グループで研究しています。また、商店街に空き店舗があることから『まちづくり会社』等と協力して有効活用の方法を検討しています。

・Bさん（商業者、50代、男性、6人家族）は、川東地区で商店を営んでいます。Bさんの商店街では、市や関係団体の支援を活用しながら販売促進強化につながるイベントを開催しています。しかし、大型店舗が近隣に集積していることもあり、なかなか効果が上がらないのが現状です。Bさんは商店街の仲間と「どうしたら、地元の人が商店街をもっと利用してくれるのかな」と話しています。

・Bさんは、市と商業団体が主催した市内商店街店主を対象にした研修会に参加しました。研修会では、少子高齢化など社会状況の変化の中で商店街に求められる役割が多様化していることが説明され、先進事例なども紹介されました。Bさんは、研修会で学んだことを商店街の会合で報告しました。商店街では今後のあり方を考える研究会を発足させました。

・Bさんの商店街では研究会を中心に、市のアドバイザー派遣事業などを活用しながら調査や研究を重ね、地域の特性、実情に合わせたサービスを実施していくこととしました。

・Cさん（30代、パート、女性、4人家族）は、川東地区に住んでいます。近くに商店街がありますが、仕事をしていることもあり、一度に何でも買える大型商業施設に買い物にいきます。

・Cさんは「食の安心・安全」を心がけています。大型商業施設で買い物する時も生産者がわかる食材を購入しています。

平成28年ごろ

・市や商業者、関係団体のPR活動により『地域ブランド』商品の知名度、売り上げが上がるとともに、『小田原魅力発信館』や『街かど博物館』などの街なか回遊拠点施設やウォーキングコースなど小田原を楽しむツールの整備が進み、観光客や来街者が増加しています。

・また、中心市街地で再開発事業が少しずつ進み、居住者が微増してきました。

・Aさんの商店街にあった空き店舗は、近隣の商店街が共同で運営する『地域ブランド』のアンテナショップになっています。アンテナショップでは、商店街の歴史やなりわい文化も紹介しており、街なか回遊拠点の1つとして機能しています。Aさんの商店街では、小田原を訪れる観光客や来街者が増加したことで売り上げが伸びています。

・Bさんの商店街では空き店舗を活用した集会施設が商店街の中心にできています。集会施設は、買い物客のお休み処や子どもたちの遊び場、地域団体の会合、イベント、旬の食材を使った料理のレシピの紹介や実演販売、学生の体験ショップなど多目的に活用されています。運営には、商店街だけでなく自治会をはじめとする地域の様々な団体が関わっています。集会施設を中心に人が集まり活気がでてきました。また、商店街の売り上げも増えてきました。

・集会施設で聞くことのできるお客さんや地域の人の声はBさんの商店街づくりの参考になっています。Bさんは集会施設でお年寄りが「買い物に来れなくなることが心配」と話していることを聞きました。商店街では、自治会など地域団体とも協力し、お年寄りの安否確認を兼ねた宅配サービスを行うことにしました。

・若手商店主を中心に地域の農産物のインターネット販売も始まっています。『食の安心・安全』が求められる中、生産者の顔が見える商品は徐々に認知されてきました。旬の農産物を使った料理レシピを加えて紹介するなどホームページの工夫も効果を上げています。また、地元の農家とも協力し、市で進めている『地域ブランド』の認定も目指しています。

・商店街を訪れる人には、いろいろな店から声がかかります。何度か訪れるうちにすっかり顔見知りです。特に商店街が通学路の子どもたちは人気ものです。子どもたちも大きな声であいさつしています。

・市や商業団体では、定期的に市内商店街を対象とした研修会を開催しています。研修会では、市内商店街の取組みを紹介し、各商店街のスキルアップに繋げています。Bさんの商店街の取組みも研修会で発表し、他の商店街の取組みの参考になっています。Bさんは商店街の取組みが評価されたことが励みとなり、近隣の商店街とも協力した新たな事業を商店街の仲間と模索しています。

・Aさんも研修会に参加し、Bさんの商店街の取組みを聞きました。これまでAさんの商店街では、観光客を中心とした取組みを進めてきましたが、まちなか居住者が増えつつあることも感じているAさんは大変興味深く聞きました。

・Aさんの商店街では、近隣商店街と勉強会を設けることになりました。研修会での話も参考にしながら、市や関係団体、『まちづくり会社』と協力しながらより魅力ある商店街づくりを模索しています。

・Cさんは近所に住む母親から近くの商店街によく出かけるようになったことを聞きました。集会施設ができ、旬の食材での料理レシピを教えてもらったり、知人とのおしゃべりを楽しんだりしているとのことです。今度の休日に集会施設で子ども向けイベントが行われるとのことで、Cさんは子どもをつれて商店街にでかけることにしました。

・当日、商店街は集会施設を中心に賑っていました。いろいろな店から楽しそうな話し声が聞こえてきます。Cさんは商店街の様子が以前と変わってきたことを感じました。

・店を覗くと地元の食材が並んでいます。店の人から、地元の農家などから取れたてのものを仕入れていることを聞きました。Cさんはいくつかの食材を購入しました。

・Cさんが、集会施設に行くと子どもの同級生も遊びに来ていました。同級生のお母さんから、集会施設はイベントがない平日でも子どもの遊び場として開放されていて、常時見守りの大人がいること、商店街の人も見ていてくれるので安心して子どもを遊びに行かせられることなどを聞きました。

・数日後、Cさんの子どもたちは集会施設に遊びに行くようになりました。

平成34年ごろ

- 観光客は順調に増え、中心市街地の再開発事業も進み街なか居住者も増えてきました。
- Aさんの商店街は賑わいを見せています。近隣の商店街もそれぞれの特色を活かしたことで売り上げを伸ばしています。観光客が中心の商店街もあれば、増えてきたまちなか居住者を中心に取組んでいる商店街もあります。
- 商店街の空き店舗は、街なか回遊拠点やコミュニティの拠点などに活用されています。
- Aさんはこれからも各商店街の個性を活かした商店街づくりを進めようと考えています。
- Bさんの商店街では、『宅配サービス』や『商品の取寄せ』などいろいろなサービスが順調に運営されています。Bさんの商店街だけでなく近隣の商店街と共同で運営していることでサービスのメニューを増やすことができました。
- 地域の特産物は『地域ブランド』に認定されたことで知名度が上がり、売り上げが伸びてきました。また、地域の農産物も確かな品質で需要が増えています。若手商店主も手ごたえを感じています。
- 集会施設では、商店街や地域団体の人が集まり、地域での新たな取組みについて話し合われています。商店街の賑わいが励みとなり、いろいろなアイディアが出ています。
- 各商店街が集まって研修会を開催しています。各商店街の取組みについて活発に意見交換がされています。若い商店主も増えてきました。
- Bさんの商店街では、今日も賑やかな声が響いています。お年寄りや子どもたち、若い人たちも楽しそうに買い物をしたり、話をしたりしています。Bさんはこの商店街が大好きです。「これからもがんばるぞ。」と思っています。
- Cさんは、仕事帰りに集会施設に子どもたちを迎えにいきます。途中いろいろな店から「お帰り。いい魚があるよ。」「とれたての野菜がはいったよ。」「また明日。」など威勢のいい温かみのある声がかかります。Cさんは夕食の食材を買いながら料理のレシピを聞きました。すっかり商店街で買い物をするのが習慣になりました。
- 帰り道「今日は遊びに来ているお年寄りにお手玉や竹とんぼなど、昔の遊びを教えてもらって楽しかった」と子どもたちから聞きました。Cさんは子どもたちに話しました「よかったね。明日もまた来ようね。」と。

14　観光まちづくりの推進

概要

作成者：観光課

シナリオのタイトル：地域資源の整備が充実～観光魅力は急上昇～

サマリー（概要）

・小田原には長い歴史に培われた史跡や伝統産業があり、貴重な観光資源となっています。これらを磨き上げ活用することによって交流人口の拡大につながっていきます。

・小田原市の観光といえば小田原城が広く知れわたっており、多くの観光客は小田原城を訪れています。しかし、これだけでは小田原の街中を回遊する魅力は余りありません。

・小田原城の魅力を高めることは、小田原の観光にとって非常に重要ですが、それ以外にも市内には長い歴史に培われてきた文化や産業などが今もなお連綿と受け継がれてきています。これらを観光資源として光を当て、これまで「小田原は城」という限定されたイメージから大きく飛躍し、あらたな魅力が潜在するまち・小田原が創造されます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「観光客」「パンフレット」「お堀端通り」「天守閣」「小田原城」「アジ」「板橋界隈」「小田原漁港」「旧東海道」

「回遊バス」

平成23年ごろ

・Aさんは、○○市在住の高校3年生。両親と弟の4人家族です。歴史や文学に興味を持ち、よく友達や家族と一緒に街歩きをすることが好きな普通の高校生です。家族や友人とよく行く街は横浜や鎌倉。一日のんびり街歩きをするのには比較的近く、また観光スポットが多く食事をするところもたくさんあるので飽きることはないようです。

・父親が小田原を紹介した雑誌を持ち帰ったことから、いつもは東の方に目が向いていたのですが、たまには西の小田原に行ってみることになりました。

・小田原駅は、リュックサックを背負った人が大変多く、改札口を出たところは待ち合わせの人々で大変混雑していましたが、その多くはここで乗り換えて、湯河原や箱根方面に行く人たちのようです。

・Aさんたちは観光案内所でいくつかパンフレットやマップをもらい、とりあえず小田原城へ向かいました。案内表示に従い歩いていると、「お堀端通り」との表示があり、小田原城址公園の正面入口はここを通るように案内されています。

・商店が連なる「お堀端通り」をしばらく歩くと、お堀が見えてきて前方に赤い橋があり多くの人はそこから城址公園に入っていましたが、マップの案内に従い馬出門から入ることにしました。

・土橋を渡り、馬出門をくぐり馬屋曲輪に進み、また堀を渡り銅門を抜けると、さらに高い位置に常盤木門や天守閣が見えます。常盤木門へ続く階段は結構急で、息を切らせながら上ると本丸広場で、天守閣が一行を威圧するように聳えています。

・天守閣の中にはいろいろな展示品が数多く陳列され、最上階へ上ると、そこからは大きく広がる相模湾や箱根山、遠くには大島や房総半島まで見ることができました。

・城址公園を出たAさん家族は、パンフレットに掲載されている「小田原どん」の店に行き昼食をとりました。新鮮な魚の料理と素晴らしい食器での食事は少し値段が高めではありましたが大満足でした。

・次に、回遊バスに乗り込み、板橋方面へと向かいました。ここはあまり知られてはいないようですが、パンフレットには落ち着いた佇まいの残る界隈として紹介されていました。国道1号から旧道に入ると雰囲気は変わり、昔な

がらの街並みが残り、歩いて散策するにはいいところです。

- 地図を頼りにさらに細い道を歩き、松永記念館を訪れました。ここに来ると、車の騒音はほとんど聞こえず、庭園を散策し静かなひと時をすごしました。
- さらに、いくつかの寺や別荘跡を散策しました。この狭いエリアに多くの寺が密集し、歴史の教科書に出てくる山縣有朋をはじめと多くの政財界人が別荘を建てた地域だったことをはじめて知りました。
- 再び回遊バスに乗り、小田原駅に着いてから駅中の土産物屋でかまぼこを購入し、帰路に着きました。電車の中でパンフレットをよく見ると、かまぼこ工場の見学や、古い商店などを見学することができることや、さらに文学者の足跡を体感することができるポイントが多くあることが書かれていて、案外小田原のも面白い街かもしれないと感じた一日でした。

平成28年ごろ

- Aさんは短大を卒業し、小田原市内の会社に勤めて3年が経ちました。小田原を就職先に決めたのは、いくつか理由がありますが、その一つは東京や横浜よりも落ち着いた街であり、さらに通勤が楽からです。
- 短大の友達の多くは東京や横浜に就職していましたが、その友達を久しぶりに遊ぶ約束をし、行き先はAさんの勤めている小田原にしました。
- 小田原駅は、4月の日曜日の朝ということでリュックサックを背負った人が大変多く、改札口を出たところは待ち合わせの人々で大変混雑していました。この光景は、5年前と同じですが、観光案内所でパンフレットやマップをもらい、それを頼りに市内へ向かう人が多くなってきているようです。
- お堀端通りを歩くとすぐ堀が右手に見えてきます。ここは、Aさんのお気に入りのスポットの一つになっています。特にこの時期はサクラが綺麗で、非常に多くの観光客で歩道を歩くのも一苦労な状態です。とりあえずベンチに座り、どこへ行くか観光案内所でもらったパンフレットを見ながら説明をします。モデルコースがいくつか設定されているようですが、行きたい場所がたくさんあるので、Aさんのお気に入りのスポットを選んで散策することにしました。
- 最初は城址公園です。馬出門から馬屋曲輪に入ると、そこには大腰掛と馬屋の二つの建物が復元されていて、江戸時代の姿に整備されていました。馬屋の前からは、銅門から常盤木門、そして天守閣が同一線上に見ることができ、多くの観光客が記念撮影をしていました。
- 常盤木門をくぐると本丸が広がり、天守閣が威厳ある姿で訪れる人々を圧倒しています。木製のベンチに腰掛けたり、芝生にシートを広げ楽しそうにくつろぐ光景も見られます。
- 4人は天守閣に入りました。内部はリニューアルされて、順番に小田原の歴史がわかりやすいように展示、解説され、特に戦国時代の北条氏のコーナーや江戸時代の小田原城や城下町のコーナーには、多くの人が熱心に鑑賞していました。
- 城址公園を後にした4人は、歩いて西海子小路に向かいます。ここもサクラが綺麗で、たくさんの観光客がリュックを背負って歩いていました。
- 文学好きなAさんが一度訪れてみたかった小田原文学館に立ち寄りました。ここは、小田原ゆかりの文学者の資料が展示されているとともに、建物も文化財としての価値があり、さらに庭には桜をはじめ緑の大変きれいな場所で、多くの市民の憩いの場となっています。
- 昼食をとるために雅美さんたちは、歩いて早川漁港に行きました。歩く途中でレンタサイクルを利用した人々が早川方面に行く姿も多くみられました。早川漁港周辺の店は、新鮮や魚を売りに結構流行っているようで、多くの観光客がどの店に入ろうか迷っている光景が見られました。
- 食後は、そこから回遊バスに乗り板橋へ向かいました。松永記念館では地元の方が抹茶をサービスしてくれ、のんびりとしたひと時をすごしました。そのあと、付近の寺社や別荘跡を散策し江戸時代や近代のこの付近の歴史や文化を感じ取ることができました。
- 帰りは、回遊バスの中でガイドに紹介してもらった「なりわい交流館」に立ち寄りました。ここで、街かど博物館の説明を受け、小田原駅へ向かう途中立ち寄ることにしました。
- 「街かど博物館」では、店の人が親切に説明をしてくれことで小田原の産業や人々の営みを知ることができ、陳列されている商品を見る目が以前とは大きく変わってきました。若干値段は高いですが、伝統工芸品を土産として購入しました。
- 帰りの電車の中では、小田原の街を初めて歩いた友達は、歴史のあるまち、人々の営みを肌で感じることがで

きるまち小田原に就職しているAさんをとてもうらやましいと思いました。

平成34年ごろ

- Aさんは短大を卒業し、小田原市内の会社に勤めて早いもので10年が経ちました。彼女には、小田原市内在住で同じ会社に勤めている直幸さんという男性と付き合っています。
- 普段、直幸さんは小田原の街を歩くことはありませんが、Aさんに強く誘われて自分の住んでいるまちを一緒に散策することにしました。
- 5月の中旬、待ち合わせの小田原駅の改札口の前は、いつものとおり多くの観光客で混雑しています。二人はパンフレットをもらうために観光案内所に立ち寄りました。直幸さんはここに立ち寄るには初めてとのことです。
- 話を聞くと、最近の傾向として比較的ファミリー層や若い世代の姿が目立つようになっているようです。また、多言語のパンフレットが多くそろっていて、外国からの観光客も街中を散策することが多くなっているとのことです。
- 直幸さんは、お城は高校卒業後一度も行ったことはないというので、Aさんが案内役で向かいました。お堀端通りの歩道は大変歩きやすく整備され、周辺の店も城下町を意識したつくりに改装していて、多くの観光客が立ち寄っているようです。お堀沿いからは天守閣を仰ぎ見ることができ、この威厳に満ちた姿は小田原城がまちのシンボルであることを印象付ける光景でした。
- 馬出門や大腰掛と馬屋が復元された馬屋曲輪一帯は、日ごろからきれいに管理されていて、落ち着いた雰囲気でした。この付近では、甲冑姿のボランティアの方々が出迎え気軽に写真撮影に応じています。またここからは、住吉堀越しに銅門と合わせて常盤木門や天守閣が見上げることができ、訪れた人に江戸時代の小田原城を体感してもらえるエリアとなっています。
- 常盤木門を通ると正面に天守閣が堂々と高くそびえる姿を現し、いたるところで記念写真を撮影する人がいます。天守閣の入口には既に多くの多くの観光客が並んでいます。中に入ると、小田原城の歴史がよく分かるように展示されていました。
- 城址公園を後にした2人は、西海子小路へ向かいました。ここはサクラの時期も素晴らしいですが、新緑の季節もお気に入りです。道端にある喫茶店の窓越しの席でお茶を飲みながら、この景色をのんびり眺めるのが特にAさんにとって贅沢なひと時になっています。
- 次は昼食です。早川漁港は綺麗に整備され、新鮮や魚を求めて休日は大変多くの観光客が訪れるスポットになっています。周辺には小田原の新鮮な魚を売りにしている店が軒を並べ、昼時は平日でも多くの人が食事に訪れています。二人は、これからが旬の「アジのたたき」を食べました。直幸さんは小田原のアジのおいしさを再認識しました。
- 歩いて15分ほどで板橋界隈に着きました。ここは、以前と変わらず静かな佇まいを見せ、国道1号沿いとはまったく別世界のような空間です。旧道からさらに奥に入ると、歩道はきれいに整備されて歩きやすくなっていています。
- 歩道の脇を流れる用水は、以前はあまり気にはなりませんでしたが、この地域の人々の昔からの営みを物語る大切な要素として、綺麗に整備されています。
- 松永記念館を始め別荘跡や幾多の寺院、そしてそれをつなぐ散策道。以前に訪れたときよりも案内表示が分かりやすく設置されていて、地図を見なくても迷うことなく付近を散策することができます。
- 帰りはまたのんびり国道1号沿いを歩き、途中にいくつかの店を覗きながら小田原駅へ向かいました。Aさんは小田原生まれで小田原育ちの直幸さんよりも小田原のことをよく知り小田原のことを好きになってきています。だからこそ、直幸さんにも小田原のことをよく知ってほしいと願い、一緒に散策したのです。
- パンフレットによると、板橋周辺だけではなく南町や浜町界隈も歴史的な風情やそこで生活する人たちの営みに接することができるように街並みが整備され、大変に賑わっているとのことです。
- Aさんの心の中には、自分がこの街で一生涯生活していく決意が徐々に高まってきた一日でした。

15-16　農業･水産業の振興

概要

作成者：農政課、水産海浜課

シナリオのタイトル：小田原の農業・水産業の振興ストーリー

サマリー（概要）

・小田原市の農業は、蜜柑の価格の低迷や、生産基盤の整備の遅れ、担い手の不足などから、果樹園を中心に耕作放棄地が増えています。そこで、農産物のブランド化による消費拡大や担い手の育成などを進めています。また、食の安全や地球環境に対する関心が高まり、有機農法等による安全な農作物の生産や地産地消が注目され、地場農産物の直売所が賑っています。

・水産業においては、小田原漁港に蓄養施設や加工施設、交流促進施設の整備計画があり、施設が完成すると水産物の安定供給や、消費拡大などが期待されます。

・小田原産の農水産物のブランド化や食育の推進などによる地産地消に対する市民の意識の高揚が、今後の農業･水産業の元気回復につながります。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「環境配慮」「地産地消」「食の安全･安心」「食育」「小田原ブランド」「市民活動」「生産基盤整備」「有機農業」

「都市交流型農業」「観光農業」「漁港整備」「交流促進施設」

平成23年ごろ

・小田原市では、「地元でとれた野菜や魚を食べよう！」とキャンペーンを始め、広報おだわらで特集記事を組むとともに、毎月、地元の野菜や魚の旬の時期、おいしい食べ方のレシピなどを連載で紹介しました。

・小田原に住むAさん（35歳、女性、主婦、4人家族）は、スーパーに行くと小田原産と表示された野菜や魚が増えてきていると感じていました。小田原産の食品を購入することを小田原市が推奨していることは知っていましたが、特に意識することもなく選んでいました。

・ある日、Aさんがスーパーで買い物をしていると近所に住むBさん（42歳、女性、主婦、3人家族）に会いました。Aさんは、Bさんが環境を考える団体で活動していると聞いていたので、小田原産の食品を買うことがなぜいいのか聞いてみました。

・Bさんは、地元産のものを買うとトラックなどでの輸送距離が短くて二酸化炭素の排出が少なくなり、環境にいいことや、最近、小田原では、有機農法が積極的に取り入れられていて、農薬や化学肥料の使用が少ない野菜などが増えていることなどを教えてくれました。Aさんは、地元の食材のことをもっと知りたいと思い、小学校のPTAで小田原市の出前講座を申し込み、さらに詳しく話を聞きました。Aさんは、「環境や食の安全･安心や小田原の農業･漁業のことを考えて、できるだけ小田原産の食品を買おう」と思いました。また、「Bさんから聞いた話や出前講座で聞いた話をほかの人にも教えてあげよう」と思いました。

・小田原市では、農作物の価格低迷や、財政状況の悪化による農業生産基盤整備の遅れにより、果樹園を中心に耕作放棄地が多く見受けられます。また、農業者の高齢化や担い手の不足により、さらに耕作放棄地の増加することが心配されています。このため、神奈川県、小田原市、農業委員会、農協による担い手育成や耕作放棄地対策の協議会が設置され、対策が進められています。

・Cさん（69歳、男性、農業、6人家族）は、親から引き継いだ農地で果樹と野菜を作っています。Cさんの果樹園は丘陵地にあり、一部には軽トラックが入る道が整備されていないところもあります。昔は農具を担いで行ったけれど、年齢とともに行けなくなり、耕作できなくなったところも増えてきました。息子さんも、そんなに苦労して農業を継ぎたくないと言って会社勤めをしています。「もっと農道が整備されたら遊ばせている果樹園もまた耕作できるし、息子も農業を継いでくれるかもしれない」と考えています。

・小田原市では、小田原の代表的な農産物である、十郎梅の価値を高め、販路を拡大するために、数年前から十郎梅ブランド向上に向けた協議会設立され、プレミアム梅干や十郎梅の梅干を使った新しい料理の開発を行うなどとともに、ホームページでの紹介など様々なPRを行っています。また、最近、神奈川県が開発した湘南ゴールドのブランド化に力を入れていると聞いたので、Cさんは今までの温州蜜柑からの改植を考えています。

・Cさんは、少し前にできた地元農産物の直売所に野菜を出荷しています。直売所までは少し遠いので、朝持っていき夕方に残ったものを引き取るのは大変ですが、価格をある程度自分で決められたり、消費者の声が聞けたりして、張り合いを感じられるので、「もっと近くにも直売所があったらいいな」と思っています。

・Dさん（56歳、男性、漁業、5人家族）は、長年、刺網漁業をしています。今後、小田原漁港が整備され、交流促進施設もできると聞いているので、観光客を始め多くの人が訪れて魚の消費が拡大されることを期待しています。また、蓄養水面の整備ができると定置網や刺網漁業も出荷調整ができるようになり、収入も安定すると期待されています。

平成28年ごろ

・Aさんは、スーパーで小田原産の食品がずいぶん増えていて、価格も少し安くなっていると感じていました。スーパーの店長さんに聞いてみると、「小田原産の生鮮食料品を選ぶお客さんが増えたので、小田原の野菜などの生産量が増えてきて、価格も少し安くなってきた。それに小田原漁港が整備され大きな生簀ができたので、新鮮な魚が安定供給されるようになった。」と教えてくれました。漁港には海産物などを販売する交流促進施設が新たにオープンしたとも聞きました。Aさんは、「これからもできるだけ小田原産のものを買おう」と思いました。

・Aさんは、最近、よく娘さん（小学校4年生）から小田原でもいろいろな野菜が作られていることを聞いていました。授業で習ったのかと思っていましたが、ある日小学校に行ったときに、小田原市では食育に力を入れていて、市内でとれた野菜や魚などが給食でたくさん使われ、給食の時間に紹介されていることや農家に行って農業体験の授業があると聞き、「子供のころからどのように農産物が作られるのかを教えることは大切なことだ」と思いました。

・Cさんは、数年前に、小田原市が営農意欲の高い地区を優先的に農道や用水路の整備を進めると、市の説明会で聞いたので、近隣の農家と相談をして、自分たちの農地へ行く農道の整備を申請しました。それまで耕作を諦めていた果樹園まで軽トラックが入れるようになったので、改植の支援を受けて、今は湘南ゴールドを栽培しています。

・耕作放棄地は、担い手のいなくなった農地を、地域の農家による共同耕作や、法人の農業参入などにより、再生される農地も増えてきました。また、農家以外の人達の中にも農作物の栽培への関心が高まってきて、下中たまねぎなど小田原ブランドの農作物のオーナー園や市民農園なども拡大されています。

・十郎梅は生産者と市がブランド化に積極的に取り組んだこともあり、小田原梅干や梅を使った新たな加工品の人気が高まり、生産農家の収入も少しずつ増えてきていると聞いています。また、湘南ゴールドはジェラートなどの加工品も好評で、旅行会社が収穫と加工品の試食を組み合わせたツアーを実施するようになり、収穫の時期には県内外からの多くの人が来ています。

・Cさんが出荷している直売所は、小田原ブランドのレモン、玉葱などの農産物や十郎梅の加工品が人気を呼んで、市内だけでなく市外や県外からもお客さんが来るようになり、出荷する農家も増えてきました。最近では、小田原漁港で水揚げされた魚や小田原の乳製品もたくさん売れているということです。今の直売所では売り場面積が足りなくなってきているので、新しい直売所の建設も検討されていると聞いています。

・スーパーなどでも小田原産の農産物の売れ行きが好調で、価格も安定しているので、Cさんは蜜柑園の一部を野菜畑に変えて、野菜の出荷を増やすことにしました。

・Cさんは、先日、農協の集まりで、クラインガルテンという都市交流型の農業がモデル的に実施されることや、グリーンツーリズムといった観光農業など新しい試みが行われていることを聞きました。玉葱や蜜柑のオーナー制などの取り組みが広がっている地域も含め、昔ながらの農業だけでなく新しい農業へも意欲的に取り組んでいる農家がたくさんあることを知り、Cさんはまだまだ農業でがんばろうと思いました。

・Dさんは、漁港整備とともに設置された海産物などを扱う交流促進施設に魚を出荷していますが、市や県がPRに力を入れ、観光会社のルートにも入るよう、働きかけているので、新鮮な魚が買える施設として人気が出はじめ、観光客も多く来るようになり、売り上げが増えてきました。

・定置網漁業も蓄養水面の整備ができ、安定的な出荷により、売り上げが伸びて漁業者の収入も上がりました。その結果、新たに定置網漁場を再開させる検討も始まりました。

- Aさんは今日もスーパーに買い物に行きます。近所の奥さんたちとの最近の話題は、「〇〇さんのほうれん草がおいしい」、「△△さんのキャベツが一番」などで、Aさんは、「やっぱり新鮮でおいしいし、食の安全や環境などを考えて、みんなが小田原産の農産物を買っているんだな」と感じています。
- Aさんは、新鮮な魚を手に入れるため、地元の鮮魚店や小田原の交流促進施設に行きます。最近は、遠くへ行かなくても地の魚が入手でき、小田原ブランドであることを表示した鮮魚を扱う店が増え、便利になったと感じます。店によってはおいしい食べ方のレシピ紹介や魚のさばき方を教えてくれる所も増えてきました。
- Aさんは、最近よく思います、「私たち消費者が、小田原の野菜や魚のことをよく知って、小田原産の食品を積極的に消費することが、小田原の農業や漁業を元気にするし、自分たちも新鮮で安全な食品を食べることができ、さらに、環境にもいい」・・・と。
- Cさんは、湘南ゴールドが全国的なブランドになり需要が高まってきたので、2年前にさらに改植し、湘南ゴールドの作付けを増やしました。
- 農協と地域の農家が協力し、近くに新しい直売所ができたので、Cさんは、野菜の栽培にも力を入れ、出荷量も増やしてきました。お客さんの中には、Cさんの作った野菜がいいと言ってくれる人も増え、ますます張り合いが持てるようになりました。
- 小田原産野菜の地元での消費が高まったことや、湘南ゴールドの全国的人気により、Cさんの農業収入もだいぶ増え、安定してきました。最近では、息子さんも「あとを継いで農業をやってもいいかな」と言ってくれるようになりました。
- 耕作できなくなった農地を地域の農家が共同して耕作をする地域やNPOなどの法人が耕作するところも増えてきました。このため、耕作放棄地も少しずつ再生され、新たに耕作放棄地となるところも減っています。しかし、丘陵部の急傾斜地の農地はなかなか再生が進んでいません。
- 十郎梅ブランドの梅干や加工品も人気が高まり、県外からの注文が増えています。
- Cさんは、小田原市のクライガルテン事業が都会の住民に大変好評となっていて、ほかの地域でも取り組みを始めるという記事を新聞で読みました。グリーンツーリズムに取り組んでいる地域にも多くの観光客が訪れてにぎわっているということも聞きました。Cさんは、小田原の農業が元気になってきたと感じています。
- Cさんは、最近よく思います。「地域の農家仲間の人たちや、農協の会合で会うほかの地域の農家の人もみんな笑顔になってきたし、若い人たちが増えてきた」・・・と。
- Dさんはよく交流促進施設に顔を出しますが、小田原の魅力がうまく発信されていてとても賑わっています。早川海岸には新たに駐車場や多目的広場、水遊びのできる砂浜、親水護岸などが整備され、石垣山へ来る人も含めて、観光ルートとして定着したため、大型バスが多く立ち寄り、県外からの客も増えています。
- 定置網の漁場が増えたことで水揚量や出荷量がだいぶ増えました。また、新しい定置網漁場に従事する若い漁業者も増えてきて、漁港は活気に溢れています。
- Dさんは、最近よく思います。「漁港が整備され、交流促進施設ができて、新しい雇用の場も生まれた。漁業だけでなく、まちが元気になってきた」・・・と。

17　文化遺産の保存と活用

概要

作成者：文化財課、生涯学習政策課

シナリオのタイトル：「文化遺産を堪能する」

サマリー（概要）

・豊かな自然と特色あふれる歴史を持つ小田原には、有形・無形の文化が今もまちじゅうに息づいています。まちのシンボルともいえる史跡小田原城跡の本丸・二の丸では馬出門や馬屋曲輪の復元整備が進む一方、八幡山古郭・総構ではガイダンス施設を中心に回遊ルートが整備され、散策を楽しむ人々や、郷土学習にいそしむ小中学生の姿が数多く見られるようになりました。また、ガイダンス施設は埋蔵文化財センターの機能も持ち、発掘調査の成果が公開されるようになりました。

・市立博物館では、小田原の文化遺産が収集・保存・研究され、展覧会や体験学習会等の活動を通じて広く公開される一方、市民や学校との連携により、地域教育力の向上を支えています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「復元整備事業」「史跡小田原城跡本丸・二の丸整備基本構想」「八幡山古郭・総構」「三の丸地区」

「歴史資料」「博物館」「回遊性」「景観」「文化財保護法」「歴史まちづくり法」「知識社会」「市民参加」

「生涯学習」「既存施設の老朽化」

平成23年ごろ

・市内の小学校に通うAさんは、夏休みの自由研究で「小田原の文化遺産」について調べることになりました。

・Aさんは、図書館や郷土文化館に通ったりインターネットなどで下調べをする一方、歴史好きの祖父の案内により小田原市のシンボルともいえる小田原城跡めぐりをすることにしました。

・最初に訪れた小田原城では、「史跡小田原城跡本丸・二の丸整備基本構想」に基づき復元整備された馬出門から馬屋曲輪を通り、同じく復元整備された住吉橋や銅門、常盤木門を経て本丸広場に向かう江戸時代の小田原城の正規登城ルートを歩きました。

・天守閣に登ったAさんは、展望台から見る八幡山古郭東曲輪の歴史公園や石垣山一夜城の姿に、祖父から聞く戦国時代の八幡山古郭と江戸時代の小田原城との関係や、天正18年の豊臣秀吉による小田原攻めの話しを重ね合わせ、往時に想いを馳せました。

・ただ、公園内にある緑地があまり心地よく感じられなかったことだけが何となく気にかかりました。

・続いてAさんは、史跡公園となった八幡山古郭東曲輪へ向かいました。ここは戦国時代の小田原城の中心部で、小田原城からは目と鼻の先にある場所です。Aさんは、この場所が、マンション建設計画が中止され国の史跡として保存整備された場所であること、また、市が史跡の保存や整備・活用を図るため、この場所も含め国指定史跡内にある民有地の買取りを進めていることを知りました。

・その後Aさんは、小峯御鐘ノ台大堀切へ向かいました。総構の中でも最西端に位置し、東日本最大級の大きさを誇る堀が存在するこの場所は、散策路として開放されている場所です。そびえ立つ土塁を見上げたAさんは、総構の壮大さに感銘を受けたのでした。

・「今日は、小田原の代表的な文化遺産である史跡を見て回ったけど、このほかにも市内の様々な場所に昔の人たちの英知と努力によって守り伝えられた史跡や有形・無形の文化財がたくさんあるんだ。指定されたものやそうでないものも含め、これら全てが文化遺産なんだね。地域のお祭りで目にするお囃子も立派な文化遺産なんだよ。私たちは、こうしたかけがえのない歴史的・文化的遺産を守り、活用し、よりよい状態で後世に引き継いでいく責任があるんだ」案内を終えた祖父は、Aさんにこう教え諭しました。

・後日、Aさんは自由研究のため、小田原城の発掘調査で出土した資料を展示しているという郷土文化館を訪れました。以前祖父と行った他の博物館と比べるとずいぶん古くて小さな建物ですが、中には思ったよりいろいろなものが展示されています。しかしAさんが楽しみにしていた資料が見当たりません。職員に聞いてみると、本当はここに展示してある何十倍も資料があるのに施設のスペースや設備の関係で、一部しか活用できていないことを知りました。この建物は昭和 20 年の建築で、Aさんの祖父よりも年上ですが、国指定史跡内なので新しくできないそうです。熱心に話を聞くAさんに、「貴重な文化財を保存していくためにも、もっと設備をよくしてあげなければいけないんだ。」と職員が説明してくれました。

・Aさんは、「貴重な資料がたくさんしまったままなのはもったいないな、良い設備でいつでも見られれば、小田原の素晴らしさがもっと伝わるのに」と思いました。

・その後、Aさんは、機会あって北條五代まつりのパレードに参加しました。パレードの最中、Aさんは一軒の建物に目がとまりました。昭和初期頃と思われる建物は出桁づくりの見事な和風建築物でした。よく見るとその建物には「街かど博物館」というのぼり旗が立っています。建物は指定文化財や登録有形文化財ではありませんが、小田原が育んだ生業を見せることにより、まちづくりに生かされています。

・小田原城の周辺地域では、歴史まちづくり法の重点地区となったことから、今後は国の支援により様々な事業が展開されるそうです。

平成28年ごろ

・Aさんは高校生になりました。ある日、高校の帰りに青橋を経由して小田原の街なかに向かった時、以前、臨時駐車場となっていた場所が閉鎖されていることに気付きました。説明板を見て、史跡（御用米曲輪）の復元整備事業が行われていることを知りました。

・Aさんは、小田原城跡の史跡指定地内にある市立図書館や郷土文化館などの移転計画が進んでいることも知りました。

・「小田原市立博物館基本構想」が公表され、郷土文化館は小田原駅や小田原城ともさほど離れていない場所に市立博物館として生まれ変わることになりました。Aさんは大切な資料をしっかり保管し、小田原の歴史や文化を大勢の人に知ってもらうためにも一日も早く博物館が完成されることを願っています。

・歴史まちづくり法の重点地区となった三の丸地区や南町、板橋地区などでは、史跡はもとより歴史的建造物をはじめ有形・無形の文化財、あるいは地域のお祭り等の伝統行事がまちづくりに生かされ、歴史的・文化的景観の価値が高まってきました。

・Aさんは、機会あって北條五代まつりのパレードに参加しました。パレードを終えたAさんは、ステージで演奏される小田原囃子に聞き入りました。大人に混じり子どもたちが一生懸命に太鼓を叩く姿に昔の自分の姿を重ね合わせ、「それぞれの地域に伝わる民俗芸能が、しっかりと受け継がれていってほしい」と思いました。

・Aさんは、毎年「城下町おだわらツーデーマーチ」に参加しています。お気に入りは「総構コース」ですが、今年はその「総構コース」が新しくなりました。理由は、総構で拠点となる箇所の整備やそれらを回遊する散策路が一部整備されたためです。

・八幡山古郭・総構では、平成21年度に策定された「史跡小田原城跡八幡山古郭・総構保存管理計画」にもとづいた整備が進められており、アジアセンター跡地には、小田原城や総構を紹介する拠点的な場所として小田原城について学べるような解説・展示機能を持ったガイダンス施設も完成しました。

・ガイダンス施設の一部は埋蔵文化財センターとして利用され、発掘調査の成果が多く人々に公開されることとなりました。

・石垣山一夜城歴史公園にほど近く、農道整備に伴う発掘調査によって発見された「早川石丁場群」では、その一部が保存され散策路が設けられるとともに、国指定史跡としての整備が進み、歴史的・文化的景観として活用が図られることとなりました。

平成34年ごろ

・大学生になったAさんは、歴史学科で考古学を専攻しました。実習では、縁あって市内の発掘調査現場で発掘調査も経験しました。

・小田原城では、馬屋曲輪の修景整備が行われ、小田原城の正規登城ルートにあたる二の丸から本丸へと至る大手筋の歴史的景観がはっきりと見えてきたほか、御用米曲輪の復元整備も完了し、現在は、移転した図書館

や郷土文化館の跡地にあたる南曲輪の復元整備事業に着手しています。

- 八幡山古郭・総構では、アジアセンター跡地に建設された総構ガイダンス施設により、戦国時代の小田原城八幡山古郭と江戸時代の小田原城との関係が多くの人々に理解されるようになり、総構を回遊する散策コースには、散策マップを片手に総構の散策を楽しむ人々や、郷土学習の場として先生に引率された小中学生たちの姿を数多く目にするようになりました。
- ある日、Aさんは、小田原民俗芸能保存協会主催の「後継者育成発表会」を観覧するため、市民ホールを訪れました。Aさんは、指導者の熱意と努力によって後継者育成がしっかりと行われていることをうれしく思いました。
- 大学4年生となったAさんは、卒業論文に取り組むことになり、考古学関係の文献や資料を求め完成したばかりの「小田原市立博物館」に足を運びました。
- 完成間もない市立博物館は、以前、城址公園の中にあった郷土文化館等の資料も引継ぎ、機能も充実しています。市民や観光客なども数多く見られ、小学校からは子供たちが大勢見に来ています。まちかど博物館と連携した展示コーナーがあったり、小田原の民俗芸能を紹介していたりと、とても楽しそうです。
- Aさんが必要とする資料は、この博物館にすべて揃っていました。収蔵されている資料についても自分で検索して調べることができるのです。こうした機能を活用して自分で学習したり、博物館で行われる講座などで学んだ人たちが、博物館の資料整理や展示解説など、思い思いの場所でボランティアとして活動しており、とても好評です。
- Aさんの目に、小田原の歴史と文化が市民の力の広がりによって守り、伝えられ、そこからまた新しい文化が生み出されていくイメージが浮かび、とても誇らしく感じました。

18　芸術・文化の振興

概要

作成者：文化交流課

シナリオのタイトル：小田原の文化芸術を生かしたまちづくりの推進

サマリー（概要）

・今まであまり興味のなかった市民も文化・芸術に触れる機会が増えています。小田原の文化・芸術活動の裾野が拡大しています。新しい市民ホールが建設され、このホールを拠点として、小田原の情報を全国に発信し、国内外から著名な芸術家や観光客等が来訪しています。市民は、質の高い芸術を鑑賞でき、また生活に密着した身近な文化にも触れることが多くなりました。市民の文化・芸術に対する意識が向上し、市民主体の文化・芸術活動が盛んになりました。「響きあうまち　小田原」の実現です。

・また、文化・芸術活動のみならず、文化・芸術を通して、さまざまな分野にも影響を与え、「文化・芸術」をキーワードとしたまちづくりが進められています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

平成23年ごろ

・ある日の休日、「小田原の文化って何？」小学校4年生になる娘が唐突に聞いてきました。

・来週の学校の調べ学習のテーマです。市内の学校では、自分たちが暮らしている小田原のことをもっとよく知り、郷土愛を育むため、「小田原の文化」などをテーマに、各学校や地域の特色を生かしながらの授業を取り入れ始めています。

・Aさん（会社員・40代・男性・4人家族）は、しばらく考えてから「何だろう。小田原城とかの歴史的なものとか、小田原ちょうちんとかかな・・・」

・Aさんは、小田原生まれの小田原育ちです。小田原のことはよく知っているつもりでしたが、なかなかうまく答えられませんでした。Aさんは、その前に、「そもそも文化って何だろう」と思いました。よく使ったり、聞いたりする言葉です。たとえば、「文化祭とか文化遺産とか、そういえば文化庁なんてのもあったよな。」漠然とは分かっているつもりでも、具体的に考えると、思い浮かんできません。

・「文化」という言葉を改めて聞くと、何か難しいものというイメージがあり、今までの生活の中では必要がないものと勝手に判断していたようです。

・そこで、娘と二人でパソコンに向かい「文化」とキーを打ち込み、調べてみました。

・調べていくうちに、まず、一般的に文化というものが、かなり幅が広いことが分かってきました。一言に文化と言っても、音楽、演劇、美術、伝統芸能や文化財などの人々の活動やその成果物のことのほか、人と自然との関わりや風土の中で生まれ育った生活様式や町並みなど人々の生活（営み）全般に亘る事柄まで含まれています。いままでの何気ない生活の中でも、いろいろなところに文化があったんだと、気づきました。

・「文化っていっぱいあるんだね。そうすると、小田原の文化っていっても、いっぱいありそう。」娘は、パソコンに浮かんだ文字を真剣にノートに書き写しています。

・次に、小田原の文化の情報を集めはじめました。

・市のホームページで「小田原の文化」というサイトがありました。そこには、市内の重要文化財や文化行事の情報、北原白秋や二宮金次郎などの著名人などが紹介されていました。その他にも、たくさんの情報が溢れています。

・娘も「二宮金次郎は学校で習ったことがある。北原白秋も音楽の時間で歌ったよ。この人たちも小田原の文化なの？」と驚いています。

・確かに、昔から「文化人」といわれる人たちが、小田原に居を構えたりしたこともあります。

・特に、小田原は、歴史的資産や文化的資源が豊富なことはもちろんのこと、音楽や伝統芸能などが大変盛んなことも発見しました。

・Aさんは、自分が育ったこの小田原が大好きです。気候も温暖で、海・山・川といった自然にも恵まれ、また一方では、首都圏にも近く、交通の利便性も非常に高いからです。そんな大好きな小田原に、もう一つの魅力を発見できたことに、ちょっとした満足感を味わうことができました。

・市では、「文化・芸術」を重要施策の一つの柱として、まちづくりを進めていることも知りました。

・その中心として位置付けているのが、「新しい市民ホールの建設」です。

・市では、新市民ホールの建設を契機として、今まで以上に小田原の文化芸術活動の裾野を広げるとともに、次代を担う人材の育成を図るため、市民参加型イベントの開催など、さまざまな事業を実施しています。また、こういった活動の中から、この新市民ホールの企画運営をサポートできる人材の育成も図ろうとしています。

・「子供たちはもちろんのこと、さまざまな文化や芸術に触れる機会が多くなれば、文化に対する認識も高められ、将来には、何らかの形で、小田原文化の担い手も育つのではないか。」とAさんは思いました。

平成28年ごろ

・平成23年度からはじまった「新総合計画」では、大きな柱の一つとして「文化・芸術」を掲げています。「響きあうまち　小田原」をキーワードにしたまちづくりを進めており、市民の間にも徐々に「文化・芸術」に関心を寄せる人が着実に増えてきています。

・市では、平成 11 年度に策定した「文化振興ビジョン」の見直しを進め、小田原市の文化振興の総合的な計画を策定しています。

・特に、市民ホールはその重要な拠点施設として位置付けられ、建設に向けて、さまざまな機会を捉えて、市民参加や専門家等の検討委員会などを開催し、そこでの内容などを分かりやすく、市民に情報提供した結果、行政や各種市民団体、市民の間に、市民ホールについての関心を高めることができ、市民から愛される新しい市民ホールが建設されました。

・市民ホールの完成を機に、さまざまな文化芸術活動が徐々にではありますが、以前と比べ盛んになっています。市民も気軽にそういった活動に触れる機会が多くなり、新たな市民交流も生まれるようになりました。また、ホールの自主事業などをサポートする市民団体も組織され、ホール運営に市民が積極的に関わっていける体制も整いつつあります。Aさんもこの市民団体に所属しています。

・Aさん家族もこういった影響から、娘がバイオリンを習ったり、妻が絵を描くようになったりと、大きな変化が現れてきました。

・このように、文化・芸術に触れるようになってから、今までとは違った環境が見えてきました。今までは文化・芸術に無関心だった家族にとっても、文化・芸術が生活の中に息づき、潤いや安らぎをもたらすなど、その効果は大変有益なものとAさんは感じるようになりました。

・しかしながら、市民の文化・芸術に対する関心は高まってきたものの、実際に自分で何かをやりたいという人は、まだまだ少ないのが現状です。もっと多くの市民が文化・芸術に触れられるような環境をつくっていく必要があります。

・また、少子高齢化の進展などの社会環境の変化も、文化・芸術を取り巻く環境に大きな影響を与え始めています。次代を担う子供たちが減少していく一方で、市民団体などの高齢化が進み、事業が思うように進まなかったり、迅速に行動ができなかったりする場面も見受けられるようになってきました。

・文化・芸術の面でも、めまぐるしく変化する社会環境の影響は、いろいろなところで支障を来たしています。

・Aさんは、「今後、このような社会環境の中でも、文化・芸術が廃れないようにするにはどうしたらよいのか」、また「これからは、積極的に小田原の文化を担っていけるような市民、小田原の文化に誇りを持ちつつも、さらに新しいものを創り出していく人材の育成が必要だ。」などと考えるようになりました。

平成34年ごろ

・市民ホールが完成してから、すでに数年が経ちました。

・市民ホールの運営主体とそれを支える市民組織は、小田原市の文化・芸術活動の中心としての役割も担うようになり、次世代の文化・芸術の担い手や小田原の未来を担う子供たちの育成のため、学校や地域などに積極的に出向き、文化・芸術の素晴らしさを伝えています。

・また、多数ある市民活動団体や個人に対する総合相談窓口を開設し、専門家によるアドバイスや助言を行うなど、今では小田原の文化・芸術に欠かすことの出来ない存在になりました。

・こういった取り組みを着実に進めた結果、市民レベルでも、文化・芸術を通じた交流が盛んになり、市民生活に文化・芸術が定着しています。また、このような活動を通じて、小田原のまちを愛する心（郷土愛）も育まれるようになりました。

・最初は、小田原の文化・芸術の活性化からスタートした活動も、環境や福祉、教育など、さまざまな分野に広がりを見せ、今では、小田原のまちづくりを支える活動へと、幅が広がってきました。

・このような活動が、新しい文化・芸術活動の活性化のモデルとして、また、まちづくりの新しい手法として内外から注目され、さまざまな自治体や団体からの視察も毎日のように行われています。

・さて、Aさんの家族といえば、娘は小学生のころに課外授業で見学して以来、市民に開かれた大学として好感を持っていた市内の大学に入学しました。また息子は高校生となり友達と出かけることが多く、以前のように家族そろってどこかへでかけることも少なくなりました。

・そんなある日の夕食時、娘が「明日、私の友達が市民ホールでコンサートをやるんだって。見に行こうかな」と話していました。

・妻も「そうね。私も久しぶりにリフレッシュしたいわ。明日の市民ホールでやる合唱団には、私の友達のお子さんも出演するのよ。やっぱり市内の大学に通っているんだけど、大学同士のつながりで合唱団に入ったらしいわよ。私も見に行たいわ。」

・明日は、市民ホールの自主事業の公演があります。このホールで毎日練習し、市民が自ら育て上げた合唱団のコンサートです。この合唱団は、小田原を出発点として、今や全国レベルの合唱団へと成長し、小田原市民の誇りとなっています。

・娘や妻の話では、市内の大学生や外国籍住民の方々も多く在籍しており、姉妹都市との定期的な交流ににも参加することになったようです。

・当日は学校帰りの娘と小田原駅に集合します。

・小田原駅周辺は、町並みが整備され、小田原城の再整備も進められています。市民による主体的な文化・芸術活動も盛んになり、休日、平日を問わず、街のいたるところで、さまざまなイベントやコンサートなどが開かれています。「響きあうまち　小田原」の実現です。

・小田原駅周辺は、かつての賑わいを取り戻し、たくさんの観光客が訪れるようになりました。外国人の姿も以前より多くなりました。多言語の案内板などが整備されています。

・また、このような小田原に住みたいと、人口も増加し始めました。

・Aさんは思います。「文化・芸術をきっかけとして、今では、さまざまな活動が広がっている。まさか、こんなにも市民生活に影響を与えるものとは思わなかった。」

・Aさんの娘も「最初は文化なんて何にも興味なかったのに。気が付けば、今では自分や周りの人たちにとっても、なくてはならないものとなっている。不思議だな。」

・二人とも、文化が持っている力を改めて感じるとともに、「こんな小田原が大好き。」と思っています。

19　生涯学習の振興

概要

作成：生涯学習政策課、図書館

シナリオのタイトル：心田開発～学びの果実が潤す心とまち

サマリー（概要）

・ボランティア等で活躍する人、歴史や文学に興味を持つ人、よりよい生き方を模索する人たちが、それぞれのアプローチで生涯学習を行っています。生涯学習は、仲間づくりや生きがいづくりばかりではなく、地域を支え、活力あるまちを作り出すための人材を育てるという側面を持っています。本市では、学んだ成果が生かされる社会を目指し、学習機会の提供や相談機能の充実に、市民と協働で取り組んでいきました。また、生涯学習施設の整備が進み、市民の主体的な学習活動が活発に行われています。さらに、郷土学習を進めた結果、地域の資産をまちづくりに生かしていこうという機運が市民の間で高まり、まちを大切に思う気持ちが育まれています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「知の循環型社会」「市民活動」「市民主体」「学び直し」「地域資産」「心の豊かさ」「公共施設」

平成23年ごろ

・Aさん（58歳）のカレンダーには、さまざまな印がついています。今日は、趣味のサークル活動のため施設を予約する日。インターネット予約ですが、希望する部屋は競争率が高く、抽選で外れることもあります。Aさんは、幾つかの活動をしており、公共施設を使うことも多いのですが、先日利用した施設では空調機器の調子が悪く、活動に差し支えがありました。「使いやすい施設が欲しいね。」仲間とは、よくそんな話をしています。

・Aさんの兄、Bさん（59歳）は、本好きです。中心市街地から離れたところに住んでいるので、「近くの図書館分館で、リクエストした本が受け取れて、どこで借りた本でも返せるようになれば便利だな」と思っています。

・先日は、「図書館総合歴史講座」に参加しました。星﨑記念館50周年を記念し、星﨑定五郎氏と当時の移民の足跡や、記念館の半世紀を振り返る内容です。Bさんは講座への参加をきっかけに久しぶりに星﨑記念館を訪れました。市立図書館として利用されてきたこの施設は、老朽化や国指定史跡の中にあることから、最近になって駅前再開発ビルへの移転が発表されたのです。Bさんは、「故郷の子どもたちのために」と篤志を寄せた先人のことを改めて思いました。

・Aさんは、週に2回、地区のボランティア活動で一人暮らしの高齢者を訪問しています。この活動をきっかけに福祉について学びたいと考えるようになり、大学・高校の公開講座も含め、福祉関係の講座があると、積極的に受講するようになりました。

・Aさんの夫Cさん（57歳）は、趣味やボランティアの活動でも知り合いが多い妻に比べると、地域に馴染んでいないように感じています。今の会社を退職しても、年金がもらえるようになるまで、どこかで働きたいと思っていますが、自分に何ができるのか、不安を感じています。

・ある日、Cさんは「報徳塾」の生徒募集のポスターを見かけました。これは日曜日を中心に開講しているので、勤めがあるCさんでも参加できそうです。これまで、生涯学習は時間の余裕のある人だけのものと思っていましたが、そうとも限らないようです。自宅にもAさんがもらってきた「自分時間手帖」があります。「今は、eラーニングという手段もあるよ。生涯学習センターでも相談に乗ってくれるから」と、Aさんにも背中を押されました。

・Dさん（38歳）は、小学生の息子と二人暮らし。なかなか希望する仕事に就けず、アルバイトをかけ持ちしています。Dさんの息子は、3年生まで放課後児童クラブに通っていましたが、今は、学校から帰ると家でゲームばかりしています。同級生は塾やスポーツクラブに通っている子が多いようですが、Dさんの家庭には経済的なゆとりがありません。

・Eさん（44歳）が経営しているコンビニエンス・ストアには、Dさんの息子が、よく菓子パンやスナック菓子を買い

に来ます。Dさんがお弁当を買っていくこともあります。Eさんが、いつも愛想よく応対していたら、親しく話すようになりました。「Dさん親子が、もっとはつらつと元気よくなるにはどうしたらいいだろう？」 自治会役員もやっているEさんは、もっと地域が子どもに関心をもって、見守っていかなければいけないと感じています。

平成28年ごろ

- Cさんは、「報徳塾」を受講した後、一緒に学んだ仲間たちと研究と実践の活動を広げていくことになりました。尊徳記念館では、報徳塾の卒業生が増えたことから、ボランティア組織を拡充して、今では期を越えた交流が進んでいます。
- Aさんは、ボランティア活動を通じ、地域福祉のリーダー的存在になっていました。今は、民生委員を委嘱されていますが、これまで学んできた知識が役に立っています。ずっと続けてきた趣味の分野でも、師範の資格を取りました。近くの公民館で教室を開いたら、子どもやお年寄りが集まるきっかけになるかもしれない、と考えていますが、こうした相談も生涯学習センターで乗ってくれるので心強く思っています。
- 生涯学習センターでは、市民との協働により、さまざまな学習情報と学習の機会を提供しています。行政との役割分担が進み、市民主体で企画運営し、また講師になって実施する講座も、盛んに開催されています。市民講師による講座は一部が有料化され、自主運営のための財源になっています。受講料に見合う知識と技術ばかりではなく、教え方やコミュニケーションを積極的に学ぼうという機運が、講師の間に高まりました。また、活動の実践者の養成や活動の内容をステップアップするための講座にも力を入れています。
- Dさんは、アルバイトの時間をやりくりし「NPO講座」を受講しています。市民活動が盛んになり、NPO法人の設立も増えていますが、運営の担い手はまだ足りない状況です。Dさんは一つの就労の機会としてNPOを考え、チャレンジすることにしました。息子も高校生になり、Eさんのコンビニエンス・ストアでアルバイトをしています。Eさんが地区の行事に誘ってくれたり、レジの体験をさせてくれたりしてくれたので、今では親戚のように感じています。
- 小田原市の生涯学習のもう一つの柱は、郷土にかかる学習です。特に歴史・文学では、北条氏や小田原城、二宮尊徳など中世、近世ばかりではなく、北原白秋、松永耳庵を始めとする近・現代の学習が盛んになりました。オーラルヒストリーのためのインタビュー講座等も開講され、所縁の方からの情報収集や、昭和の暮らしの記録が市民研究家の手で進んでいます。郷土文化館や図書館、文学館も、小田原の地域資産を学ぶ場として活用されています。
- 駅前ビル内にできた図書館に出かけたBさんは、エレベータを降りると、フロアマネージャーの笑顔に出迎えられました。本の持ち去りを防止するための装置や、市立図書館にあった星崎定五郎氏の胸像も設置されています。
- 勤め人や学生・旅行者など利用者も様々です。揃いのエプロン姿できびきびと動く職員、書棚の本を整理しているのはボランティアスタッフです。読み聞かせやレファレンス専用のコーナーも一段と充実していました。生涯学習施設も同じフロアにあり、学習スペースも活用されています。
- 各支所に併設されていた図書館分館は数年前に廃止されましたが、新たに設置された地域コミュニティ施設ではリクエストした本を受け取れます。Bさんは、職場に近いけやきの図書室と駅ビル図書館とコミュニティ施設を生活パターンに応じて利用するようになり、読書量も随分増えました。リタイアしたら、駅ビル図書館のボランティアスタッフに登録してみようかと考え始めています。

平成34年ごろ

- Aさんは民生委員を辞し、創作活動に打ち込む日々です。数年前に整備された市民ギャラリーは、立地も施設も満足のいくもので、グループ展でもたびたび活用していますが、今は初の個展を目指して大作に挑んでいます。
- 退職後、駅ビル図書館のボランティアスタッフとしての活動を始めたBさん。市内の図書施設は、かもめ図書館と駅前図書館を中心に、地域センターや生涯学習施設の図書施設、サービスカウンター、自動車文庫の配本所などが市域にバランスよく配置され、Bさんのような図書ボランティアが多く活動しています。
- ボランティア講座終了後、学校図書室でボランティア活動を始めた近所の人の話では、ボランティアが図書室で本の整理や調べものの相談にのったりするようにしてから、随分利用が増えたそうです。一方で必要な本がないときに他の小学校や図書館の蔵書を借りられる仕組みづくりを学校にお願いしているとも聞きました。Bさんは、学校図書室と図書館とがもっと連携できるように、学校図書支援ボランティアの方々との交流の機会を持つこと

を図書館に提案しようと思いました。「図書館が市民にとってもっと身近で役立つ存在になるために、職員と市民とが力を合わせて行動していく。そうした雰囲気が今の図書館にはある。」Bさんは元気な職員の笑顔を思い浮かべながらそのことを確信していました。

- 生涯学習事業も、市で行うばかりでなく、大学や高校、企業、民間団体等さまざまな主体との連携が進んでいます。どこが実施する事業でも、情報が生涯学習センターに集積されるようになり、相談業務にも役立っています。今年は中央公民館が生涯学習センターに生まれ変わって15周年ということで、生涯学習ボランティアの手で記念事業も企画されています。
- Cさんのグループは、尊徳の教えの実践として「推譲」の実践に取り組んでいます。自分のゆとりの時間やお金を、環境や福祉、青少年育成の活動等に活用し、大きな実りを得ようという活動で、少しずつ広がりを見せています。
- DさんはNPOの理事になり、運営業務にあたっています。収入が格段に増えたわけではありませんが、自分で企画したことを実現できる仕事なので、やりがいと喜びが大きいと感じています。息子は、通信制の大学に進学し、働きながら学んでいます。駅前にある大学のサテライト・キャンパスでは、市外の人や、年代、職業の違う人とも机を並べるので、さまざまな見方を学ぶ機会にもなると言います。
- Eさんは、最近はウォーキングに凝っています。手にしているのは、携帯端末ですが、インターネット上の地図には、さまざまなまちの歴史や逸話の情報が蓄積されていて、まち歩きのガイドになります。これは、市民の研究家たちの手によって構築されました。学生時代は歴史の授業が好きではなかったEさんですが、こうした「まちの記憶」に触れ、しみじみと思うようになりました。歴史は、人々がそれぞれの時代を必死に生きてきた積み重ねであり、今、生きている人生を心豊かに過ごすことが大切なのだと。

20　生涯スポーツの推進

概要

作成：スポーツ課

シナリオのタイトル：生涯スポーツの推進　～Ａさん家族の場合～

サマリー（概要）

・社会環境の変化に伴い、健康や生きがいづくりなどの面からスポーツに対する志向は高まっています。また、ウォーキングを始め、ニュースポーツに取り組む人々も増え、スポーツがこれまで以上に身近なものになってきています。

・一方、子どもたちのスポーツ活動の機会が減少し、子どもの体力向上が全国的にも大きな課題となっています。

・スポーツ活動へのニーズが多様化し、また、スポーツに対して新たな価値観が生まれるなど、これまでのスポーツ環境に変化が現れている中で、子どもから高齢者まで、だれもが、 どこでも、いつまでもスポーツ活動を行えるようスポーツ環境をより充実させていくことが、今後のスポーツ振興を支え・発展させる鍵となっています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「健康志向」「運動不足」「スポーツ情報」「地域活性化」「湘南ベルマーレ」「スポーツ実施率」

「するスポーツ」「みるスポーツ」「支えるスポーツ」

平成23年ごろ

・「痛い！」。地区の体育祭に久しぶりに参加したAさん（40歳）は、年代別徒競走に出場しましたが、日頃の運動不足がたたり、最終コーナーで派手に転倒、足に軽い怪我をしてしまいました。

・地区の体育祭（健民祭）は、最近なかなか参加者が集まらず、組の仲間から「どうしても参加してほしい」と言われ、やむなく参加したのですが、内心1位になる自信もあっただけに、Aさんは相当なショックを受けました。実はAさんは小中学校時代にリレーの選手、中学からは野球を始め、高校や大学ではエースとして活躍していたこともあり、健民祭の徒競走ぐらい軽くいけると思っていたようです。

・「どうしたの？」。帰宅後、妻B子（35歳）は、最初はやさしい言葉を掛けてくれましたが、「あなたは学生時代はよく体を動かしていたようだけど、会社に勤めてからは、私と同じで、ほとんど運動をしなくなっちゃったよね。通勤も車だし、この前の人間ドックでもメタボ予備軍だったわよね。」と、最後は逆にたしなめられてしまいました。

・スポーツが大好きな小学4年生の息子C男にも「かっこ悪い！」と一蹴され、Aさんもいよいよ体を動かす必要性を感じ始めました。

・「そう言えば、近くに小田原アリーナがあるな」。最近フットサルに興味を持ち始めた息子から小田原アリーナに誘われたことも思い出しました。

・「小田原アリーナならトレーニングルームはあるだろう」。民間のスポーツクラブもいいけど、続けられる自信もないので、Aさんはまずは気軽に参加できそうな公共施設に行くことにしました。

・早速、インターネットで小田原アリーナを調べ、トレーニングルームがあることも確認し、事前に講習会の受付も済ませました。

・講習会当日、Aさんは周りの人が気になりつつも、隣にいた60代と思しき男性に声を掛けられ、みんな自分と同じ「不安とやる気」が入り混じった中で参加していることが分かり、少しリラックスできました。

・その後も、週1回程度ですが、会えばあいさつをする程度の仲間も増え、何とか続けていく自信もつきました。また、最初は、アリーナ内のトレーニングルームに行くだけでしたが、館内にはいろいろなスポーツ情報が掲示されていたり、メインアリーナでも様々な競技が行われていることにも目が行くようになってきました。

・その中に湘南ベルマーレの試合告知もありましたが、湘南ベルマーレフットサルクラブが小田原アリーナを本拠

地として戦っていることも、Aさんはそのとき初めて知りました。

- 気付くと窓口で2枚のチケットを購入していました。もちろん息子のためですが、Aさん自身にもアリーナをホームとしているベルマーレを応援したいという気持ちも少なからずあったようです。
- 「何かいい手はないかな？」。Aさんは久しぶりに出場した健民祭がきっかけで、地域のスポーツ行事に顔を出す機会が多くなりましたが、地域で様々な問題を抱えていることも知りました。
- また、4年生のC男や3歳になる娘D子にも、自分のように、学校を卒業するとスポーツに関わる機会が急に減ってしまう今の仕組みを何とか改善できないかと思い始めていました。
- Aさんは、アリーナに市の窓口があったことを思い出し、スポーツ課に行きましたが、市にはスポーツ振興に対する方針があることを知りました。「するスポーツ」「みるスポーツ」「支えるスポーツ」それぞれを振興し、「動かそう、あなたの体、スポーツで」をキャッチフレーズに、28 年度までにスポーツ実施率を 60%まで高めていきたいとのことでした。
- Aさんは、スポーツ実施率が 30 分以上の運動を週1回以上する人の割合と聞き、自分がそれに該当していないことにも気付きました。また、スポーツを全く実施していない人も 4 割近くいるとも聞き、少し驚きましたが、妻B子がまさにそうなので、運動嫌いな妻にも「城下町おだわらツーデーマーチ」など、まず体を動かすことから勧めてみようと思いました。

平成28年ごろ

- 「明日の試合に勝てば優勝だ！」
- 息子と5年前から湘南ベルマーレフットサルクラブを応援して以来、月に数回、Aさんは親子で小田原アリーナに応援に行っていましたが、いよいよ明日はベルマーレのリーグ優勝がかかる試合ということもあり、妻と8歳になる娘も連れ、初めて家族4人で応援することになりました。
- 試合当日の午前中には、同じくアリーナの会議室でAさんもメンバーになっている「健民祭活性化委員会」があります。
- 「健民祭活性化委員会」は、Aさんが5年前にスポーツ課を訪れたのをきっかけに、地域のスポーツ振興のため、また地域の活力を促すため、地域、学校、行政が連携し立ち上がった組織です。明日の会議では今年の総括が行われる予定ですが、内容を見直し始めてから年々参加者が増え、今年はかなりの賑わいをみせていました。学校と連携し、多くの子供たちが参加できるようにしたり、ニュースポーツを始め、参加することに意義がある種目を増やしたりしたことが見直しの成果としてあげられるはずです。
- 湘南ベルマーレの試合を見てから、すっかりベルマーレのファンになった妻のB子は、これまでスポーツとは無縁でしたが、自らも体を動かそうと思い始めたようです。Aさんは「みるスポーツ」から「するスポーツ」につながりそうだなと、以前勉強した市のスポーツ指針を思い出しました。
- B子は中学3年になった息子に、初心者でも参加できそうなスポーツ教室をインターネットで探してもらいました。参加対象や目的に応じたスポーツ教室が検索できるシステムのため、いくつか候補がありましたが、B子はヨガ教室を選択したようです。
- 家事の合間を縫って月に2～3回程度しかできないようですが、B子は体の調子がよくなったことが実感できたようで、これからも続けていくようです。
- このように、スポーツをしたい人が気軽に、簡単に参加できる環境となってきたことや、全国規模となった「城下町おだわらツーデーマーチ」、市内25地区での健民祭の盛り上がりも手伝って、市全体でスポーツを実施する人がこれまで以上に増えてきました。スポーツ課の方針にあったスポーツ実施率も目標が達成できているのではないかとAさんは感じています。
-

平成34年ごろ

- Aさんは、地域のスポーツリーダーとして活躍するようになりました。また、県が実施している指導者講習を受けたり、市内で行われているスポーツ行事にもボランティアとして積極的に参加するようにもなりました。今ではイベント運営のサポートをしていること自体が「スポーツに参加している」という感覚になってきたようです。
- 湘南ベルマーレの試合を家族で応援したことが、妻B子にとっては体を動かすきっかけになったようですが、健民祭に取り入れられたニュースポーツ競技に参加したことで、勝敗にこだわらずスポーツを楽しめるものを発見でき、その後も、近所の仲間と月2～3回程度その競技を実施しています。6年前から続けているヨガ教室は、今

では中級者クラスに移行しましたが、これとあわせると、今では週1回はスポーツをするようになりました。

- 「健民祭活性化委員会」を契機として地域・学校・行政の連携が進み、今では地域で行うスポーツの仕組みが確立し、小中学生のほか、主婦や会社員、高齢者もクラブに入っています。中学2年生になった娘のD子もクラブに属していますが、Aさんは娘が学校を卒業してからもこのクラブに在籍し、生涯を通じてスポーツができる仕組みを構築することに関われたことをうれしく思っています。
- また、Aさんは、この10年、自分を始め、家族や地区の人たちがスポーツに親しめる環境づくりに関わったこともあり、スポーツを客観的にみるようにもなってきました。
- これまでスポーツは「教育の手段」や「健康の手段」として捉えられてきましたが、スポーツが本来持っている「遊び」の要素を大切にすることで、これからはもっとスポーツの文化的な特性を広げるような活動をしてみたいと考えています。

21　環境共生型の地域づくり

概要

作成：環境政策課

シナリオのタイトル：持続可能な環境共生型市民自治の地域づくりー地域ぐるみによる全員参加ー

サマリー（概要）

・小田原市では、地域の身近な自然環境を守り育てるため、市民主体の環境再生プロジェクト検討委員会を立ち上げ、フィールド調査を行い、地域の特性と地域資源を再認識し、保全と活用の観点から、自然環境を活かすための掘り起こしを行ってきました。

・私たちの「生存」を支える豊かな自然環境、郷土の風土を先人達から引き継ぎ、子孫に引き渡していく上で、私たちに今何ができるのか。生きていくうえで不可欠な身近な自然環境というより、命や暮らしに近いところでの環境再生の取り組みを通じて、それぞれの個人・団体等の組織が環境改善の成果を実感し、やがては小田原全体での取り組みとして、環境共生型の地域づくりを目指しています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「環境意識の高揚」「企業の社会的責任」「クリーンエネルギー」「地球温暖化」「CO2削減」

「サスティナビリティ（持続可能性）」「環境と経済の好循環」「低炭素社会」「循環型社会」「自然共生型社会」

「フードマイレージ」「グランドワーク」

平成23年ごろ

・平成 21 年度に市が立ち上げた市民主体の環境再生プロジェクト検討委員会は、地域の身近な自然環境を保全、再生する取り組みを市民自らが様々な連携や支援を受けながら行うための仕組みづくり、支援方策を提言しました。

・この提言では、小田原は首都圏のはずれにあって、海、山、川、空気、水、花、緑、田畑、里山などあらゆる自然環境に恵まれた“オールインワン”のまちである一方、この数十年で開発や都市化の波にさらされ、徐々に全体的に優れた環境特性が失われつつあり、さらに数十年後の子孫の代には再生が不可能な危機的な状況に陥ってしまうことを危惧しています。

・Aさんは、気の合う仲間とこれまでも家の近所の河川の清掃活動に毎月取り組んできましたが、仕事の傍らの活動であり、肉体的にも精神的にもこれ以上の活動は難しいと思っていました。ところが、環境再生プロジェクト検討委員会の報告会を兼ねた環境フェアに参加したAさんは、我々以外にも同様な活動をしている人達、団体が多くいることを知り、同時に担い手不足など様々な悩みを抱えていることもを知りました。

・Aさんは、「我々は個々バラバラに活動していても、できることは限られているし、相互に連携することができたら、もっと違う展開ができそうだ。」と感じ、早速、河川の沿岸の清掃をしている地元の自治会長Bさんたちと協議し、今度の清掃活動日は、両方の団体が揃って清掃することを決定しました。

・Bさんは自治会長として、毎年5月と11月に地域の清掃活動を推進してきましたが、最近の悩みは、参加者がいつも同じことや高齢化が目立つことです。「自治会清掃は、自治会の定例行事としては、地域に定着しているが、出てくる人はいつも同じ。若い世代の人は関心を持ってない。最近は活動に限界を感じている。」と少し弱音が出ますが、どこかで「もっと連携して担い手を確保できないか」と感じていました。地域の中には、シニア世代の活動も見られますが、長らく気の合った仲間と“こじんまり”仲良く活動している状況でした。

・今後、さらに高齢化が進んでいくと、活動が持続できないばかりか、地域そのものが成り立たなくなり、地域の課題を地域で解決できなくなるのではないかと危惧しています。

・ある日、市が行っている温暖化問題の出前講座が近所の公民館で開かれました。そこに、参加していたCさん

（60歳代の女性）が質問しました。

- Cさんは環境美化推進員として、ごみの分別ルールの徹底を呼びかけたり、ごみ集積所の清掃や周りに花を植えたりするなど日頃から地域の美化活動に熱心に取り組んでいます。
- 「地球温暖化問題が深刻なのはわかるけど、私一人が頑張ってもどうにかなるものではないでしょう？私には、もっと身近で、効果が目に見える活動の方が、やりがいがあるし、目の前のことができなくて果たしてそんな大きなことができるのかしら、少なくとも私には努力した実感がわからないわ。」
- 一週間後、Cさんは、この講座で知り合った地域の老人会のDさんに、遊休地を利用した菜の花栽培エコ・プロジェクトの取り組みに参加するよう誘われました。
- 菜の花エコ・プロジェクトは、昔農村にあった菜の花をもう一度よみがえらせることで、環境問題とエネルギー問題と農業の抱える問題を、地域から解決する取り組みです。
- 菜の花を栽培して、観光利用や養蜂などに利用し、刈り取った菜種は搾油し、家庭や学校給食に利用されます。搾油の時に生まれる油かすは、飼料や肥料として有効活用され、家庭や学校からの廃食油はディーゼル燃料として再び地域で利活用するというエネルギーの小さな地域内循環をモデル的に実践しようとするものでした。
- 興味を持ったCさんは、企画立案などの手間隙のかかる作業には従事できないものの、都合の合う日程で作業のみに従事できるワンデイ・ボランティアという参加の方法を教えられ、応募することにしました。菜の花エコ・プロジェクトは、全国的に広がっていて、菜種の栽培から廃食油の燃料化にいたる循環の過程で、農業振興、観光、学習、まちづくりなどさまざまな波及効果をもたらしています。
- 地域では、25の自治会連合単位ごとに地域自らが策定した地域別計画に基づき、地域別環境マップの作成や、田園風景、里山などの地域特性・環境資源を活かした環境再生の取り組みに着手し始めた地域もあり、自治会や組単位レベルでも身近な河川の清掃や緑地の手入れなどの環境再生の取り組み（環境再生プロジェクト）がこれまで活動してきた団体等の人々を火種として行われるようになってきました。

平成28年ごろ

- 自治会長のBさんは、河川清掃と地域清掃が一体的に行われるようになったものの、河川の上流でのごみの不法投棄が活動に影響することから、上流の地域とも連携し、これまでの活動に加えて、河川の一斉清掃ができないものか、Aさんと相談しました。
- Aさんも、身近な河川の清掃活動をするうちに上流や下流地域の自治会などとも連携し、流域一帯の一斉清掃活動の必要性を感じるようになり、近所に住む地域運営協議会の委員にも、Bさんといっしょに相談してみることにしました。
- 最近では、河川内のごみ拾いといった活動だけでなく、水質の浄化ということが気になっていました。また、近所の古老の話によると、この川も以前はもっと水流が多かったと聞きました。Aさん自身、台風や大雨が降ると一気に河川が増水し、溢水の危険を何度も経験していました。古老の話しによると、上流の山々の保水能力が弱くなっていることが原因で、森林の手入れが行き届いていないことやアスファルト張りの農道や側溝から一気に川に水が流れ込むことも原因のひとつであると聞いています。
- Aさんは、地域の様々な環境再生プロジェクトの取り組みを調整・仲介する組織として設立された環境再生活動推進協議会にも相談し、水源林の保全活動にも関与する一体的な活動への展開をコーディネートしてほしいとの申し入れをしました。
- AさんもBさんもそれぞれの活動の輪を広げるだけでなく、他の活動をしているグループとの「つながり」を増やすことに腐心しているようです。
- 環境美化推進員のCさんは、自分が進めてきた活動を地域の活動として、定着させようと、地域内での連携を模索し始めています。
- 菜の花エコ・プロジェクトに参加した経験から、「市民の中には環境のことで貢献したいけど、なかなかきっかけがなかったり、情報が不足していて参加するチャンスがつかめない。あるいは、なかなか敷居が高くて団体の活動には参加しにくいといった人たちも多い」と感じていました。
- そこで、これまで隣近所に限られていた活動を、地域内に展開できないか自治会の人々と話し合いたいと、公民館での会合を計画しました。そして、花を植える活動に加えて、地域の鎮守の森や身近な緑地の手入れと整備について提案しようと考えました。地域の活動のフリーペーパーなどを作って広報し、企画立案から運営まで関わるメンバーや、自分の都合の範囲内での作業に従事するメンバーなど、多様な活動の担い手と連携、協調のネットワークを広めたいと思っています。

・地域の人々がともに知恵を出し、汗をかき、お互いが関わりあえば、地域の環境課題を解決し、地域環境を改善することが出来ると感じています。

平成34年ごろ

・個人、組織などの様々な主体が地域に定着した取り組みを行い一定の効果を上げています。担い手が相互に連携し合うことできめ細かな対応が可能となり、地域の自然環境が改善されました。

・近年では、①手入れの足りない森林の枝打ち間伐などの実践を通じた森林の保全と再生、②身近な里山や耕作放棄地でのそばづくり、もちづくりと銘打った再生、③身近な生き物調査から河川清掃、④街路樹、公園、園芸など緑あふれる街づくり、⑤豊かな自然と食をつないだエコツーリズム、⑥伝統工芸品、家具、遊具、食器など間伐材等を材料とした木工品に親しむ講座、⑦環境情報を盛り込んだ環境マップの作成、⑧ごみ減量、再利用、リサイクル・資源化などを推進する5R推進プロジェクト、⑨エネルギーの有効利用、クリーンエネルギーの活用、エコライフなど温暖化防止活動推進など小田原の環境フィールドを教材とした様々な実践的な環境学習・環境教育の拠点が増えました。

・生ごみ堆肥化に伴い、ごみの分別区分が増えました。けれども、市民が作業に協力してくれるので、回収はスムーズに行われています。大人に混じって中学生も朝から分別作業に加わります。当初、中学生の参加は低調でしたが、最近では、“まごころカード”の対象となり、中学生の中には部活動の朝練を休んででも参加する子もいました。現在は、幼稚園から環境ISOに取り組んできた世代でもあることから、中学生は地域の貴重な戦力となっています。こうして行われる回収・分別作業は地域を活気付けるだけでなく、中学生にとっては、大人としての地域デビューであり、シニアもこれに混じって地域デビューのきっかけとなっています。大人たちは地域の中学生との交流の場として、祭りや地域行事への参加の呼びかけなど協力も得やすくなるだけでなく、中学生が見ているから、いい加減なこともできないという緊張感、活気にも満ちています。

・地域の総意を形成する地域運営協議会と連携し、地域の環境再生活動は一定の効果を挙げ、機能し始めています。

・環境美化推進員のCさんは、自治会長のBさんも参加する地域運営協議会において、丘陵地にある遊休農地の活用の方法について、数箇所の地域で実践されている「菜の花エコ・プロジェクト』を提案し、地域で耕作地づくりの準備を始めることになりました。

・そこには人々が地域とのつながりを意識し、これが、さらなる関心を喚起し、理解を進化させ、参加する態度や問題解決能力の育成を通じて具体的な行動を促しています。このこと自体が人々の成長を促し地域の学びとなり、地域を良い方向に変化させているのです。

・環境経営というフィルターを通じて、市民生活、事業活動のあらゆる局面において、活動が持続可能なものかどうかという視点が根付いた環境に市民生活や文化の浸透した環境文化意識の高い都市づくりを歩んでいます。

～実現したい将来像～

・自然環境・・・青く澄みわたった空にはコアジサシが飛び交い、箱根山、丹沢、曽我丘陵に囲まれた足柄平野をさわやかな風が流れ、相模湾の紺碧の海は、絶えず繰り返される穏やかな鼓動に包まれています。広葉樹豊かな山々は保水力があり、豊富な地下水の源泉となっています。山には多様な動植物の生態系が保全され、緑あふれる野山には、小鳥のさえずりが聞こえます。酒匂川にはたくさんの魚が泳ぎ、夏休みを楽しむ子どもたちの歓声が聞こえてきます。

・市街地では・・・花と緑あふれるまちなかは、人々の心を和ませます。街角に、公園に、緑陰はこぼれ、優れた自然環境が保たれています。公共交通機関や自転車利用の普及により、通りは歩行者にも自転車にも安全です。そこで、人々は身近な自然との触れ合いによって癒しを受け、経済的にも精神的にも真の豊かさを感じることができます。

・経済、食とエネルギーの地域内循環・・・商店街では作物がどこで生産され、輸送するために消費したエネルギーの見える化（フードマイレージ）が浸透しており、小田原及びその近郊で収穫された有機野菜が店先を彩り、近海の地の魚にあふれています（食の地産地消）。たくさんの買い物客が楽しげな会話を交わしながら買い物を楽しみ、日常生活の中の潤いある時間を過ごしています。市民は誰もが『もの』を大切にし、クリーンエネルギーを活用するよう心がけています（エネルギーの地産地消）。

・社会と人々・・・明日の小田原には、シニア世代や若者、子ども、みんなが手をとりあって笑顔で暮らし、学び、行動する姿があります。未来を担う世代との交わりは地域固有の文化の継承にもつながり、環境と経済・社会が相乗的に高め合う持続可能な地域社会が創造され、希望にあふれた環境経営都市が構築されています。

22　循環型社会形成の推進

概要

作成：環境政策課

シナリオのタイトル：循環型社会の構築ストーリー

サマリー（概要）

・環境への意識の高まりから循環型社会の構築がひとつのキーワードになっています。小田原市では、ごみの減量化や資源化、生活環境を良くする地域の美化活動などに力を注いでおり、自治会連合会ごとの「燃せるごみ」の排出量や組成分析調査結果を公表するとともに、広報紙や環境情報誌「ゴミダス」をはじめ、環境月間に併せた「エコライフフェア」などのイベントや出前講座などを通じて、情報提供、啓発を行っています。

・また、燃せるごみの半分近くを占める生ごみを地域農業の資材として循環させるなど、生ごみ堆肥化による地域内循環の取り組みが市内で徐々に広まっており、市民の環境に対する意識も高まってきています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「環境問題」「環境意識」「ごみ減量化・資源化」「5R 推進」「生ごみ堆肥化」「循環型社会」

平成23年ごろ

・小田原市では、燃せるごみの排出量が増加傾向にあることから、エコライフフェアやリサイクルリュースフェアなどのイベントを通じて、環境意識の啓発事業を実施しています。また、各家庭から出される廃食用油を利用した100％バイオディーゼル燃料（BDF）の収集車を導入し、市内のごみ収集を行っています。

・また、小学校区をモデル地域として、生ごみを堆肥化し、資源として再利用する地域内循環の仕組みづくりにも乗り出しています。この取り組みは循環型社会の構築を目指す上で、有意義な取り組みであると認識しており、地域住民と連携しながらすすめています。

・市内に住む A さんは、家族で小田原城址公園　二の丸広場で実施しているエコライフフェアに行き、燃せるごみの量が増加していることやごみの中にも資源化できるものがあることを知り、いろいろ調べて見たくなりました。

・次の日、スーパーで買い物をしていると、近所に住む B さんが近づいて来て、私に「ここの店は、レジ袋を使わず、マイバックで買い物すると商品からレジ袋代を引いてくれることを話してくれました。」ごみの削減にもなるし、これからは、マイバックを持って来ようと思いました。友人にも教えてあげようと思いました。

・翌日、A さんは燃せるごみを近くの集積場に持って行ったとき、カラスに荒らされ、生ごみが散らばっているのを見て、あまりいい気持ちにはなれませんでした。何とかしなければと思いました。

・その時、近くの C さんも燃せるごみを出しにきました。特に 4 月、5 月は、カラスは雛をかえすので、えさを取りに来るのでしかたないのよと教えてくれました。また、燃せるごみの 40％が、この生ごみで占めており、その対策として、小田原市では、電動式生ごみ処理器の補助や貸出しを行っていることも教えてくれました。

・そこで、A さんは、小田原市役所に電話し、生ごみ処理器の補助や貸出し制度について説明を受け、早速、生ごみ処理器を市から借り、3 ヶ月間実際にやってみました。出来た堆肥は、家庭菜園に使ってみました。その野菜の出来栄えにとても喜び、今後も続けようと心に思いました。

・ある時、A さんが広報誌を、何気なく見ていると、○○地域で、生ごみを堆肥化し、地域の農産物の栽培に活用し、収穫された農産物を地域で消費する地域内循環をしている記事を見て、とても感動し、私の地域もこのようなしくみができたらいいなと感じました。

平成28年ごろ

- 小田原市では、燃せるごみの軽減を図るため、生ごみ堆肥化の○○モデル地域を対象に、ごみの分別方法を現在の9分別から生ごみを新たに追加し、10 分別に試行的に実施することといたしました。また、各家庭から出る廃食油を利用した100％バイオディーゼル燃料（BDF）の収集車を順次、導入し、市内のごみ収集に役立てています。
- 半年前に○○モデル地域に転居してきた D さんは、以前住んでいた○○では、ごみの分別はしていませんでしたので、小田原に来て、燃せるごみと生ごみを分けて出さなければならないことにとても抵抗を感じましたが、きまりなので仕方なく、近くの集積場へ持っていきました。
- その時、近所のＥさんが来たので、何気なく、「生ごみを分けるのは面倒だわ」と言ったところ、この生ごみは、以前は焼却炉で燃していたけど、現在は、この生ごみを堆肥化し、市内の農家の野菜栽培に活用していることを教えてくれました。出来た野菜は、有機野菜として、市内のスーパーや直売所で、販売しており、安心・安全でとてもおいしいと話してくれました。
- 翌日、D さんは、近くのスーパーに買い物に行きました。最近では、ほとんどのスーパーでレジ袋が有料になっており、マイバックを持参して買い物をしております。大分、昔とは違ってきたなと思いました。市民の環境意識の高まりを強く感じました。
- 買い物を済ませ、夕食の支度には時間が少しあったので、E さんから聞いた直売所に行くことにしました。その直売所では、トマト、きゅうり、キャベツが並んでおり、○○地域の生ごみの堆肥から生産されたものである旨の看板が出ていました。
- すぐに、その野菜を買うことに決めました。自分の地域内で出た生ごみの堆肥からできた野菜だと思うと、居ても立ってもいられず、早く家に戻り、その野菜を食べて見たくなりました。そして、家に戻り、すぐに食事のしたくをし、子供たちと一緒にトマトときゅうりを食べて見ると、子供たちもおいしいと喜んでいました。とても感激です。近くの友人にも教えてあげたいと思いました。
- そして、ひとつの地域だけでなく、このような取り組みが市内の他の地域でもできたら、ごみの減量化になるし、とても良いことだなと感じました。

平成34年ごろ

- 小田原市では、ごみの減量化・資源化が進み、生ごみの堆肥化が市内に広がってきており、燃せるごみの排出量も減り、環境に対する意識がさらに高まっています。
- 市内に住む F さんは、○○地域と連携し、その地域で出来た生ごみの堆肥を牛糞と混ぜ、新たな堆肥を作り、たまねぎや大根等を作るための土作りに活用いたしました。それで出来た野菜（たまねぎ、大根）を市内のスーパーや直売所で販売しています。
- 市内に住む G さんは、会社の帰り道にスーパーに立ち寄りました。たまねぎ、大根の売り場に行くと、近所の F さんが生産者である旨の看板がありました。とても、みずみずしくおいしそうに感じました。自分もこの野菜の生産に関わっていることを肌で感じ、うれしくなりました。これからもしっかり分別して生ごみを出そうと強く感じました。
- 市内に、生ごみ堆肥化に関心のあるグループが、いくつも出来上がり、これらのグループが中心になり、市内のあらゆるところに地域内循環の仕組みができ初めてきました。
- このような生ごみ堆肥化による地域内循環に対する小田原市の取り組みが、テレビや新聞にも紹介されるなどして、環境に対する市民意識が高まってきており、他の地域でも生ごみ堆肥化による地域内循環が急激に広がりを見せています。地産・地消に対する市民の意識の高揚も高まり、子供たちの環境教育にも大きく繋がってきております。市内の各小学校からも、出前講座等の依頼が多くなってきています。
- また、各家庭から出る廃食用油もほとんどの家庭から出るようになり、1 日に出る量も○○トンになり、市内で走っているごみ収集車の大半が、この廃食用油の燃料（BDF）を使って、走るようになりました。
- 小田原市では、今後更なるごみの減量化をすすめるため、ごみの有料化も検討しています。

23　生活環境の保全（美化衛生）

概要

作成：環境保護課

シナリオのタイトル：目指すべききれいなまち小田原

サマリー（概要）

・小田原市では清掃活動をする市民・団体への支援をするとともに、企業への働きかけ、企業・市民の美化意識の向上を啓発する活動を続ける。その効果で、市民一人ひとりが環境・美化を意識するようになり小さいながらも活動を始める。また、地元企業も地域住民を巻き込んだ活動を展開し始める。それを継続することにより小さな活動が輪を広げ、いつしか市全域での活動となる。点で広がっていた活動が企業の参画により面となり、その結果、観光客らが何度も訪れたくなるごみのないきれいなまち小田原となる。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「地球環境意識の向上」「美化意識の向上」「下水道・浄化槽の整備」「ごみの分別」「リサイクル」

「行政・企業・市民の協働」

平成23年ごろ

・小田原市では、クリーンさかわ、山王川・久野川清掃、全市一斉清掃など自治会等と協力し、清掃活動をしている。また、市内の海岸や道路・河川・公園などを清掃してくれるボランティアの個人・団体にボランティア袋を支給し、ごみの特別収集を行い美化活動を支援している。また、ある自治会では連合自治会が主となり市と協力し、道路上のポイ捨てを無くそうと年4回地域内で清掃活動とのぼり旗を使った啓発活動を行っている。さらに、歩行喫煙、落書き、深夜花火などを規制した条例を施行し、啓発活動に取り組んでいる。こうした活動を通して、ごみのないまちを目指しているが、不法投棄、ポイ捨ては減っているとはいえ、いまだ無くならず、いい方法はないか検討しているところである。

・合併処理浄化槽設置や下水道整備を推進し汚水処理に力を入れているが、近年不景気ということもあり、伸び悩んでいる。

・市民の衛生面の確保のため、ユスリカ、スズメ蜂、茶毒蛾の害虫駆除を行っている。また、犬・猫の糞の不始末も多く、啓発看板の貸出を行いマナー向上に取り組んでいる。

・市内9箇所にある公衆便所を快適に利用していただくため維持管理に努めている。

・小田原市に住む A さん（30歳、女性、主婦、4 人家族）は、自宅から700mのスーパーに小学生と幼稚園の子供を乗せ車で買い物に行き、レジ袋を使用している。ごみは、きちんと分別しないとルール違反のシールを貼られるし、近所の手前もあり生ごみ、紙、缶、ビン、ペットボトル、プラスチック、など6つのごみ箱をつくり分別している。地域での清掃活動は、回覧板で周知されたものには参加していた。

・B さんは、日ごろから環境美化に熱心であり、自らボランティア団体をつくり家の周りから周辺道路の清掃、また月に2回小田原駅周辺の空缶やたばこの吸殻等のポイ捨て防止活動を市と協力し行っている。最近では、市内の落書き消し等も始めたが消去用具等は費用がかかるため作業にも限界があるなと考えている。

・C さんは自治会長をしている。自分の自治会内はきれいにしようと年に何回か自治会内の一斉清掃をしている。だが、道を歩くとポイ捨てや不法投棄ごみが減ってはいるが、まだまだなくならないのが現状であり、何か良い対策がないか地区内の環境美化推進員と話し合いをしている。

・自社製品もポイ捨てごみになることが多い企業 D は、日本中にマナーを広めるため清掃活動をサポートしている。自治体、学校、ボランティア、各催事の実行委員会や参加団体等いろいろな方とごみを拾う活動をしている。この活動を全国に広げながら、マナーと企業の PR も行っている。有名人等を起用し活動の参加者が増えるよういろいろな仕掛けをしていきたいと考えている。

・市内に支店をもつ企業 E は、地域とともに発展していくことを目指している。地域のためにできることはないかと、各店舗の周辺道路の清掃をすることをはじめた。これが、お客さまに好印象を与えるとともに社員の教育にもつながるということで、さらに会社全体で取り組み、市民とともにできるイベントができないものかと考えているところである。

平成28年ごろ

・小田原市では、今までのように自治会やボランティアの方々を支援することを継続しているが、さらにまちをきれいにし、目指すべき姿にするには市民一人ひとりの環境美化意識の向上が必要であると考えられるため、啓発活動を推進することとした。まず、企業向けの啓発活動、市民向けの啓発活動をした。企業へは、ごみの分別の徹底とリサイクル意識の向上を図るため講師を招きセミナーを開催した。また、企業との協働で市民の美化活動サポートをお願いした。市民への啓発活動としては、環境教育の一環として幼稚園、小・中学校、高校、大学などに出前講座に行き、地球環境の現状とごみの減量、美化活動への参加、エコなど環境をよくするため自分ができることをしようという意識を芽生えさせた。さらに、清掃参加者へのポイント制度を取り入れ、若者が参加したくなる仕組み作りをした。また、自治会やその他の市民にはまちの美化と財政負担についての話も含め、企業に協力してもらい実際に清掃活動をしている企業や団体等を講師に招き講演会を行った。また、今まで年1回行っていた全市一斉清掃日の回数を増やすこととした。エコライフフェアなどイベントにも多数の企業に協力いただき、小さな子どもから大人まで集客のできるイベントを開催した。

・また、落書き消去用具の貸し出しを始めた。

・合併処理浄化槽や下水道への接続についても効果や環境に与える影響などを啓発し、さらに補助金を出すこととし推進活動を続けている。

・市民の良好な生活環境を維持するため、ユスリカ、スズメ蜂、茶毒蛾の害虫駆除は継続している。

・犬・猫の糞の不始末については、看板の貸出だけでは減らないため、所管である県保健所に指導を徹底するようさらなる働きかけをしている。

・コンビニやスーパー等にトイレが設置され、場所によっては役割を果たし終えた公衆便所も見受けられるようになった。老朽化により維持管理費もかかることもあり、不要な公衆便所の取り壊しについても検討している。

・A さんは市と企業が主催する環境の講演会に参加した。子供たちも出前講座やイベントを通し少しではあるが地球環境の現状や自分でできることがあることを知った。その日からスーパーへの買い物は子供たちと徒歩で行き、マイバックを持参することとした。歩くことにより、自分の住んでいる地域がよく見えるようになってきた。道沿いに咲いている花や、小川のめだかなどを発見した。毎回子ども達と新発見を探しながらよく見て歩いてみると、空缶やタバコの吸殻が落ちているのも目に付いてきた。ごみ袋を持って買い物帰りに子どもとごみ拾いを始めた。

・B さんは、ボランティア団体での清掃活動を継続して行っている。落書き消しについては、市が行っている消去用具の貸し出しを利用し、費用をかけず活動を継続することができた。

・C さんは自治会長をしている。年に数回の自治会内の一斉清掃を継続している。さらに、市の勧めで他の自治会で実施されていたポイ捨て防止キャンペーンに環境美化推進員と参加し、自分の地域でもこの運動をしようと考えている。

・日本中にマナーを広めるため清掃活動をサポートしている企業Dに市と協力をして市民、企業への啓発活動をしていただけないか協議したところ、快く引き受けていただけた。毎年市民、企業向けに啓発活動を実施していただいている。

・企業 E は、毎回セミナーに参加し、企業 D とタイアップして地域住民とともにできる活動について検討し、各支店の地域での地域住民参加型の清掃活動を実施した。

平成34年ごろ

・A さん親子は、子どもとの清掃活動を継続していた。活動を継続している間に A さん親子の姿に共感した他の親子も参加しグループをつくり活動している。参加人数が多くなったこともあり、清掃活動の範囲も子どもの通学路、身近な公園、学校周辺など広がってきた。企業 E 主催の清掃活動にも団体で参加している。

・B さんのボランティア団体も清掃活動の輪が広がり、他の団体と合同で清掃活動もするようになった。今後は、さらに輪を広げ市外の団体とも合同で神奈川県全体をきれいにしようと考えている。

・C さんの自治会でも年数回であった自治会清掃が毎月実施されるようになり、地域内のポイ捨て防止キャンペーンも定着し、小さい子から老人まで参加するようになった。こうした活動の効果か、ごみ出しのルールもきちんと守られるようになり市内でもかなりきれいな自治会となり、他の自治会の模範となっている。

・企業 E は、企業 D とタイアップの各支店地域での清掃活動を継続し地域住民の参加も年々増加している。さらに全支店の職員、市民参加で小田原の海岸の一斉清掃も年に数回行っている。地域との交流が深まったこともあり、業績も上がってきている。

・小田原市は、ボランティア活動をしている個人・団体にボランティア袋の提供やごみ収集などで協力している。落書き消去用具の貸し出しも継続。また、企業D、Eやボランティア団体の協力を得て、市民への美化意識向上のための啓発活動を続けている。

・合併処理浄化槽や下水道への接続についても推進活動を続けている。

・市民の良好な生活環境を維持するため、ユスリカ、スズメ蜂、茶毒蛾の害虫駆除は継続している。

・犬・猫の飼い主の指導について、飼い主のマナー向上のため県への働きかけを継続し、指導を徹底する対策をとってもらっている。

・公衆便所の設置箇所も整理され数は減って、適所への設置となった。市民等に快適に利用していただけるよう施設の維持管理を継続している。

・長年継続してきた市民、企業の意識改革のための啓発活動の成果として、生ごみの堆肥化、リサイクル率が70%となり、ボランティア活動登録する団体も増え毎週市内のどこかで必ず清掃活動が行われ、月全体でみると市内全域が清掃されていることになる。学校の授業の一環で美化意識の啓発をするなど意識が向上され、ボランティア活動には若者を中心とする団体が増えてきている。それにより企業とボランティアによる活動の範囲が拡大されている。

・落書きを消去する団体も市内各地区に増加し、ごみの少ないきれいなまちとなっている。

・また市は企業と共同し、市民参加型の清掃活動のイベントなどをコーディネイトし市民の活動をバックアップしている。

・市民の美化意識も高まり、合併浄化槽や下水道整備の加入者が増え市内のほとんどの汚水処理が適正に行われ、衛生面でも効果がでている。

・小田原市は市民全体の美化意識の向上がされ、市全体がテーマパークのようにごみのないきれいなまちとなり、訪れる観光客が何度も来たいまち、住みたいまちとなり交流人口も増え、商業は活性化し市全体が発展していく兆しがでてきている。

23　生活環境の保全（緑公園）

概要

作成：みどり公園課

シナリオのタイトル：市民による市民のためのそして、行政の支援のある緑の保全・創出

サマリー（概要）

・街なかの緑を保全し快適な空間を創出していくためには、お互いの価値観を理解し協力しあうことが必要です。自分だけが良ければ他人のことは関知しませんという考え方では本当の意味での快適な空間は生み出せません。緑の保全活動を始めるきっかけは自分のためで良いでしょう。次第に周りの人のことを尊重し自分たちにできることを実践していく。そうした中で街なかの公園や街路樹、鎮守の森が守られていきます。行政も市民の活動を財政面などあらゆる面からサポートしています。少子高齢化や核家族化は進みますが、様々な活動を通して良好な近隣関係が構築されることによりお互い様の意識も醸成されていきます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「少子高齢化」「核家族化」「多様な価値観」「お互い様」「市民参加」「ボランティア」「市民意識の高まり」

「財政状況の悪化」「役割分担」「話し合い」

平成23年ごろ

・Aさんは、現在、30歳の専業主婦。サラリーマンの夫のBさんとは学生時代の同級生で、1歳になる息子のCちゃんとの 3 人暮らしです。寒さも緩んできてそろそろ息子と公園デビューをしようかと考えています。たまたまBさんが早く帰宅した日の夕方、Cちゃんとの公園デビューを計画していることを相談しました。

・Bさんは「〇〇公園は、植栽がされていて木陰もあるから公園デビューにはちょうどいいと思うよ。でも、最近小学生の野球やサッカーに使われるようになってきたから、危ないかもしれないね」と不安げに言いました。Aさんは、公園デビューがちょっと不安になってしまいました。

・Dさんは、65歳。再就職期間も満了し朝起きて健康のためにウオーキングに出かけることを楽しみにしています。ウオーキングの途中疲れた時には公園のベンチで一休みします。ある日、〇〇公園のベンチで休んでいると、同年代のEさんが話しかけてきました。Eさんは、「この公園は今から30年くらい前に市が整備して、ベンチやスベリ台を設けたし、桜も植えたのだけれど、最近は市の公園管理の予算が少なくなってきて、ベンチも傷んだままなんですよ。桜の木も花の時期は見事に咲いて気持ちいいけど、花が終わった後には毛虫は出るし、最近は大きくなった木の枝で防犯灯が隠れて不審者まで出るようになった。秋にはたくさんの落ち葉が玄関先に吹き寄せられて、ご近所の人たちから苦情も出ているようですよ。」とこぼしました。

・Dさんは、昔訪れた南町の西子海小路を思い出しました。満開の桜のトンネルがとてもみごとで、ここに住んでいる人がうらやましいと思いましたが、毛虫がたくさん出た時のことを考えると、目の前に住んでいる人は気持ち悪くて大変だろと思いました。また、毎日のウオーキングコースである市役所けやき通りは、さながら緑のトンネルようで歩いていてとても気持ち良いのですが、毎朝歩道を掃除している●さんから、「秋の落ち葉清掃は大変だし、夏には鳥のねぐらになって糞が臭くて窓を開けて寝られない」と聞いたことを思い出しました。

・Dさんは、「せっかくの緑もきちんと管理できていなければ迷惑がられてしまう。何かいい方法はないものか。何か自分にできることはないか」と考えるようになりました。Dさんは家に帰ると、妻のFさんに自分の思いを話しました。Fさんは、「お父さんは現役時代仕事ばかりしていて、地域のことには関わらなかったのに。でも、散歩ばかりしていても仕方がないから、どんなことがしたいか考えてみれば」と少し感動した様子で返事をしました。

・Gさんは△△神社の隣接地に住んでいます。神社の境内はとても広く、大きな松やくすのきが林立しています。たまたま自宅を訪ねてきた知人のHさんからは「近くに緑がいっぱいあってうらやましい。私もこんな場所で暮らしたい。」と言われました。

・そのとたんGさんの顔色がガラッと変わりました。「ちょっと表に出てみない。」知人を誘いました。「ここから家の屋根をみてくれる。真っ白でしょう」。そして、神社の境内にHさんを連れて行くと、「これ何だか分かりますか」Gさんは松の木の下に落ちている物体を指差しました。そこにはなぜか魚の屍骸が落ちていました。

・Iさんは、今年還暦を迎える女性。子ども二人は独立してそれぞれ都内に住むようになり、今は定年間近の夫のJさんとの二人暮らしです。最近は、フラワーガーデンで開催される園芸教室に通い始め、自宅の庭で四季折々の草花を育てることを楽しみにしています。

・ある日、子どもたちが還暦祝いに信州旅行の手配をしてくれたので、夫のJさんと葛飾北斎や栗で有名な長野県の小布施町に出かけました。旅行のメインは北斎館のつもりでいましたが、実際に小布施の観光案内所を訪れるとオープンガーデンマップというものが置いてあり、そこには個人のお宅が地図に落とされていました。Iさんは始めて聞くオープンガーデンという言葉に興味が湧き、最寄りのお宅を訪ねてみることにしました。そのお宅は自由に庭に入ることができ、ハナミズキとサツキが咲き誇っていて、お茶の用意もしてありました。今回の信州旅行での一番の思い出は他人の家の庭での感動となりました。

平成28年ごろ

・Aさんは、35歳になりました。息子のCちゃんも今は6歳。5年前に公園デビューを無事果たし、今では公園の遊具がお気に入りになっています。真夏でも木陰がありますので遊んでは木陰で一休みを繰り返し真っ黒になっています。今年も新たに公園デビューをしようとベビーカーを押した女性がやってきています。Aさんは5年前を思い起こしました。「うちのCちゃんが公園デビューしたときは、確かボール遊びのボールが飛んでこないか冷や冷やしたわ。今は時間帯で公園の使い方を決めてあるし、公園で使うボールやバットも柔らかいものを使うルールになっているから安心して公園に来られるようになって良かった。」

・Dさんは、70歳になりました。5年前から始めた朝のウオーキングを続けているせいか体調は良好です。今ではウオーキングの途中で疲れることもなくなっています。今日も〇〇公園のベンチで一休みしていると、5年前に知り合ったEさんがやって来ました。Eさんは「この公園ももう35年経ったんですね。5年前はベンチがボロボロだったけれど市が遊具やベンチのリニューアルに予算を配分したため新しくなって気持ちがいいですね。」と話かけてきました。確かにベンチは新しくなって、すわり心地もとても良くなっています。

・Dさんは、5年前に妻に言われたことを思い起こしました。妻からは「地域との関わりを持ってみれば」と言われ、まずは公園で知り合ったEさんに相談して、自治会の役員になっています。地域デビューしたのです。自分がいつも使っている〇〇公園を安心して使える公園にしたいという思いから定期的な清掃や花を植えたりしています。花の苗や清掃道具は市からの現物支給がありますので、秋には〇〇公園だけでなく公園の前や横の道路の落ち葉も清掃しています。また、桜の木は高木で自分たちではなかなか手入れができないため、市が業者さんを手配してくれることになりました。地域と市とで話し合いを重ね役割分担を決めて管理しているのです。

・Dさんは、毎朝のウォーキングの途中で出会う市役所けやき通りの歩道を掃除している●さんにも、市からの清掃道具の現物支給で、〇〇公園を清掃していることを話しました。

・Gさんは今も△△神社の隣で暮らしています。ある日知人のHさんが尋ねてきました。Hさんは「相変わらす緑がいっぱいあってうらやましい環境だね。ところで、確か5年前は屋根が真っ白だったけれど今はどんな状況かな。あと、松の木の根元には魚の屍骸があって気持ちが悪かったよね。あればどう？」と尋ねました。

・Gさんは、「ここの林が保存樹林に指定されてから、神社さんが手入れをきちんとしてくれるんですよ。それ以来糞や魚の屍骸を落としていたダイサギが来なくなってすっかりきれいになったよ。」とうれしそうに話しました。ただ、最近保存樹林の指定が解除されるという噂を耳にしました。

・Iさんは、5年前から始めた自宅のガーデニングに今も熱を入れています。フラワーガーデンでの園芸教室の甲斐もあって今では友人に草花のことを教えてあげる知識も習得しています。

・Iさんは、ふと5年前に旅行した小布施のオープンガーデンのことを思い出しました。「せっかくきれいに世話をした庭を自分だけの物にするのは何かもったいないな。近所の人や小田原に旅行に来た人にも観て貰えれば、気持ちに潤いができるのではないかしら。」

・Iさんは友人や市に小田原でもオープンガーデンができないか相談することにしました。

平成34年ごろ

・Aさんは、40歳になりました。息子も小学校5年生になり学校から帰ると〇〇公園に出かけていきます。3時からが公園でボール

・遊びができる時間帯です。おまけに子ども会の人が一緒にいてくれてちょっとした技術指導もしてくれます。子ども会の人は礼儀にも厳しいらしくて、たまたま息子が近所の人にきちんと挨拶をしている姿を見て〇〇公園が近所にあって本当に良かったと心から思っています。最近では自分も〇〇公園で何かお手伝いをしていこうと思い立ち、午前中に公園に出かけ、新しく公園デビューしたお母さん方の子育ての相談に乗っています。

・Dさんは75歳になりました。まだまだ足腰も強く老人会の会長を務めています。5年前から始まった公園の環境美化活動も最初は自治会の役員だけで行っていましたが、若い世代の人たちも自分の子どもたちが使っている公園だから自分たちも活動に参加しようという気運が高まり、休みの日には一緒に活動しています。また、地域での公園管理運営活動が盛んになり、市からベンチの材料支給がありましたので、自分たちで交換しました。自分たちの手で修理したことで、一層公園に愛着が生まれ皆が大切に使うようになっています。Dさんは、この機に遊具も自分たちで日常のチェックをして、市と協働して安全な遊び場を確保しようと子ども会や老人会にも呼びかけて遊具の点検ポイントの説明を市から受けました。自分たちでできる修理はやっていこうと考えています。また、昨年の秋からはご近所の玄関先の落ち葉も一緒に清掃するようなりましたし、植木屋さんの経験がある方が参加してくれたので高枝切を使って自分たちでできる範囲は高木の手入れもしています。桜の苦情もあまり聞かなくなりました。

・市役所けやき通りでも、毎朝清掃している●さんやご近所の人たちの活動が広がり、秋の落ち葉清掃は地域の恒例イベントになっています。また、最近では●さんから鳥の糞害の話も聞かなくなりました。数年前までは、市とご近所の皆さんで音をたてて鳥を他の場所に移動させていましたが、市街地周辺の斜面地や里山で保全されて増えた緑をねぐらにしたようで、夏も窓を開けて涼しい風を感じながら寝ることができるようになりました。街路樹の植えられた道路ようやく増えてきて、真夏でも以前と比べてウオーキングしている人が増えています。

・Gさんは5年前と同様に△△神社の松やくすのきなどの緑に囲まれた生活を送っています。5年前には、保存樹林の指定が解除されるのではという噂を耳にしましたが、地域の人たちと何とか木々を残そうと相談し、神社さんに相談しました。神社さんは「皆さんや市と管理協力し合って、木々を残していきます。市は、市街地の緑を守り育てていくという基本方針に則って協働して管理していきましょうと前向きな返事をしてくれています」との話をしてくれました。

・この5年間、地域の方々は落ち葉などの清掃活動をしています。また、市からの保存樹林の奨励金は、高所剪定などの費用を助成してくれるようになっています。

・Iさんは、5年前から自宅の庭を近所の方や観光客に開放しています。より多くの方に潤いを感じてもらいたいと思い立ち、始めたものです。庭の開放を始めた頃、市では市民と協働して街なかの潤いを増やす施策を展開することにしているという情報を耳にして相談してみました。市からは「個人の庭を開放していただくことになるため、色々なルールづくりも必要です。また、市内の回遊性を高めるため多くの市民に協力していただくことも必要です。」との返事がありました。Iさんは10年前に通ったフラワーガーデンの園芸教室で知り合った仲間と早速相談したところ、皆さんからもぜひオープンガーデンを実現しようと賛同が得られたため、市と一緒にオープンガーデン推進協議会を作りました。メンバーもどんどん増え、今では120人の方が会員になり、それぞれ趣向を凝らした庭造りをし、観光客に開放しています。

24　自然環境の保全と再生

概要

作成：環境保護課

シナリオのタイトル：市民参加と市民団体による環境保全シナリオ（三位一体連携型ストーリー）

サマリー（概要）

・小田原市を取り巻く自然環境は、環境破壊という言葉で表されるように、様々な要因で失われつつあるのが現状である。現在でも一部の市民団体による環境保全活動が行われているが、参加者も少なく効果も限定的である。そこで、このような市民団体による環境保全活動を行政がバックアップすることで、活動に広がりをもたらし、活動に対する理解や協力が得られ、活動に興味のある一般市民だけでなく、さらに企業や地域住民が関わることで、自然環境の保護や再生を図ることができる。さらに、この自然環境の保護や再生が地域資源となり、地域のコミュニティーの形成や、地域の活性化につながっていく。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「市民団体による環境保全活動」「生物多様性の保全」「郷土愛と郷土への誇り」「地域資源の活用」

「地域の活性化」

平成23年ごろ

・Aさんは、子育ても終わり、子供も独立し、長年勤めた会社を無事に定年退職しました。定年を機会に、長年、住んだ東京から離れ、妻と二人で第二の人生を自然に恵まれた生まれ故郷の小田原で過ごそうと、転居してきました。

・小田原での日々の生活が軌道に乗ってくると、自分の懐かしい思い出の地に足を運んでみたくなりました。まず、子供の頃に遊びに行った久野の裏山に入ってみました。50年前は、鬱蒼とした貴重な鎮守の森と呼ぶにふさわしい場所でしたが、今では山も荒れてしまい、あまり人も足を踏み入れていないようです。子供達の声も全く、聞こえてきません。

・Aさんは「自分の子どもの頃は、ここを秘密基地と称して友達と毎日のように日が暮れるまで遊んだな。今の子どもは、どこで遊んでいるのだろう？」と考えました。

・とある天気の良い日に妻と二人で、健康のために、酒匂川の土手を散歩してみました。すると、今までに小田原では見たことのない、鮮やかな緑色の水草が川を覆わんばかりに生えていました。「一体何という、水草だろう。それに川の感じも昔と違う。河原は石や砂利であったのが、木が生え、緑に覆われている。河原ばかりでない、中州にも木が生え、やはり緑に覆われているみたいだ。」

・また、ある日、妻に小田原の特産物を教えようと、ちょっとしたドライブを兼ねて、片浦の根府川地区に行ってみました。直売所で買ったミカンに妻も「甘くて美味しい」と大喜びでしたが、どうも昔と山の感じが違うようです。Aさん夫婦は、山一面に生っている鈴なりのミカンをイメージしていましたが、実際に山の近くに行くと、手入れがされておらず、放任されて荒れている感じ。「もう、ミカンを作るのをあきらめてしまったのだろうか。」

・ある日、Aさんは、市の広報で「酒匂川水系のメダカのお父さんお母さんの募集」の記事を目にしました。2年前に「小田原メダカ」から「酒匂川水系のメダカ」に名称を変えたというのも知りました。メダカは絶滅危惧種に指定されており、野生のメダカは県内でもほとんど生息しておらず、酒匂川流域の桑原・鬼柳地区の農業水路のみが野生生息地だそうです。妻に自分のふるさとには、まだ、絶滅危惧種が生息していることを自慢し、早速申し込みをしました。嬉しいことに、抽選の結果、当選し、市役所で開催するメダカセミナーを受けて、「酒匂川水系のメダカ」を飼い始めることになりました。

・Aさんは、メダカセミナーの際に、市の担当者からメダカを育てる際に、「①大切に育てる　②捨てたり、放流しない　③他のメダカと一緒に飼育しない　④人に譲らない　」の4つの約束があることを教わりました。

・また、ある日、Aさんは、市の広報で、これも絶滅危惧種である市の鳥「コアジサシの郷づくり」への参加募集を目にしました。コアジという名前から小田原名産の魚のアジに関係あるのかなと興味をそそられ、参加してみることにしました。

・このイベントは、市の鳥「コアジサシ」の繁殖地である酒匂川の一部を「コアジサシの郷」に指定し、毎年春に市民や事業者と一緒に営巣予定地の砂礫地の整備やゴミ拾い等を行うもので、当日は、「日本野鳥の会」の人がコアジサシの説明をしてくれました。写真を見ると、自分が昔、よく酒匂川に散歩に行った時に良く見ていたあの鳥だったんだと理解しました。でも、昔、あんなにたくさんいたのに「郷づくりだなんて、どうしたのだろう」。野鳥の会の人によると、「中州で子育てしているが、中州の砂礫地が減少しているため、最近は子育てが上手くいかないようで、ここ数年は、小田原生まれのヒナもいない」との説明でした。

・Aさんが小田原に戻ってきたことを聞いた同級生の友人が歓迎会を開いてくれました。もちろん、みんな還暦を迎えた面々です。子供の頃の思い出話に花が咲き、みんな昔の悪ガキに戻っていました。「あの時は良かったな。」なんて話をしていると、そのうち、現況の報告が始まりました。その中でも、久野に住む友人の話に非常に興味を惹かれました。友人は、久野地区が里地里山保全等指定地域に指定されていると話しました。初めは何のことかさっぱり分かりませんでしたが、どうやらみんなで里山の保全に取り組んでいるみたいです。友人は、既にその活動を始めていると言います。A さんは、友人のやる気にとても羨望の思いを持ち、自分も何か生きがいと言うか、サラリーマン時代には出来ないことに取り組んでみたいと強く思いました。

・そのうち、横浜に住む息子夫婦が、6歳の孫を連れて遊びに来ました。早速、自分が生まれ育ったまちを案内しました。小田原城を始め、様々な施設を巡ったあと、孫に何が一番楽しかったかと聞きました。

・「うん。さっき、遊んだ川にたくさんの魚がいたね。ぼく、あんなにたくさんの魚って初めて見たよ。おじいちゃんは、昔、魚を取ったりして遊んでたんだね。うらやましいな。」と言いました。

・Aさんは、「そういえば、小田原に引っ越してきてから、子どもたちが川で遊んでいるのを、ほとんど見ないな」と何か不思議な思いがしました。

平成28年ごろ

・Aさんは、飼い始めたメダカも当初の5匹から、毎年、増え続け、今では、延べ500匹を超えています。専用の大型水槽を購入し、毎日、リビングにある水槽のメダカを眺めていると、心が癒されてくるのがわかります。Aさんも小学校高学年になった孫が遊びに来るたびに、メダカをはじめ、生物のことをいろいろ説明すると、孫もニコニコして、興味深そうに話を聞いてくれます。

・ある日、Aさんの家に市役所から手紙が来ました。「酒匂川水系のメダカのお父さんお母さん」の飼育状況調査です。飼育状況を回答すると、その裏面には、「酒匂川水系のメダカ」の生息地の環境保護活動の参加のお知らせがありました。内容を見ると、生息地調査や桑原地区のビオトープの草刈り等の簡単な作業の手伝いと書いてあったので、「よし、今度、孫が遊びにきたら、酒匂川水系のメダカの生息地を見せてあげよう、きっと喜ぶに違いない」と考え、妻と二人で、参加することにしました。

・当日は、自分のような酒匂川水系のメダカのお父さんお母さんだけでなく、魚類の専門家の先生やメダカ保護の市民団体の人たちが来ていました。

・魚を採ったり、草刈りをしていると、以前、酒匂川で見た、あの鮮やかな緑色の水草が一面に生い茂っているのが確認出来ました。

・市民団体の人の話によると、この水草は、オオフサモといい、特定外来生物として、栽培等が法律で禁止されており、日本の河川に入ると瞬く間に増えて、他の水草が生息できなくなるとのことでした。そこで、環境保護の市民団体を中心に関係者が一生懸命、駆除しているが市民団体では、限度があり、採りきれません。地域の人々も、農家が農作業をしていると、農業用水路を覆い尽くすので、駆除しても、ほとんどの人は外来生物の問題とは、理解していないだろうと話していました。

・Aさんは、外来生物の問題と言えば、ブラックバス位しか知りませんでした。そういえば、酒匂川のオオフサモも以前よりは大分増えている。何とかしなければと考えました。

・メダカの生息地の環境保護の活動が進むと、A さんは、市民団体や他の酒匂川水系のメダカのお父さんお母さんとも親しくなりました。自分が住んでいた頃は、もちろん自然環境を守ろうとしている市民団体は皆無だったし、まして、自然環境を守る活動すら存在しなかった記憶がありました。

・それでも、身近な自然は守られてきたのに、今日の我々のライフスタイルの変化が原因で、いつのまにか、自然環境が失われてしまったのだろう。Aさんは、この大切な自然を未来の子供達に残していかなければという、ある種の使命感を持って、この市民団体の活動に加わろうと決意しました。

・市民団体の環境保護の活動に参加するうちに、A さんは様々な知識を得ました。特に「生物の多様性」の問題は、非常に重要なことであると考えました。「どうして絶滅危惧種を守るのか。絶滅危惧種だけを守ることは不可能で、その絶滅危惧種のエサとなる生物、天敵等そこに生息する全ての生き物を守らないと絶滅危惧種が守れない。様々な生物が生息する生物多様性が保たれた状態を維持しなければならない。そのために自分が出来ることをしたい」と。

・Aさんは、市民団体の交流イベントに孫と一緒に参加しました。孫は、イベントのメインである、川での魚採りに夢中になって、とても興奮したようです。その交流イベントでは、自分と同じように酒匂川水系のメダカの生息地の保護活動に来ていた人もたくさん、見かけました。顔見知りになったその人達に、自分がいろいろとと考えていることを話すと、その顔見知りの人も、「自分もぜひ、活動に一緒に参加したい」との申し出があり、次回の市民団体の自然保護活動に一緒に参加することになりました。

・酒匂川の様子は相変わらずで、コアジサシもなかなか川辺に飛んでくる姿は見られません。中州の木の伐採は、断続的に管理者である県が行っていますが、それだけでは、どうにもならないのが現状です。野鳥の会のメンバーも酒匂川でのコアジサシの営巣は難しいので、流域の施設へ協力を依頼して、建物の屋上に白砂を敷くなど、人工営巣地を作ったようです。しかし、なかなか、効果が現れずに、コアジサシの減少傾向には歯止めがかかっていないようです。

・Aさんは、久野の友人と飲む機会があり、最近の自分の近況を報告しました。Aさんの生き生きした様子を見て、その友人は、Aさんを久野の里地里山保全活動に誘ってみることにしました。久野地域の限定された活動なので、最初、Aさんは遠慮していましたが、友人の「俺の仲間だから大丈夫だよ」の一言で、参加を決意しました。久野は、山あり、川あり、昔の小田原の良き自然を色濃く残す今でも素晴らしい場所です。さらに、地域住民による自然環境保全活動が活発が行われています。Aさんは、自然と仲間に溶け込み、活動に勤しむようになりました。

・ふるさと小田原の自然に触れているとAさんは、なるべく土地のものを食べてみたいとの思いが強くなりました。「そういえば、以前、見た荒れた片浦のミカン畑ってどうなったかな。そこで、自分も無農薬の農作物を栽培し、それを食べて生活するような自給自足の生活を送ってみたいな」と思いました。ところが、自分は小田原のまちなかで育ち、実家は農家ではありません。農家でなければなかなか、農業を始められないし、市民活動に精を出す日々では、新規就農のハードルはかなり高いみたいです。自分で農地を所有していない自分にとっては、市民農園という手があることに気がつきました。Aさんは、先ず、手始めに自宅近くの市民農園の一区画を借りてみて、野菜作りに取り組んでみることにしました。

平成34年ごろ

・Aさんが飼い始めたメダカは、もちろん、今も元気に家の水槽で泳いでいます。高校生になった孫も、遊びにくるたびにメダカのことが気になっているみたいで、大学では生物や環境のことを学びたいと話しています。

・市民団体と一緒に日々、いろいろな環境保全活動をするAさんは、自然保護活動を通じた友人や仲間が増え、確実に活動の輪が広がっていきました。毎日を生き生きと生活していることが、はっきりと実感できます。最初は地域住民でない市民団体やAさんのような一般の市民が、何をやっているのだろうと遠巻きに見ていた地元の人々も、近くの川がきれいになったり、昔、よく見かけた魚や植物を発見出来るようになったりと、自然環境が守られていることが実感出来て、次第に活動に対する理解が生まれてきました。そのうち、環境保護活動の市民団体や一般市民に任せっぱなしではダメだと協力する人も現れました。

・市民団体やAさんも地域住民と協力して自然保護活動に取り組むうちに、新たな交流が生まれ、地域の古老から興味深い昔話を色々と聞きました。Aさんは、そういう話も孫など若い世代に伝えていかなければと思いました。若い世代が、郷土愛や郷土への誇りを持つことによって、地域住民が日常では気づかない郷土の魅力に気がついてくれればと思いました。

・「自分で作る野菜は一番、美味しい」。Aさんのこの思いは、日増しに強くなっていきました。出来ればこの野菜を孫や友人に食べさせたい。でもこれ以上、市民農園に力を注ぐのも時間的に厳しい。そんな時、市が片浦地区にクラインガルデンをオープンしたという話を聞きました。早速、息子夫婦と会社員時代の友人に連絡して、Aさんが野菜の作り方を教えるので、申し込みをしないかと誘ってみました。週末になると、孫や息子夫婦、会社員時代の友人が訪れて来るようになり、皆でクラインガルデンで一緒に汗を流すようになりました。

・そのクラインガルデンのある片浦の山では、みかんが鈴なりになって、まさに収穫の時期を迎えています。小田原に戻ってきた年に見た、あのみかん山は、嘘のように活気を取り戻して、今は都会からの観光客に人気のスポットになっています。

・Aさんは、さらに小田原の貴重な動植物の生息する自然環境を市民や観光客に案内、説明する「自然保護コン

ダクター」も務めるようになりました。Aさんのコンダクターぶりは、自分自身が環境保全活動に携わっているので、苦労話あり、臨場感ありの非常に楽しいものです。

- 何よりAさんが地域住民と顔見知りなので、会う人会う人と声をかけてくれます。会社員時代の友人はAさんは東京に住んでいたのではなく、ずっと小田原に住んでいたような錯覚を覚えました。そして、A さんにとって、何よりうれしいのが、みんなが「また、小田原に遊びに来たい。今度は、小田原のどこを案内してくれるの？」という一言でした。
- 今では、里山の活発な活動は、久野地区だけでなく、市内でもいくつかの地区で始まっていますが、地域住民はもちろん、様々な人々がこの活動に参加するようになりました。その先頭に立っているのはAさんや知り合いのボランティアの仲間達です。A さんの知り合いは、始めは観光感覚で小田原に遊びに来ました。しかし、やがてAさんや彼を取り巻く地元の人々と触れあう内に、自分も体験し、活動に参加したいと思いました。
- 古希を迎えたAさんは思いました。ふるさと小田原に帰ってきた自分と同じかそれ以上に地域のことを考えている人たちや自分たちの活動に理解を示して協力してくれる人々もたくさんいる。Aさんは、この人たちの思いが、山、川、緑あふれる、ふるさと小田原の素晴らしい自然環境を守り、地域の活性化をもたらしてくれることを知っています。さすがに、年は取りましたが、自分の住む「ふるさと小田原」の豊かな自然環境を地域を挙げて守り育てるために、まだまだ、これからもやりたいことがたくさんあると感じるAさんでした。

25　快適で魅力ある生活空間づくり（市街地）

概要

作成者：都市計画課

シナリオのタイトル：「市民参加による生活重視の街づくり」ストーリー

サマリー（概要）

・施設内容の見直しや機能の絞り込みが行われ、基盤整備も人の集まる地域を重点に、その整備費用を抑えた手法が選択されています。市民は市の状況を理解し、街づくりへの参加者が増えていきます。来訪者が目をみはるような、華やかな街とはいえませんが、施策の選択と集中により、この街に生活する市民にとっては、落ち着いた雰囲気を持つ私たちの街として、市民の生活文化そのものが、来訪者にとっても居心地の良い魅力的な街となりつつあります。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「社会情勢と市の現状」「市民の理解・協力・参加」「落ち着きいた暮らしやすい街」

平成23年ごろ

・Ｘ地区に住むAさん（39歳　主婦　夫と二人暮らし）は、お城周辺の歴史的な風情や緑豊かな街に魅力を感じていましたが、最近、近所の小売店はシャッターが下り、駐車場が目立ち、昼間というのに小田原駅周辺の一部を除くと以前に比べ人通りの少ない状況が気になっていました。

・Aさんの夫（45歳）は、長年、市内にある工場に勤めていましたが、経済情勢の影響から工場の統廃合が行われ、今では東京に電車通勤しています。朝早くから電車に揺られて通うのは大変で、時々、会社の近くに越したいようなことも言っています。

・Aさんの母親（65歳　夫と二人暮らし）は、市内の郊外に住んでいます。今週も母から電話がありました。「また、買い物を頼みたいのよ。」母は週末になると、車で郊外の大型店に行く私に、数日分の食料品の買い物を頼み、帰りに母の住まいに届けることが休日の日課となっていました。

・Aさんは、あまり外出しなくなった母のことを心配していました。以前、母に「たまには散歩がてら買い物にでも出かけたら。」と話したことがありましたが、「この歳になると、車が通る狭い道を歩くのが怖いのよ・・・」と言われ、それ以来、母に外出を勧めることはありませんでした。

・ある日、大学時代からの親友であるBさん（関西在住）が訪ねて来ました。久しぶりに小田原駅を降りたBさんは、完成した駅ビルや改修された駅前広場を見て、華やかになったなと思いました。しかし、駅から遠ざかるにつれて、Bさんは少し淋しさを感じるようになりました。

・二の丸には完成した馬出門が、その雄姿を見せていましたが、観光客は出発の時間なのか天守閣から足早に藤棚駐車場のバスへと向かっていました。「あの人たちは、馬出門や銅門をゆっくり見物して、街の良さを感じてくれたのかしら。」とBさんは思いました。

・Aさんの自宅に着き、しばらくすると、Bさんが「駅前や城址の整備など、少しずつ新しいものが完成しているけれど、昔に比べると歩いている人は少ない感じがするわね。」と話し始めました。Aさんは、普段から感じていることを久しぶりに会った友人に言われ、観光客もみんな同じ様に感じているのかな・・・などと悲しく思いました。「地下街や子供の頃に連れて行ってもらったデパートが閉店したのよ。でも、地下街は間もなく再開されるようで、お城通りの再開発や三の丸地区の市民ホール計画も進められているから、徒歩圏にいろいろな施設ができると人の流れも変わって、少しは街も活気づくと思うわ。私も機会があれば、街づくりに参加したいと思っているの。」と答えました。

・翌日の夕方、Bさんは「次に来るときが楽しみね。」と伝えて帰路につきました。

平成28年ごろ

- 地下街では、地場産の新鮮な食品を並べたお店もオープンしています。Aさんも、時々買い物をして母に届けていますが、母は相変わらず外出を避けています。
- 小田原のなりわい文化や観光など情報発信の場も併設され、市民や来訪者が便利に利用し、徐々に街中に活気が出てきたような気がします。Aさんも、買い物帰りに立ち寄り、小田原の最新情報を得ています。
- お城通り地区は、お城側に駐車場が整備され、多くの方々に利用されています。また、お城通り沿いは無電柱化により緑豊かな街路樹が並び、駅寄りに設置された広場は、訪れる人に憩いと安らぎを与えています。
- 市民ホールは、必要な施設や機能を絞込み完成しました。広報紙によると、施設構成や機能の絞り込みには、市民を交えた検討会が設置され、議論が重ねられたようで、社会情勢や市の現状などが検討会に理解され、市民には愛されるホールとなっています。
- 市民ホールを含む小田原城の周辺地区は、歴史まちづくり法の重点区域にも位置付けられ、市民会館跡地の整備が進められています。地域住民の中にも街づくりに協力する人が増えており、今後の展開が期待されます。
- 地域を結ぶ幹線道路は整備が進み、中里地域の大型店は、休日の賑わいは変わりませんが、各社独自の販売戦略を展開しており、店の特色が明らかになってきた感じを受けます。
- 夫の勤めていた工場跡地は、販売戸数を絞りながら順次宅地を分譲していますが、全ての宅地化は難しい様子です。
- 夫は、未だに引越しを悩んでいましたが、私が説得して、もう少し頑張ってもらっています。身体を心配していた両親は、郊外の自宅を売り、私たち夫婦と一緒に暮らすことになりました。

平成34年ごろ

- 地下街の地場産のお店は健康ブームも手伝い、頑張って営業しています。また、お城通り地区には、商業・業務施設が完成したことで、賑わいも出て駅周辺の活性化に大きく役立っているようです。
- 中里地域の大型店は、お客さんの数は増えていないようですが、各店の特色を持たせた営業展開により、休日の賑わいを保っています。Aさんは、日用品などは出来るだけ駅前で買い物するように努めていますが、週末に便利な大型店での買い物は続いています。
- 小田原城址とその周辺地区は、南曲輪が整備されました。史跡の整備が進み、以前に比べて観光客が少し増えたように感じますが、散歩する市民の姿をよく見かけます。母も体調の良い日には城址公園に出かけています。地域の住民も自分の街として捉え、街づくりへの積極的な取組みが見られるようになってきました。
- Aさんも、市の新総合計画の策定に参加していますが、みなさんが各々の考えを良く聴いた上で、自分の事として街の方向を話し合い、次第に仲間意識が膨らんできています。
- 市民ホールは、発表の場として多くの市民に利用されています。
- 都市基盤の整備は、民家の集合する地区に重点が置かれ、地区の状況に応じた整備手法が取られています。かつて両親が住んでいた地区周辺の道路は、カラー舗装による歩車道の識別や、住民の協力により交差点の隅きりが確保され、カーブミラーが設置されるなどの安全対策が講じられていました。
- 最近、Aさんは、決して華やかではありませんが、背伸びをしない街づくりに私たちが協力して、愛着の持てる街がつくられていくのも悪くないなと思っています。都心へ越していく人もいますが、新しく越して来られる人もおり、私たち家族はというと、夫に電車通勤で頑張ってもらっています。夫は「小田原に着くとほっとするよ。この街を守るために何かできることはないかな・・・」と言ってくれます。
- 少子・高齢社会に拍車がかかった今、手立ても無く衰退していく街が目につく中、私の住む町おだわらは、居住者も来訪者も大きく増えたとは言えませんが、他都市にない市民の参加を得て、どこか落ち着いた暮らしやすい雰囲気を持つ街として頑張っています。

25　快適で魅力ある生活空間づくり（住環境）

概要

作成者：都市政策課

シナリオのタイトル：人口減少社会における街なかと郊外の住環境の行方
－コンパクトシティの実現－

サマリー（概要）

・少子高齢化、人口減少社会を迎え、本市でも人口の減少が推計されています。街なかでは空き家が増え、治安環境に影響がでてきました。労働人口の減少により税収が減少する中で、財政破綻を危惧した市は、市街化区域縮小による都市経営コストの削減案を住民に提起し、これが受け入れられました。

・街なか居住推進策や中心市街地活性化策により、日常生活に必要な施設が集約し、車なしでも生活に不自由のない街なかでは、居住人口が増え、商業も活性化されました。また、市の予算の選択と集中が可能となったことから、郊外の新たな幹線道路が整備されバス路線も充実し、日常生活に不便を感じることなく生活できるようになりました。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「人口減少社会」「少子高齢化」「道路・公園・下水道など基盤施設の整備」「公共事業の推進」

「バリアフリー整備」「地域自治・コミュニティ」「中心市街地活性化」「コンパクトシティ」「街なか居住」

「市街化区域の縮小」「都市機能の拡散と都市経営コスト」「CO2 削減」

平成23年ごろ

・夕食を済ませた本町のAさんは火事だとの声に外に出てみました。すると近所の空き家が火事で、折りしもの強風にあおられ盛んに火の粉を舞い上げています。「すわ一大事」と驚き、家族を避難させているところへ消防車が到着し、隣家の壁が少し焦げましたが、幸いなことに類焼することもなく鎮火したのでほっとしました。

・火元の家は長い間、空き家となっていたところに浮浪者が住み着き、隣近所の人たちの間では、やがて今度のようなことが起きなければいいなと、日ごろ話していたことが現実となってしまいました。

・後日、Aさんが近所の人から聞いた話では、空き家の持ち主は前住民の子供で、別に住居を構えているので、親が亡くなったときに家を取り壊し更地にすることも検討したそうですが、固定資産税が高額になることから、空き家とすることに決めたそうです。Aさんもこの話を聞いたときから気になり、あらためて付近を見回して見ると年々空き家や駐車場が増えていることに気づきました。既にわが国は人口減少を迎えていることはいろいろな報道等により承知していました。それが実生活にどのような影響があるのか関心が持てませんでしたが、今回の火事で人口減少が安全の喪失という住環境に大きな影響を与えることに気付きました。

・Bさんは奥さんと小学生二人の四人家族です。今までは鉄道駅まで徒歩 10 分程度のアパートに住んでいましたが、来年上の子が中学生になることから、以前から家族で相談していた一戸建てを建築することになりました。そこで生活の便利さや、敷地の広さなどをいろいろと検討した結果、奥さんも自動車運転免許を持っていることから市街化調整区域の開発許可制度を利用して建築することに決めました。

・居住してみると、通勤や通学時間が増え、買い物や通勤になど、日常生活に車の利用が増えたことは感じていますが、休日には庭いじりに熱中する新たな趣味もでき、快適な生活を送っています。

平成28年ごろ

・小田原市の財政は、少子高齢化社会を迎え扶助費などの義務的経費の支出が伸び続ける一方で、長引く不

況下で税収は漸減傾向にあります。そこで、今後の街づくりをどのように行っていくかの課題に対し、市街地の縮小を前提とした予算の選択と集中に関する考え方を広報に掲載しました。

・その主なものは中心市街地活性化とコンパクトシティの実現、街づくりの最も基本となる道路・公園・下水道の整備方針でした。最も予算規模の多い下水道に関して、市街化区域全域を整備するには、あと20年ほどの期間と膨大な費用を要すること、仮に市街化区域全域の整備を行ったとしても、その時点では人口減少により市街地のスプロール化が進み、多くの下水道施設が無駄となる可能性が大きいことから、基本的に公共下水道の整備を終了し、今後は合併処理浄化槽を行政が整備するというものでした。

・そのために市街化区域を縮小することが必要とされました。市街地として今後も維持していくエリアは公共下水道が整備された区域を基本とし、それ以外のエリアは市街化調整区域に逆線引きするというものです。さらに、道路については、都市計画道路の100％完成を目指し整備を行い、新たなバス路線の設置をバス事業者にお願いし市民の足を確保するというものでした。

・説明会に出席したAさんが空き家のことについて質問したところ、市街地で不足している公園を確保するため、空き家の持ち主と交渉し固定資産税の低減措置を行い、借地して公園を設置する方針が示されました。また、郊外での生活困窮者に対し街なかの空き家への住み替えを促す斡旋策を推進するとの方針が示されました。

・Bさんが出席した説明会では出席者から多くの質問がでました。

・まず、人口の減少が続く市街化調整区域でのコミュニティ維持についてです。市から地区計画制度を活用して人口の維持を図る方針が示されました。ただし、持続可能な街づくりのため、既存集落の中から鉄道駅やバス路線からの距離、地域の意向などを考慮し地区計画の区域を決めるというものです。これに対し住民の意向ではままならないことから不満が続出しましたが、不適当な地区の選定では一時しのぎの策で終わってしまうこと、やがて個人の負担も増え持続可能とはならないとの市の考えを受け入れることにしました。

・また、市街化調整区域では、なぜ合併処理浄化槽を市で設置しないのかとの質問もありました。これに対し、市街化区域では都市計画税を徴収していること、下水道整備の方針転換は行政の都合であることから、市が設置し管理を行う合併処理浄化槽は、逆線引きで市街化調整区域となる区域に限るというものでした。

・後日、説明会を開催した結果が、広報に掲載されました。それは、市民から多くの意見が出されたが、逆線引きを含む市の方針は、これからの行政運営の基本として市民の理解が得られた、との内容でした。

平成34年ごろ

・Aさんは身近に借地公園ができ、空き家への新たな住民も増え、公園で遊ぶ子供の声が聞こえ街に賑わいが戻りました。自治会の行事も時折開催され、身近な住環境を話し合う機会も増えて、各戸が環境の一員であるとの認識も醸し出され、大規模なマンションを制限するなどの地区計画を決定することができました。

・中心市街地活性化計画も軌道に乗り、街なかに居住する人も増え、商店も増えてきています。城址公園の整備が進み、お鐘の台の整備にも着手し一部が整備されたことから、訪れる人も増え商業も活性化され新たな雇用の場も生まれています。

・Aさんは日常の買い物も郊外店に行く回数が減り、街なかで食事がてら買い物をする回数も増えてきています。八百屋を経営している友人も、最近近隣に住むお客が増え、珍しい柑橘類を買い求める来訪者も多く経営も向上してきました。息子さんも商売を継ぐ気になり喜んでいます。歯車が良い方向に回り始め、ますます街の魅力が高まってきていることを実感しています。

・子供たちも独立し奥さんと二人暮らしになったBさん、昨年発症した脳疾患により半年の入院生活を終え帰宅しましたが、後遺症による半身麻痺が残り、身の回りのことは一人で出来ますが、車の運転が出来なくなってしまいました。しかし、幹線道路が整備され渋滞が大幅に減少したことから、バス路線も増え、幸い自宅近くにバス停が新設されたことから、中心市街地まで 30 分かからずに行けるようになりました。中心市街地では医療も買い物もまとめて済ますことができるので、日常生活にそれほどの不便を感じることなく生活できています。

26　景観形成の促進

概要

作成：まちづくり景観課

シナリオのタイトル：地域に根ざした景観まちづくり

サマリー（概要）

・景観まちづくりの進め方は、景観に取り組む意義や目的、その広がりや単位（景域）、構成要素が都市や地域によって異なり、様々なアプローチが考えられる。

・ここでは、三つの景観まちづくりを例に同時進行的にストーリー展開することとした。

・一つは、地域の歴史的資源の活用を背景にしたまちづくりの取り組みを、二つには、小田原城址に近接する商店街をモデルとしたまちづくりの取り組みを、三つには、郊外の新興住宅地の自然とのふれあいを通したまちづくりの取り組みを、それぞれ行政の関わりも交えストーリー化した。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「歴史まちづくり法」「地域の資産」「城下町」「地域主体のまちづくり」「まちなみ」「景観学習」「まちの賑わい」

「現風景」「街づくりルール」「意識の向上」「総合力」

平成23年ごろ

・小田原の郊外に住むYさんは昨年定年を迎え、今は子供も独立し奥さんと二人暮しだ。

・Yさんの住む町内には、明治から昭和初期にかけて建てられたと思われる建物が何軒か残っており、少し足を伸ばすと「別邸建築」と呼ばれている歴史の感じられる建物などが転々とあり、庭の緑とあいまって落ち着きと風格のある景色を醸し出している。

・Yさんの隣家Mさんのお宅も代々続く商家であったが、今は店を閉めている。大きなお屋敷は大正初期に建てられたもので、その威風堂々とした佇まいは見るものの心を引き付ける。

・しかし、Mさんの話だと、屋敷の維持管理も大変で建替えようかと思っているが、今の建物は我が家の歴史そのもので愛着もあり、とても悩んでいるとのことだった。

・市では昨年「歴史まちづくり法」に基づく計画の認定を受け、こういった歴史的たたずまいを後世に継承していこうと、様々な事業を計画しており、Yさんの地元でもMさんのようなお宅を地域の資産として何とか残すことが出来ないか話がでていた。

・正月に兄弟や娘達が集まった時、妹の嫁ぎ先で、小田原城址から徒歩5、6分程度の所にある北条商店街で土産屋を営んでいるBさんがこんな話をしていた。

・ある日Bさんが仕事をしていると、観光客らしい若い女性同士が「小田原って城下町だと思っていたけど、お城を一歩出ると普通な感じよね。だいたい写真に撮りたいと思わないもの。」と話しているのを耳にした。

・Bさんも、確かにお城はあってもこのあたりは城下町の印象は薄いし、どこといった特徴もなく、風情もほとんど感じられないと思っていたそうだ。

・そんな時、市が様々な地区で「地域主体のまちづくり」に関する説明会を実施していたので、Bさんは、商店街の仲間二人を誘い出席してみた。

・帰り道、Bさんは、「これから店が生き残り発展していくには他の商店街との差別化を図らないといけないよな。うちの商店街はお城の近くだし城下町の雰囲気が出せたらいいんじゃないか。」と提案したが、仲間の二人には店のイメージとお城は合わないと反対されてしまった。

・やはりやっている業種によって店の外観も方向性が違うようで、まちなみを整えるのは至難の業だと感じたと話していた。

・その晩、皆が帰った後お茶を飲みながらくつろいでいると、奥さんが、娘がこんなことを話していたのよとしゃべり始めた。

・Yさんの娘さんは、嫁いで今は小田原郊外の田園地帯に面した新興住宅地に住んでいる。

・孫のK子が、学校の総合学習の一環で行った「景観学習」で、とてもきれいなお庭がある通りを見つけ、もう一度見たいとせがまれて一緒に行ったら、手入れの行届いたお庭には季節の花々が咲き誇り、生垣や樹木が建物と一体に溶け合っていて、きれいなまちなみにとても感銘を受けたそうである。

・もともと草花の好きな娘は、俄然、ガーデニングの虜になり、自分もやってみようかなと夫に相談したところ、市の施策に「花と緑と水の環境整備事業」という、庭先緑化への支援が受けられる事業が広報に載っていたと聞き、市に問い合わせてみることにしたらしい。

・また、帰り道に、家の近くで田植えをしているおじいさんを見かけ、孫のK子が挨拶をしたら、「この辺りでも跡継ぎがいなくて田んぼをやめてしまう家が出て来ている」と寂しそうに話していたので、「おじいちゃん、元気出して！K子応援しているからねぇ。」と伝えてきたそうだ。

・そんな話を聞いて、Yさんはとてもほほえましく感じた。

平成28年ごろ

・Yさんが好きな別邸建築のいくつかは、「歴史的風致形成建造物」の指定を受け補修が行われ、従前どおり店舗として営業を続けていたり、地域の歴史を紹介する資料館や体験施設、休憩所として利活用され、庭も開放されている。

・最近では、観光客の姿を目にすることも多くなった。また、学校の景観学習や歴史学習の場としても活用されていることも手伝ってか、人の流れも増え、まちに活気が戻ってきているように感じる。

・北条商店街の近くでは、小田原城の目の前に市民ホールがオープンし、城址周辺にはガイダンス施設や歴史公園などが整備され、行き交う観光客や市民も増えていた。

・Bさんはそういったお客さんを呼び込もうと2年前に思い切って土産屋の外観をリニューアルしてみた。城下町を意識した店構えがそれなりにお客さんの評判もよかった。

・しかし、商店街まで足を伸ばしてくれる観光客はまだ少なく、売上げもなかなか伸びず、隣りの香水屋さんは1年前に川東のショッピングモールに移転してしまった。

・Bさんは、個店での努力だけではもう限界を感じていた。商店街としてのイメージを高めるためにはやはり街全体を統一した雰囲気にすることが一番だと思い、商店街の会合でこのことを話した。みんなの反応はいまいちであったが、一様に危機感は持っていた。

・北条商店街では市の協力も得て月に1回勉強会を開催するようになり、次第にまちづくりに関心を持つようになっていった。

・市から派遣された「街づくりアドバイザー」から、大改造をしなくても、かなり店の雰囲気を変えることができる方法を教わり、Bさんは店先のディスプレイを工夫し、店先にスペースを作り、季節の花と樽植の木々を配置した。ついでに、お客さんの目線に合わせて、手作りの木製の小さな看板を置き、休憩できるようベンチも置いてみた。

・最初は、商品が歩道から遠のくので少々不安もあったが、通りを歩く人が店先の花に誘われるように近づいてきて、最近ではお城に向かう道を聞かれることも多くなり、時には世間話に興じることもあった。まちの賑わいは、こんなことから始まるのかもしれないと、Bさんは感じ始めていた。

・娘さんが、お隣さん達と始めたガーデニングも5年目を迎え、3軒が連携した庭は見事な春の花を咲かせ、樹木の新緑も一層の緑を深め、まちなみをやさしく包み込んでいた。

・また、娘さんたちが育てた花の種は、ガーデニングを始める多くの市民へと受け継がれ、その輪は大きな広がりを見せていた。

・そんなある日、小田原市の広報誌の中に「ガーデニング大会開催のご案内」という記事を見つけた。さっそく娘さんたちは大会に参加を決めるとともに、最近娘さんたちの影響か、ガーデニングする家が増えてきたことから、ご近所も巻き込んだ「ストリートガーデニング」のアイデアに取り組み始めた。

・市でも、以前娘さんがK子さんと見に行ったような魅力的なお庭を、所有者の協力の下、一般に開放する「オープンガーデン」として広く紹介を始めたところ、市内外から多くの人が見学に来るようになり、四季折々の表情を楽しんでいるそうだ。

・K子さんが気にかけていた田んぼでは、学校給食などに地元産のお米が使われ、消費も増えてきたこともあり、田植えを息子さんが手伝ってくれるようになったと聞き、自分の事のように喜んでいた。

・K子さんは、小さい時から、ここから見るきれいな田んぼ越しの富士山が大好きだった。

・当分この“現風景”が眺められることになり、とても喜んでいる。

平成34年ごろ

・Yさんの町内では、高齢で庭木の手入れができないお宅に対し、地域の人が実費だけのボランティアでお手伝いをしている。

・お隣りのMさんの家も当時の外観はそのままに補修され、もともとあった1階の店舗では、地元のおばちゃん達が管理・運営する地で取れた野菜を使った漬物などを扱うお店になり、最近増えてきた観光客やまち歩きをする人達にも人気のスポットになっている。

・いくつか昔ながらの建物は消えてしまったが、残った建物は観光客の休憩所を兼ねた地区の集会所や地元の若者達が経営する喫茶店などとして今も利用されている。

・建物の維持管理は、地元と建築や庭園の専門家などからなるNPO法人「おだわら街づくり工房」の協力のもと行っている。

・市でも、観光客やまち歩きの人達のために散策路や案内板の整備を進めている。

・Yさんの町内は、徐々にではあるが、石塀やフェンスに囲まれて殺風景だった沿道に緑や花が植えられ、路地裏の水路も往時の用水の姿に生まれ変わった。

・北条商店街では自分たちの「街づくりルール」を定め、まちなみの整備に取り組んでいる。

・市による小田原城址や三の丸周辺地区の歴史的な建造物の復元、整備が進むとともに北条商店街にも、少しずつ変化が出てきた。

・Bさんの隣にあった駐車場は、市と商店街が協議を重ね、自転車置き場が併設されたポケットパークに様変わりし、来訪者や買い物客にも好評だ。

・商店街の会合の席上で、商店会長さんからこんな言葉があった。「各自のお店が店先の雰囲気を作っていくことはとてもいいですね。私の店も、小田原漆器を扱っているので、和風の暖簾を店先に大きく出してみました。Bさんの言っていたとおり、最初は店の中が隠れてしまうので、とても不安でしたが、要らぬ心配でしたね。」

・商店会長の言葉を受けて、皆うなずいていた。

・最近では、店先を木々や花々だけでなく、自慢の一品をディスプレイするものも現れ、個々のお店の雰囲気は違うが、店先の空間の演出や庇の色調、看板の掲出の仕方などが統一されてきたこともあり、商店街のまちなみ全体は不思議と統一されたように感じられ、いい味を出し始めている。

・まちなみもさることながら、商店自体に活気が出始めたことでこの商店街が人の目に魅力的に映ることを加速させている。

・市のガーデニング大会も第7回目を迎え、年々参加者も増えてきた。

・そして6年目を迎えた娘さんたちの「ストリートガーデニング」の取り組みは、思わぬ効果を生み出していた。

・以前は通りにタバコの吸殻や紙くずなどが落ちていても、そのままであったものが、今では住民の景観に対する意識が向上し、美化活動にも貢献するなど、住んでいて気持ちの良い住宅地にしようと、皆の意識が変わってきた。

・娘さんの家の裏手にある田んぼでは今年も田植えの時期を迎え、彼方まで広がる田んぼに満々と水が満ち、植

えたばかりの苗と、その水面には逆さ富士が映し出されている。

- K子さんの現風景は健在だ。
- 彼女も今では農業大学の地域環境科学部の3回生になっていた。
- この間会ったときも、景観をテーマにした卒業論文を作成しようと思っていると言っていた。そして、こんなことも、「地域に根ざした景観ってなんだろう？きっとその地域に相応しいまちなみってあると思うの。そして、そのまちなみを変えて行くことで、そこに暮らしている人たちのまちへの愛着も増していくはずよ！景観って、その地域の総合力だと思うの！卒業したらそういうことにこれからの人生携わって行きたいの」と。

- 季節は春。風に乗って3年前から復活した「地域ゆかりの祭囃子」の音が流れてくる。Yさんの町内には今、花や緑、せせらぎ、風情ある建物などがあいまってかもし出すうるおいがある、そしてふっと一息つける景色がある。外では子供たちが元気に走り回る景色があり、近所の人達が楽しげに談笑する景色がある。まちづくりはまだまだ道半ばといったところであるが、元気になっていく地域が見えるような気がした。

27　安全で円滑な地域交通の充実

概要

作成：都市政策課、道路整備課

シナリオのタイトル：移動手段転換の意識改革（公共交通を中心とした交通体系）

サマリー（概要）

・安全で円滑な地域交通の構築には、道路を整備していくことはもちろんですが、家庭、学校、企業などにおいて、過度にクルマに依存しない「環境にやさしいまちづくり」の意識を高める取組みを進めることも重要です。「環境にやさしいまちづくり」の中には、クルマの利用を控え公共交通機関を利用することやエネルギー効率の高い都市を実現させることなどがあります。このことにより、公共交通機関の利用者増加が図られ、それがサービス水準の改善につながり、クルマを運転できない高齢者などの移動制約者の外出機会が増加しました。また、クルマ利用が軽減されることから交通混雑緩和にもつながりました。郊外部に暮らす高齢者に対しても地域住民と協働し、移動手段を考えて行くことにより高齢者にもやさしいまちづくりが進んでいます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「超高齢社会」「学校教育」「企業の取組み」「交通手段転換」「環境意識の改善・向上」

「地域住民主体の地域交通への取組み」「財源確保」「高齢者などの移動制約者」「コンパクトな市街地形成」

平成23年ごろ

・Aさん（38 歳、男、4 人家族）は、駅までバスで10分ぐらいの中心市街地の周辺部で暮らし、市内にある会社に勤める会社員で、今年、総務課の係長に昇格しました。会社までクルマで通勤していました。

・Aさんの長男は小学校 4 年生です。先日、社会の授業で市の職員から「環境にやさしいまちづくりについて」の話を聞きました。リサイクルについては今までもごみの出し方などを家族で話し合い実践していましたが、その授業では、環境にやさしいまちづくりの実現には、リサイクル以外にもクルマの利用を控え公共交通を利用することや、みんなが行きやすい場所に病院やスーパー・市役所窓口など普段の生活に必要な施設を整備することでエネルギー効率の高い都市が実現することが重要であることを学びました。

・長男から社会学習の話を聞いたAさんは、先日、市の職員が来社し、環境と健康をテーマにした「かしこいクルマの使い方プロジェクト」（エコ通勤）を推進してほしいと依頼があったことを思い出しました。その時の説明では、交通混雑の緩和や公共交通の活性化を目指して、通勤手段の転換を図る取組みを企業と協働で展開していきたい。そのために、社内で「わが社のモビリティ・マネジメント行動プラン」を作成しほしいというものでした。

・Aさんは妻や子供から、「最近ちょっと体重オーバーじゃない。メタボ予備軍だよ。」と言われていました。自分自身でも運動不足が続きメタボの危険があるなと感じていたことから、体にいいことが何かないかと考えていました。また、子供が熱心に社会学習の話をしたり、市から会社への働きかけもあることから、環境にやさしいことで何かできることはないかと考えたところ、今まで、毎日、クルマ通勤をしていたが、今後はできるだけ自転車で通勤しようと決意しました。

・妻からは、「子供に刺激されて、自転車通勤もいいけど、長続きしないと子供に三日坊主と言われるわよ。」と釘を刺されました。

・Bさん（63 歳、主婦、夫と 2 人暮らし）は、郊外（市街化調整区域）で暮らしています。

・Bさんは、公共交通を利用して買い物や病院通いをするためには、バスと電車を乗り継がなければならず、時間と費用がかかり不便を感じていました。特にここ数年で、バスの本数が激減したことからその思いは強く、数年前から控えていたクルマの運転を再開しようと考えていました。

・病院通いをしている隣のおばあさんも「バスの本数が少なくなるし、乗り降りも大変、銀行や支所、病院やスーパ

ーがまとまっていないので1度に用事が済まない。」と不満を漏らしていました。

- Bさんの夫は、定年後に自治会の役員を引き受けました。自治会では、数年前から「安全安心まちづくり事業」で市の職員と自治会関係者が一緒に地区を点検し、道路整備や補修が必要な個所を調査し、改善を図ってきました。
- 一方、Bさんは、鉄道やバスの運行本数が減っていることが気がかりで、自治会役員会で相談したところ、役員全員が同じ危機感をもっていて、「自分たちの足は自分たちで守る。」を合言葉に、自治会で対策の検討を始めることが決まりました。
- 市の広報誌に「穴部国府津線の開通を機に市内の交通流動が大きく変化することから、バス事業者や住民とともに市内バス路線再編を含め公共交通を中心とした交通体系づくりについて検討会が設置され、当面は、東西公共交通軸の構築を目指し、小田急線沿線と郊外型大型商業施設や国府津駅方面を結ぶバス路線の新設を検討している。」と掲載されていました。

- Bさんの娘のCさん（34 歳、会社勤め、夫と子供と 3 人暮らし）は、小田原市内（中心市街地）のマンションで暮らしています。
- Cさんも夫も会社まで電車通勤なので駅に近く便利ですが、買い物については周りの店だけでは必要なものが揃わないことや、ベビーカーを押して歩きにくいことから、休日には家族揃って郊外の大型商業施設に買い物に出かけていました。
- 大型店周辺は依然として道路が渋滞していることから、夫はいつも、「近くでのんびり子供たちと公園で遊んだり、歩いて買い物ができればいいね。」と言っています。

平成28年ごろ

- 自転車通勤が5年目になるAさんの会社では、「過度に自動車に頼る状態」から、「公共交通や徒歩などを含めた多様な交通手段を適度に（＝かしこく）利用する状態」へ少しずつ変えていく取り組みである「モビリティ・マネジメント」を推進していました。
- 通勤する従業員の公共交通への転換を促すことを目的としたこの取り組みは、「公共交通を利用しましょう。」と声高に叫ぶのではなく、「環境や健康などに配慮した交通行動を呼びかけていくコミュニケーション」に重点をおくもので、これらの活動の成果があってか、Aさんの部下のDさんが真新しい自転車で通勤している姿をみるようになりました。
- Dさんは、「自転車ブームもあって自転車通勤を始めたけど、まだまだ自転車で通勤するには、自転車道や歩道が整備されていないから、クルマや歩行者と接触しそうになることが多く危ないんですよ。」と言っています。

- Bさんは、バス便が減少したことで外出が不便になったことから、不安を抱えながらもクルマの運転を再開していましたが、不安が実現のものになってしまい、2年前に自動車事故を起こしました。それ以後クルマの運転が怖くなり、バス料金割引や飲食料金割引などがある「運転免許自主返納支援制度」を利用し運転免許証を返納しようか、でも運転しないと普段の買い物にも不便だし、といろいろ悩んで夫に相談しました。
- 夫からは「いま、自治会で、市の支援を受けて、駅までいけるコミュニティタクシーを走らせようとがんばっているからそれまでもう少し待ってみてはどうか」と言われました。
- このコミュニティタクシーは、利用者が減少し路線バスが減便されていることから、地元住民が主体となり運行させようとするもので、日常品がそろうスーパーや最寄の駅まで運行されるとのことでした。また、今までバスが入れなかった駅についてはアクセス道路を拡幅するための用地買収が関係者の協力で進んでいるとのことでした。
- この話を聞いたBさんは、「新たな環境を背景とし、交通部門での環境対策に積極的に取り組む自治体への交通関係の財源が配分されたことで、幹線道路や駅へのアクセス道路、また、安全に歩ける歩行空間や自転車で移動しやすい道路づくりを重点的に行っている。」と先月の広報誌に掲載されていたことを思い出していました。

- Cさんは、子供が小学生に進学したことから、夫とクルマを買い替えようかと相談していました。
- その話を聞いていた子供がどこから聞いてきたのか、「うちは駅の近くに住んでいて毎日クルマを使うわけじゃないからカーシェアリングがいいよ。」と言い始めました。思ってもみないことを子供が言い始めたのでさっそくネッ

トで調べてみると、カーシェアリングとは1台の自動車を複数の会員が共同で利用する自動車の新しい利用形態とのことで、必要な時だけ車を使い料金はその分だけ、面倒な洗車やメンテナンスが要らないなど多くのメリットがありました。

・子供の提案でカーシェアリングを利用することに決めたCさんですが、毎月の駐車場費用や年間の自動車税やガソリン代も要らないなど、非常に経済的で家計にやさしいシステムと感じました。また、子供が環境に対する好奇心が旺盛なことにはびっくりさせられました。

平成34年ごろ

・Aさんは、大学生になった長男と高校生の長女と一緒に毎朝自転車で出勤しています。長男との社会学習の会話から始めた自転車通勤も 10 年が経ち、「正直言ってこんなに長い期間続くとは思ってもいなかった。おなか周りもずいぶんとすっきりしたし、メタボの心配も無くなったわね」と妻に言われました。道路も10年前に比べ、徐々にではあるが自転車歩行者道が整備され、カラー舗装による歩行者と自転車の通行帯の分離が進み、利用者のマナーも向上したことから、ずいぶんと自転車で走りやすくなり、通勤時間も短縮されました。

・会社では総務課長であるAさんは、今まで以上に「環境にやさしい取組み・かしこいクルマの使い方」を推進させるため、市と協力し隣接する複数の企業が参加する協議会を設立し、共同で通勤手段の転換を図る取組みを実施しました。成果は上々で、以前から活動を進めていたこともあり、多数の従業員が公共交通利用や自転車通勤に理解を示してくれました。今後も活動を継続することでエコ通勤者を少しずつ増やし、クルマに依存しない健康と環境にやさしい社会をつくれればよいと感じていました。

・バス通勤している多くの部下からは、「朝の渋滞が少なくなり、バスが時間通りに来るようになった。利用しやすくなった。」との声が聞こえ始めました。諸事情からクルマ通勤している他の従業員も、「新しい道路ができて、車の量も減ったから朝の渋滞が減って、イライラから開放された。」と喜んでいます。

・酒匂川流域でエコ通勤が活発になったことが話題となり、朝のテレビニュースで「チャリ勤族」の特集が組まれ放映されました。Aさんも、「チャリ勤族」が10年以上になることからインタビューを受けることになり、「長男との社会学習の会話から、エコと健康管理をかねて自転車通勤を始めた。健康には自信があります。」と答えました。

・Bさんは、娘のCさんに「コミュニティタクシーが運行を始めたので、運転免許証を返納することにした。」と電話しました。クルマを使わなくても日常の移動ができるようになりました。最寄りの駅へ通じる道路も広くなり歩きやすくなり、また、スーパーの近くで市の行政サービスが受けられるようになるなど、一度で日常の用事を済ませることができるようになりました。コミュニティタクシーの運行に頑張ってくれた夫をはじめ地域住民の皆さんに感謝するBさんでした。

・コミュニティタクシーと電車を利用し、中心市街地で暮らす孫に会いにいったBさん夫妻は、時間に余裕があったので久しぶりにCさん家族と一緒に街中を散策しました。みんなで歩く街中は、なぜかずいぶん空が広く見え、緑も多くなっていました。娘のCさんは、「歩道が広くなって電柱もなくなり、木も植えたからだよ。」と教えてくれました。孫は「ぼくのまちは、道路も電車もバスもみんなバリアフリー化されているから、おじいちゃんもおばあちゃんもいくつになっても安心して僕の家まで遊びに来られるね。」と言いました。

28　安定した水供給と適正な下水処理（下水道）

概要

作成：下水道総務課、下水道整備課

シナリオのタイトル：「適正な下水処理」

サマリー（概要）

・小田原市では、平成○○年○月から下水道使用料を平均○○．○○％値上げして、1年が経過した。下水道使用料は、受益と負担の原則に基づき、適正な原価を基礎として決定されるが、値上げの要因として、支出（コスト）については、寿町終末処理場の建設を始め、広範な市域において積極的に、かつ集中的に汚水管渠の整備を実施したことに伴い、下水道事業特別会計の市債残高が、依然として高い水準にあること、その結果、毎年相当額の元利償還金を負担していかなければならないことが大きく、一方収入については、今後使用水量の減少傾向が予見され、下水道使用料の増加は見込めないと予想されることがあげられる。しかし、それでも下水道使用料だけでは使用料対象経費を100％回収していないという課題が残る。今後も、未普及地域の解消だけでなく、当初に敷設された下水管の老朽化対策や、地震対策、雨水を防除する浸水対策を促進する必要があり、借入金の返済だけではなく、設備投資を新たに行う必要もある。

・その後も、下水道使用料の値上げが行われたが、下水道事業は、整備中心の事業から、維持管理中心の事業へ展開されていった。また、市債残高も減少し、下水道の運営も安定したこともあり、適正な下水処理が進められたことから、市内を流れる河川の水質は格段に向上していった。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「下水道使用料の値上げ」「下水道特別会計・収支のバランス」「独立採算」「受益と負担の原則」

「適正な原価」「高い水準にある市債残高」「経営基盤の強化及び経営健全化の取組み」

「下水道普及の遅れ」「下水管の老朽化対策」「地震対策」「浸水対策」「寿町終末処理場の廃止」

「市設置型合併処理浄化槽整備事業」「公共水域への環境負荷軽減」

「整備中心の事業から、維持管理中心の事業へ」「未接続世帯の解消」

平成23年ごろ

・小田原市では、平成○○年○月から下水道使用料を平均○○．○○％値上げして、1年が経過した。今年度に入って、更に、水道使用料も値上げの噂を聞いた市民のAさんは、デフレが進み、収入が減少するこの時期にどうして値上げをするのか腑に落ちなかった。よくよく考えると、水道については蛇口から出る水しか見たことがないし、下水道については使った後の水がどのように処理されるのか考えてみたこともなかった。そこで少し、上下水道の勉強をしようと考えた。

・早速、市役所に行き、下水道使用料の値上げについて担当課の職員にその経過を聞いてみた。いわゆる、使用料改定の経過については、平成21年度に行われた市の「下水道運営審議会」の資料が分かりやすいとのことで説明を受けた。下水道の仕組みである、汚水処理の内容や下水道事業の会計について、長時間にわたって一通り説明を受けたが、特に難しかったのは、下水道特別会計の仕組みであった。下水道使用料も、この会計での収支のバランスを考慮して決められているらしい。

・そこで、下水道に関する資料を入手し、ひとまず、家に帰って読み込むことにした。公共下水道は、行政が計画的に整備すべきものとされているが、市民生活や産業活動にとって最も重要な社会資本でもあるらしい。さらに、下水道事業は、市の一般会計とは異なり、特別会計を設置し、一般会計で負担すべき経費を除いて独立採算により運営されるべきものであり、その根幹となる下水道使用料は、受益と負担の原則に基づき、適正な原価を基礎として決定されるべきとされていた。

・肝心の下水道使用料がどうして値上げを行ったのか、そもそも下水道使用料が何に使われているかをみると、

どうやら生活排水をきれいにするためにかかる維持管理の費用にあてられているらしい。要は、提供するサービスの効用に見合った価格を受け入れるべき、ということなのだろう。下水道使用料は会計での収支のバランスを考慮して決められているのだから、値上げを行うからにはそれだけお金がかかる理由があるはずだ。

・そこで再び市役所の職員に、下水道の運営にお金がかかり、値上げを行う理由を尋ねてみた。

・小田原市の公共下水道は、初期投資となる寿町終末処理場の建設を始め、広範な市域において積極的に、かつ集中的に汚水管渠の整備を実施したことに伴い、下水道事業特別会計の市債残高は、559億円（平成20年度末）と依然として高い水準にあり、毎年、相当額の元利償還金を負担していかなければならない。また一般会計から繰入金で補てんを受けて収支の均衡を保持している。

・一方、収入については、今後予見される使用水量の減少傾向から、下水道使用料の増加は見込めないものと予想される。

・下水道事業は、管理運営に係る経費のうち私費として負担すべき使用料対象経費を下水道使用料収入で賄う独立採算制が原則であり、そのため下水道使用料回収率は100パーセントとなることが望ましい。また、生活環境の向上と水環境を保全するために非常に重要な役割を担っており、中長期的な事業運営を視野に入れた、安定的な経営を図ることがきわめて重要である。そこで、経営基盤の強化及び経営健全化の取組みが求められているため、使用料の値上げに踏み切ったが、それでも下水道使用料だけでは使用料対象経費を100％回収していないとのことであった。

・それを聞き、私はサービスの価格で、原価が回収されていないという点が問題だと思った。私の会社では、多くの製品を世に送り出し、消費者の理解を得て、まあまあの成績を保っている、決して、儲かっているわけではないが、会社は何とか資金ショートもせず、操業している。しかし、市の資料をみると、本来の下水道使用料で回収すべき経費の約9割しか回収していない、足りない分は、一般会計、つまり我々の税金から補填しているというのだ。私から言えば、何で、100％にしないのか、全く理解に苦しむ、会社で言えば、資金ショートで倒産する、安易に他の資金調達をするは危ないのではないか、と思う。

・それと、もっと問題なのは、借金、役所では、市債というらしいが、その残高が平成20年度末で約559億円もあるというのだ。今年度の予算を見ても、総額88億円のうち、約50億円、半分以上が借入金の返済に使われているわけだ。まあ、毎年減らしているということだけど、何とも信じがたい。しかも、小田原市の下水道人口普及率は80％程度で、神奈川県平均の95％と比べると下水道の普及が大幅に遅れているため、今後も下水道の整備に相当の費用が必要である。そして、小田原市の場合、当初に敷設された下水管の老朽化対策も行わなければならないということだ。下水管に損傷があった場合、補修を行わないと下水道機能の低下や道路陥没を招く恐れがあり、市民生活や社会活動への影響が懸念される。このほかにも、地震対策として、大規模な地震が発生した場合においても下水道が有する最低限の機能が確保できるような対策も行う必要があるという。

・さらに、下水道のもうひとつの役割として、雨水の防除があるのだが、近年、下水道の整備水準を超えるような集中豪雨が頻発する傾向にあり、浸水リスクが増大しているという。このため、浸水対策を促進する必要があるのだ。

・これをみると、借入金の返済だけですればよいのではなく、設備投資を新たに行う必要もあるのだ。下水道は普段はその仕組みなど「見えないブラックボックス」であったが、いったん「見えて」しまうと、安定的な経営を図るためには取り組むべき問題が多いことがわかった。

平成28年ごろ

・下水道経営の見直しが行われた結果、下水道使用料の改定がされた。

・私たちの負担は、増えたわけだが、一般会計からの繰入金は減るはずが、実際はなかなか減らないらしい。要因としては、計画上の使用料収入に達しないらしい。企業や我々市民の節水行動が影響しているという。環境負荷を減らすには、節水行動は的を得ているはずだが、かえって水処理を行う費用が確保できなくなってしまうらしい。また、老朽化した寿町終末処理場を廃止し、流域下水道で集約処理を図るための事業を進めているが、こちらも多額の費用とマンパワーが必要となるという。

・ある日Aさんは、友人宅を訪れた際、臭気がしたので、この匂いの原因は何かと友人に聞くと、この地域は市街化調整区域で下水道の整備が遅れており、合併処理浄化槽での排水処理を行っているが、近所の家庭では、浄化槽の維持管理が適切に行われていないため、臭いがする、というものだった。そこで、再度、市の下水道部に行き、下水道整備事業の基本的な考え方を聞いてみた。

・担当課の職員の話によれば、現在、市街化調整区域のある地域をモデル地区として設定し、市設置型合併処理浄化槽整備事業を実施している、とのことで、この地域では、浄化槽の維持管理は市で行っているため、臭

気の発生などの問題はないとのことだった。しかしながら、その費用が公共下水道に比べて割高になっているということである。

・下水道の使用料は、下水道の老朽化施設が年々増大し、その対策が必要なことや、人口減少や経済の縮小ゆえに使用料収入が減ることが課題である。

平成34年ごろ

・現在、下水道事業は、整備中心の事業から、維持管理中心の事業へ展開されている。老朽化した管渠も自走式テレビカメラなどによる調査によって効率的に改築・更新が行われている。今後は、地震時におけるライフラインの確保という大きな課題に対して、一定の対応をしているが、さらに危機管理対策をしないといけない。また、公共下水道の整備がされた地域でも、下水道に未接続世帯があり、この未接続世帯の解消ということに力を入れて事業を行っている、という説明であった。今後、ますます、企業経営としての努力を期待したいし、私達住民も行政との意見交換等をおこなって、一緒に美味しい水や綺麗な河川環境を作り上げていくことが重要と考える。

・そして、市内を流れる河川の水質は格段に向上し、市内の河川や農業用水路には、かつてのように蛍が生息するようになった。

・子供達も安心して水辺で遊んでおり、安定した水供給と適正な下水処理がされている小田原市は、全国から注目されて、行政関係者やNPO法人、企業等の視察のメッカになっている。豊かな水環境が全国的に知れ渡り、小田原に移り住む方が徐々に増えてきている。

28　安定した水供給と適正な下水道処理（水道）

概要

作成：営業課、給水課、工務課、水質管理課

シナリオのタイトル：安定した水供給

サマリー（概要）

・小田原に住むAさんは、子供が授業で行った浄水場の見学の話を聞き、AさんはC自治会の浄水場見学会を企画しました。水道局職員による平成17年の小峰送水管破損事故や実際の被災経験者の話、そして漏水による断水の体験から、水道の重要性及び施設の更新や耐震化の必要性を改めて意識しました。水道局は「おだわら水道ビジョン」に基づく事業計画・財政計画から水道料金の値上げを決断しました。Aさんは「次世代の人たちまで安定供給が続くのであれば」と理解を示しました。水道局は安定した水の供給を確保するため、老朽管の更新や施設の耐震化を図るため施設整備を進めました。平成35年、水道局は事業を計画的に推進したことから、基本理念である「いつまでも安心でおいしい水をお届けします」を実現し続けることができました。『小田原市の水道水は美味しく、災害時にも安定供給される。安心安全なまち小田原』の実現に向かうことになり、Aさんは『小田原に住んでいて良かったね』と家族で話しました。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「小峰送水管破損事故」「おだわら水道ビジョン」「耐震化や老朽施設の更新」「水道料金の値上げ」

「水環境や水質保全」「水質の向上」「浄水処理施設にかかる負担が軽減」「経営の健全化」「安心安全なまち」

「いつまでも安心でおいしい水をお届けします（おだわら水道ビジョン基本理念）」

平成23年ごろ

・平成22年、小田原市に住むAさんの子供B子ちゃんが通う学校では、社会の授業で、高田浄水場の見学を行いました。B子ちゃんは浄水場の見学で、取水から浄水処理、家の蛇口から水が出るまでの工程を知り、この日の夕食時間に家族にこのことを話しました。『酒匂川から水を取って、ゴミを取り除いて消毒をしてポンプで配水池に送って、地中に埋まっている水道管を通って蛇口から水が出るんだョ。』B子ちゃんの両親は『へぇー』と言いながら話を聞いていましたが、当たり前のように使っている水道水がどのような工程で蛇口まで送られてくるのか、水道局がどのような業務を行っているのか、詳しく知らないことに気が付きました。

・AさんはC自治会の役員をしていたので、B子ちゃんの話を聞いて、C自治会で浄水場の見学会を企画・提案しました。

・見学会では、現在、市内は神奈川県企業庁の給水区域と小田原市水道事業の給水区域に分かれていること。水道事業は独立採算制で、約25億円の水道料金収入により賄われ、その水道料金収入はここ数年の景気の低迷による企業のコスト削減や家庭の節水意識の高まりから、減少傾向であること。そして、水道水を作るための薬品代や配水池へ送水するための電気代が約1億9千万円かかっていて、水道料金収入の約7.6%を占めていること。水道管の総延長は約740kmで、直線にすると広島の尾道市にまで達すること。そして、いつ起こるか分からない大地震に対する備えである耐震化の推進状況（口径75㎜以上）は、市の耐震基準で約87%（国の耐震基準で約24%）となっているが、今後も計画的に施設の更新を行っていくことの必要性などの説明がありました。

・また、平成17年の小峰送水管破損事故についても説明がありました。当時、約7,000世帯が5日間断水し、県内の水道事業者の応援があったことなど、当時の様子がよく分かりました。

・C自治会には、数年前に発生したD大震災を経験されたEさんもいられたので、Aさんは、『C自治会の定期集会で、その経験談を話してほしい。』と、Eさんに頼みました。

・Eさんは、この話を快く引き受けて、定期集会で話しをしました。『震災でライフラインは大きな被害を受けました。

とにかく困ったのが水でした。ほぼ全域で断水し、完全に復旧するまでに1ヶ月以上かかりました。そして、断水によって消火栓から水が出ないため、震災で発生した火災を消火することができないため火災の被害も大きくなりました。飲料水はミネラルウォーターが全国から届けられました。しかし、洗濯や清掃などに使う雑用水がなかったので、近くを流れる川の水を使っていたところもあると聞きました。また、トイレの問題もあり、断水により水洗トイレが使えないため衛生状態が非常に悪い状態でありました。』

- Aさん他、定期集会に参加した人たちは、Eさんの話を聞き、生活に欠かすことのできない水道の重要性を改めて認識するとともに、見学会等で説明された耐震化や老朽施設の更新についての必要性を実感しました。
- 折りしも、Aさんは、自宅付近の道路から水があふれ、排水路に流れている水を見ました。道路に敷設されている配水管からの漏水であったため、復旧するまでの間、付近は一日断水となりました。Aさんはこのとき、毎日、何気なく使っている水道のありがたさと必要性を強く感じました。
- 水道局職員によると、漏水した配水管は昭和10年頃に敷設された管で、敷設から70年以上経っている管という話でした。また、市内にはこのような配水管が残っていて、早急に交換する必要があるという話でした。
- 水道局は平成21年2月、いつまでも安心でおいしい水をお届けするため、平成30年までの10年間の水道事業の運営に関する方向性及び施策推進の基本的な考え方を示す「おだわら水道ビジョン」を作成しました。
- その中で、基幹管路の劣化調査や大規模災害にも安定供給するため施設の耐震化を進めるとともに、水道施設の老朽化、劣化状況を調査し、今後10年間の耐震化・老朽施設の更新事業計画と事業の財源となる水道料金収入のシミュレーションを行い、財政計画を作成しました。
- 今後の事業費は約128億円にのぼり、事業の優先付けや、浄水場等運転管理など委託化による経費縮減など、効率的な事業運営を推進しても、耐震化・老朽施設の更新を行うための財源となる水道料金収入は使用量の減少とともに落ち込み、現行の料金体系では耐震化・老朽施設の更新を計画的に実施しながら健全経営を維持することが困難であるという結果になりました。
- 水道局では、改めて具体的な料金改定の検討を始めました。その後、水道料金の値上げを決断し、各施設の更新等事業計画と財政計画について、市民周知を図り、水道料金の値上げに対する利用者の理解を求めました。
- このお知らせを見たAさんは、驚きはしませんでした。見学会などから『料金が値上がりしても、いつ起こるか分からない大地震に備えた耐震化・老朽施設の更新を実施することができ、次世代の人たちまで安心安全な水が安定供給されるのであれば・・・。』と考えたからでした。

平成28年ごろ

- 時は半ば、話は変わり、休日、AさんはB子ちゃんと一緒にサイクリングに出かけました。酒匂川を下流から上流に上がっていきました。自転車に乗りながらAさんはB子ちゃんに『お父さんは子供の頃、川で釣りをしたり、川で泳いだりして遊んでいたんだよ。B子、メダカの学校を知っているかい？小田原にあるんだよ。』と話しをしました。するとB子ちゃんは自転車を止めて、酒匂川と反対側の小さな川を指差し『こんな川でも泳いだの？こんな川じゃメダカさんもかわいそう。』と言いました。指差す方向を見たAさんは驚きました。その小川はかなり汚れていました。そして、その水は酒匂川に流れ込んでいたので、さらに驚きました。その日の夕食の時、B子ちゃんは言いました『私たちが飲んでいる水道水は、さっきの小さい川の水から出来ているの。』Aさんは言葉につまってしまいました。
- B子ちゃん家族は、水道週間のPR記事などで、『森を大切にすることが、水源や水を大切にすることになる』ことを知り、休日には家族で森林保育のための植林や枝打ち、間伐に参加するようになりました。
- 酒匂川の水環境や水質保全に対する市民の関心の高まりや周辺流域市町も含めた下水道整備の推進により、酒匂川の水質は向上しました。
- 水道局の浄水場では浄水処理の過程で出るゴミが減り、そのゴミを処分するための費用が減りました。
- 導送水管の基幹管路や幹線管路の劣化調査を行うとともに、管路の更新については毎年 4,000m～5,000mを目標に行われました。
- 適切な浄水処理による安心安全な水の供給のため、高田浄水場の改修・更新を計画的に推進しました。
- 安全で安定した水の供給を図るため、水道管路における経年管の耐震化及び出水不良対策のための改良、配水効率を高める管網整備等を計画的に推進しました。
- 災害や事故の応急・復旧体制の強化に努め、応急・復旧資機材の充実を図り、災害や事故を想定した対策が常に採られることとなりました。

・民間委託化の推進により経営の合理化を進めるとともに、委託の結果を検証し、より効率的な委託となるよう業務の管理、監督を行いました。

・水道局は、これら「おだわら水道ビジョン」に掲げた、「安定供給に努める水道」「安心・安全の保持に努める水道」「環境保全に努める水道」「経営効率の向上に努める水道」という四つの基本方針に基づく施策を計画的に実施しました。

・その結果、基本理念である「いつまでも安心でおいしい水をお届けします」を実現し続けることができました。

・水道局では、平成 31 年度からの次期「おだわら水道ビジョン」を作成することになりました。更新計画と財政計画シミュレーションの見直しを行い、更なる経費縮減など効率的な事業運営や環境負荷の軽減を目指し、太陽光発電や水力発電の検討を進めることとなりました。

平成34年ごろ

・平成 35 年、水道局の経営努力による経費縮減や効率化の推進、そして、料金改定により財源の確保ができ、耐震化・老朽施設の更新を推進することができました。

・耐震化は、市の耐震基準で約 94％（国の耐震基準で市内全域の 33％）の耐震化が完了しました。

・この結果、水道局は経営の健全化を確保するとともに、災害時にも安心安全な水が安定供給され、また水洗化率の向上から水環境の負荷が軽減され、酒匂川やその他の河川の水質は格段に向上しました。そして、『小田原市の水道水は美味しく、災害時にも安定供給される。安心安全なまち小田原』の実現に向かうことになりました。

・Aさんは日曜日に丹沢湖周辺の森林保育作業から帰ってくると喉が渇いていたので『B子、水を一杯ちょうだい』と言いました。B子さんは冷蔵庫からペットボトルの水を出してAさんに渡しました。Aさんはそれを飲むと『ミネラルウォーターを買って冷やしてあったのかい？』と尋ねました。それを聞いたB子さんは『ううん、違うよ。水道の水を入れて冷やしておいたんだよ。』と言いました。Aさんは『なんだか最近、水道の水がおいしくなったナ』と思いました。そして、夕食前に水槽の酒匂川水系のメダカに餌をあげていると、テレビのニュースで『酒匂川流域で地域と行政が一体となって河川美化活動や下水道普及に取り組み、水質が改善した』、『XX川で廃棄物が大量放棄され、河川が汚染された』、『X市で、道路に埋設されている老朽化した水道管から漏水し、10mの水柱が上がり、付近が一時断水した』という内容の放送を目にしました。このニュースを見たB子さんは『B子の住んでいる酒匂川は心配いらないね♪』とニッコリ笑いました。この笑顔を見たAさんは、とても安心し、温かな気持ちになり『小田原に住んでいて良かったね』と家族で話しました。

29　共生社会の実現

概要

作成者：福祉政策課

シナリオのタイトル：「意識啓発　土壌づくり＋種まき　並行型」

サマリー（概要）

・小田原市では、平成22年に策定した「小田原市人権推進指針」に基づき、人権に関する諸施策を体系的、総合的に実施していくことになりました。

・しかしながら、「人権」「平和」「男女共同参画」など、誰もが、「大切なこと」とは認識していながら、日常生活との接点がはっきりとしにくいため、市民一人ひとりが「自らの課題」として捉えにくいようです。

・市では、引き続き「意識啓発」に努めるとともに、誰もが社会参画しやすい環境づくり（交流の場づくり）を進めました。今では、NPO、ボランティアといった地域を担う新たな主体による草の根レベルでの「地域活動（市民活動）」や「啓発活動」が活発になっています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「自立支援」「地域ボランティア」「主体の多様化（NPO・ボランティア）」「女性の社会参加」「国際化」「平和」

「財政硬直化」「情報化社会」「地域社会の衰退」「個人主義」「家族の希薄化」

平成23年ごろ

・小田原市では、平成22年に「小田原市人権推進指針」を策定しました。

・指針は、各種施策を推進するにあたり、人権尊重という視点から、何を大切にし、どのように施策を進めたらよいかを明らかにしたガイドラインとして、小田原市の人権施策の基本理念と今後取り組むべき方向性を表したものとなっています。

・市では、現在行っている個別の施策については、本指針をもとに点検、見直しを行うとともに、今後策定する各種計画等についても、指針に掲げる人権の視点を取り入れた計画となるよう整合性を図り、人権に関する諸施策を体系的、総合的に実施していくことになりました。

・また、指針の策定は、市役所職員の「人権」に対する意識をさらに深める機会ともなり、窓口の雰囲気も変わってきました。

・翌23年には、本格的な市民参画のもとスタートした新総合計画において、「多様性を尊重する地域社会の実現」として、すべての人々が、国や地域、民族、習慣、性別などの違いを超えて、互いの文化や人権を尊重できる、平和な地域社会を醸成していくための施策がまとめられました。

・「個人主義」「家族の希薄化」「情報化社会」「匿名社会」などの影響から、地域社会の衰退が進む中、NPO、ボランティアといった地域を担う新たな主体も現れてきています。

・市では、「多様性を尊重する地域社会の実現」に向け、NPO、ボランティアといった地域を担う新たな主体による「地域活動（市民活動）」の啓発を進めると同時に、市民に対し、引き続き、「人権」に対する「意識啓発」を行うほか、活動への参加を容易にするための環境整備を実施しています。

◆　◆　◆

・広島県生まれのAさん（48歳・主婦）は、東京にある大学を卒業後、横浜にある大手企業に就職した都内雇用機会均等法第一世代です。バリバリと仕事をこなしていた27歳のときに、同じ会社のBさん（2歳年上）と結婚し、翌年、長女の出産を期に会社を退社し、夫の実家がある小田原市に引っ越してきました。テレビでは、連日、湾岸戦争勃発、ソ連崩壊、バブル経済と暗いニュースが続いていたころです。その2年後には長男も生まれ、小田原での4人家族の生活が始まりました。ちょうど小田原市で「小田原市平和都市宣言」が制定された年だった

と思います。

- Aさんも、子どもたちが小さい頃は、家事、子どもたちの世話、幼稚園等のクラス役員など、日々の生活に追われ、なかなか「自分の時間」が持てませんでした。子どもたちが小学生になり、仕事を始めようとしましたが、時間的な制限もあり、なかなか希望する仕事につけませんでした. しかしながら、幸いもAさんは、近くに夫の実家があったので、義父・義母に子どもたちを預けることもできましたが、ママ友達の中には、近くに知り合いもなく、一人で悩んでいる姿をよく見かけたことを覚えています。
- そんなAさんの娘も、今年、成人式を迎え、息子は、今春、大学へ進学し、一人暮らしを始めました。「子育て」という大きな仕事も一段落し、Aさんも、時間的・金銭的な余裕がでてきたので、今までできなかった趣味、勉強にとやりたいことがいっぱいです。
- いろいろと探してみると、市内でも、毎日、色々なイベントや展示が行われています。Aさんは、「今まで、市の広報誌なんて、ゆっくりと見たことなかったけど、いろいろな情報が掲載されているのね」と思いながら、「平和問題」「男女共同参画」などに興味を持ちました。
- Aさんは、早速、市の「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター」のパネル展示を見に行ったところ、近所のCさん（36歳・主婦）が夫婦で展示を見に来ていました。「子育て中で忙しいはずなのに・・・」と思いながら、Cさんに声をかけてみたところ、「『子育て支援センター』や『ファミリー・サポート・センター』をはじめとする、市の制度を活用して時間をつくっている」とのことでした。更に、話をすると、実は、Cさんも出身は広島県とのこと。話は、子どもの頃に受けた平和教育の話から始まり、美味しいお好み焼きのお店、広島カープの応援など、広島つながりの話で盛り上がったのでした。帰り際、Aさんは、自分が子育ての真っ最中であった頃と比べ、今は、いろいろな行政の支援策があることを知りました。
- Aさんは、今度、市の「女性のエンパワーメント講座」にCさんを誘って参加してみようと思っています。
- そういえば、一昨年、アメリカでアメリカ史上初のアフリカ系大統領が誕生しました。10年ほど前には想像もしなかったことです。「時代は常に動いている」ということを、あらためて実感しているAさんでした。

平成28年ごろ

- 小田原市では、「小田原市人権推進指針」に基づき、「人権」に係る各種講演会や啓発が体系的に実施されるようになりました。しかしながら、近年の社会情勢の変化は早く、新たな「人権課題」も生じてきています。そこで、平成22年に策定された「小田原市人権推進指針」について、その後の、社会情勢の変化を踏まえ、指針の内容を見直すとともに、人権施策を総合的、計画的に推進するため「小田原市人権施策推進計画」の策定準備を進めることとしました。
- 「地域活動（市民活動）」の啓発は、「地域活動の促進」に結びつき、新たに「地域活動（市民活動）」の担い手によるサービスの提供が始まり、多くの人が社会に参画しやすい環境が整ってきました。
- また、多様性を尊重し合うためには、「相互理解」の推進がかかせないことから、「地域での交流の場づくり」が進められ、あらゆる機会を通じて、市民の認識を深める小さな取組みが進められています。
- 「人権課題」の解決には、市民一人ひとりが「自らの課題」であるという認識に立って、ともに生きる社会を形成していくことが必要です。

◆　◆　◆

- 52歳になったAさんは、毎週、さまざまなイベント、講演会、サークル活動への参加にと大忙しです。
- 5年前と変わったことは、一昨年に義父が亡くなったこと、昨年結婚した娘に子どもが生まれ「おばあちゃん」と呼ばれるようになったこと、息子にイタリア人の彼女ができたことです。息子とは、日本の大学に留学にきていたときに、サークル活動を通じて知り合ったようです。

◇　◇　◇

- 先日、Aさん夫婦は、家に遊びにきていた育休中の娘と孫を連れ、義父のお墓参りにいきました。義父の墓前に来ると、いつも思い出すのは、「戦争は人が人でなくなる、戦争の悲惨さ、命の尊さを、我々、戦争を体験した私たち世代が、次世代に語りついでいかなければならない」という義父の言葉です。戦争体験者の話をじかに聞ける歳月はもう残り少なくなってきていますが、Aさんは、「思い出し続けること。それが今を生きる私たちの責務なのよね」と夫と話しました。

◇　◇　◇

・別の日、息子が彼女を連れて、家に帰ってきました。齢80の義母は、初めて会った息子の彼女を前に、少し戸惑っているようです。最近では、市内でも外国籍住民の方を以前にも増して目にするようになりましたが、目にするのと、接するのでは、だいぶ違うようです。

・しかしながら、慣れない土地で一生懸命な彼女の姿を見て、義母は微笑みながら、彼女のお世辞にも上手とは言えない日本語に一生懸命に耳を傾けていました。

・最近では、民族、習慣、文化などの違いによる、ちょっとした日常生活でのすれ違いによる日本人と外国籍住民とのトラブルが多くなってきているように思えます。市役所でも、異文化理解の講座が開催されていますが、最近では、自国の文化を紹介する草の根レベルでの交流会も盛んになってきています。Aさんは、今度、彼女に、「近所の人を呼び、あなたが得意なイタリアの田舎料理を教えてあげては」と投げ掛けてみようと思っています。実際に触れ合うことが「相互理解」には一番だと思っているからです。最近では、身近なところでも「外国籍住民への支援」も増えてきているようです。

平成34年ごろ

・小田原市では、女性や子育て世代が社会参加しやすい環境づくりが進むとともに、学校教育、社会教育、市民啓発、企業・団体等による「啓発事業」と、ボランティアやNPOを始めとする新たな地域の担い手による「交流の場づくり」が一体となり「相互理解」を育む土壌が形成されてきました。

・これに伴い、市民の中にも、各種啓発を担う人材が増え、市内各地で草の根レベルによる「各種交流」の場が増えてきました。

・また、人権教育、平和教育の推進により、子どもたちの人権や平和に対する意識が高まり、子どもを通じ家庭へと、差別のない平和な地域社会の基礎づくりが進んでいます。

・各種啓発も「行政側からの一方的な啓発事業」だけでなく、市民一人ひとりに「自らの課題」であるとの意識がだいぶ浸透してきたこともあり、規模は小さいものの「市民主体による啓発事業」が増えてきました。

◆　◆　◆

・この6年間には、「世界人権宣言70周年」「戦後75周年」と節目の年がありました。しかし、残念なことに、新たな人権課題の発生、世界各地でのテロ行為などがいまだ止むことがありません。

・Aさんは、もうそろそろ還暦を迎えようとしています。

・来年には、娘の子も小学校にあがるので、ランドセルを買ってあげるのを楽しみにしています。新たな時代を担っていく世代が成長していく姿はとても頼もしく思えます。

◇　◇　◇

・息子はというと、イタリア人の彼女と結婚し、今では子どもも生まれ、親子3人で市内に暮らし始めています。今では、義母（85歳）と一緒に本格的なピザづくりに励んでいます。

・息子の子は今年、幼稚園に入園したのですが、うまく周囲になじめるかとAさんは心配していました。しかし、同じ園には、親が外国籍であったり、本人も外国籍という子どもが他にもいるとのことです。Aさんが子どもの頃や、子育てしていた頃には想像できなかったことです。孫たちは、親たちの心配をよそに、子ども同士すぐに打ち解けて遊んでいます。親の方はというと、幼稚園でのお母さん同士の集まりでは、本場仕込みのティラミスを振る舞うなどしているとのことです。「これも、地域での交流の機会が増え、周りの理解が進んだからではないのかな」とAさんは思っています。最近では、市役所の窓口も多言語による生活情報の提供や、相談窓口の充実、わかりやすい窓口表示も増えているようですが、簡単なことは、隣近所で相談し、解決しているようです。

◇　◇　◇

・Aさんは、戦後75周年の年に、Cさんと一緒に、学校で子どもたちに対して「戦争の悲惨さ」について話す機会を与えられました。話の内容は「自分の故郷である広島に原爆が投下されたこと」と「1945年8月15日、終戦の詔勅が発せられる数時間前、小田原はB29爆撃機により“最後の空襲”を受けたこと」です。もちろん、Aさん自身、戦争体験者ではないのですが、今は亡き、実父と義父から聞いた話をもとに、語り継いでいます。聞いた話だけなので、本当の悲惨さは伝えきれないかもしれませんが、写真や映像などを用いながら、戦争体験者の声を紡いでいます。孫がもう少し大きくなったら、義父の「戦争は人が人でなくなる、戦争の悲惨さ、命の尊さを、我々、戦争を体験した私たち世代が、次世代に語りついでいかなければならない」という言葉を教えてあげたいと思っています。義父と孫は、1年違いで、顔を会わせることはありませんでしたが、義父の思いは、世代間をリレーするごとく伝えていかなければならないと思っています。

◇　　◇　　◇

・Aさんは、地域活動に携わってきたこの10年を振り返って思うことがあります。「昔は、『平和』、『人権』、『男女共同参画』というと、何かとても難しいことのように思っていたけど、毎日の暮らしの中で、お互いを同じ人間として生き方を尊重し合う、ごく当たり前のことを、頭で理解しようとしていたので、良くわからなかったのかも知れない。互いに理解し合えるよう一歩踏み出すことが大切だったのね」と。

30　協働による地域経営

概要

作成：　地域政策課

シナリオのタイトル：地域の課題は地域で解決

市内地域運営協議会ようやく全部発足型（じわじわ型）

サマリー（概要）

・平成 23 年度から新総合計画がスタートし、新総合計画策定に合わせ、市内 25 地区の住民が主体となり、地域の目指す姿や誇り、課題のほか健康福祉防災防犯生活環境など広範な分野において、住民自らが取り組むことを記載した地域別計画がまとまりました。

・この地域別計画に基づき、一部の地区では、自治会、地区社会福祉協議会等の関係者で構成された地域運営協議会を発足させ、地域担当職員の支援を受けながら、地域課題の解決に向けた取組方法の検討やその実施が始まりました。

・平成 28 年度に至り、市内全地域で地域運営協議会が立ち上がりました。

・平成 34 年度、市では地域の人材育成事業が広い範囲で実施されており、協議会の担い手の増加や情報共有化が図られています。その結果、協議会の活動範囲が広まり、地域のセーフティネットの役割を果たす地区が増えています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「総合計画」「地域別計画」「地域の課題」「地域運営協議会」「地域担当職員」「地域コミュニティ税」

平成23年ごろ

・平成 23 年度から新総合計画がスタートし、新総合計画策定に合わせ、市内 25 地区の住民が主体となり、地域の目指す姿や誇り、課題のほか健康福祉防災防犯生活環境など広範な分野において、住民自らが取り組むことを記載した地域別計画がまとまりました。

・また、小田原市自治基本条例も施行され、地域の課題の対策を協議・実行する地域運営協議会が、市長への届出制で設置できることとなりました。

・これを受け、T地区とS地区では、「まちづくり計画」策定の過程で地域の合意のとれた課題について、どのような取組をどう行っていくか、自治会を中心とした複数の団体での協議が始まり、同年7月、市への届出により、両地区では、地区自治会連合会の区域をエリアとする地域運営協議会が設置されました。

・一方、設立に向けた動きがとれない地区では、設立の意向を持つ人々も少なくありませんが、あくまで行政への強い要望を唱える人や、新たな負担が生じるとして消極的な人を説得できない状況が続いていました。

・2／3の地区にはタウンセンターやプラザ等と公共施設があり、地域運営協議会や他の地域団体の活動の拠点となっていますが、拠点のない地区もあり、そのことが協議会の設立できない遠因となっていました。

・市では、協議会の設立されたT地区とS地区に対して、タウンセンターなどの公共施設を常駐場所として地域担当職員を2～3名ずつ配置し、人材育成のほか、行政との橋渡し、活動団体からの要請による人材の斡旋、団体間の連携の促進策、先進事例等の情報提供など協議会の課題解決の取組の支援に取り組み始めました。

・2つの地区の地域運営協議会は、自治会、地区社会福祉協議会、地区民生委員児童委員、地区老人クラブ連合会、学区連合子ども会、健康普及員や婦人会ボランティア会、消防団、商店会など地域団体の代表により構成されており、定例会を毎月開催するようにしました。また、地域内の様々な活動を束ね、連携を具体化するため、4～6つの分野別分科会（福祉、青少年、環境、防災、防犯、健康・スポーツ等）が置かれ、それぞれ活動を始めました。

・S地区に住むAさん（35歳、主婦、4人家族）は、昨年、親身にお葬式の手伝いをしたことが契機となり、隣人で一人暮らしとなったBさん（78歳、女性）と過ごす時間が増えてきました。

・Bさんには、大阪に住む長男の家族と九州に住む次男の家族がいますが、正月やお盆に帰省する程度のつながりとなっています。

・Aさんから見るとBさんは、日常生活に特段困っている様子はないものの、足腰が少し弱ってきており、傍から見ていて、一人暮らしがいささか不安に思えるようになってきていました。

・Aさんの日頃のPTA活動の仲間達との会話の中では、Bさんと同じような高齢者や自分達の親のことを話題にすることが多く、当時、自分の住むS地区の地域運営協議会の活動が始まったことを知って、Bさんのような一人暮らしの高齢者に対して、自分たちに何かできることがないかを話し合うようになりました。

・ある日、Aさんは地域運営協議会の福祉分科会でボランティア活動者を公募していることを地区の広報紙で知りました。分科会は自治会、民生委員等で構成されていて、市役所のこの地区専任の地域担当職員や福祉の職員も協議に参加していて、彼等から全国の高齢者見守り活動の情報の提供を受けながら、各高齢者宅を回る計画を計画しているということでした。Aさんは家族と相談して、活動に参加することにしました。

・数ヵ月後、Bさんが自宅で家事をしていると、突然、民生委員とAさんが訪ねてきました。一体どうしたのかと尋ねたところ、Aさんが資料で説明してくれました。S地区の民生委員、児童委員、ボランティアが連携を図りながら、緊急対応カードの作成を依頼して回ったり、見守り活動を実施したりしているとのことでした。希望があれば2日に 1 度訪問してくれるとのことで、買い物の依頼も応じてくれるそうです。Bさんはお願いするかどうかを大阪の長男と相談して決めることにしました。

平成28年ごろ

・平成 28 年になり、市内 25 全地区に地域運営協議会が発足しました。それぞれに地域運営協議会委員や地域担当職員が選任されており、それまでの既存団体の活動範囲では実施することのできなかった事業も立ち上げられるなど、それぞれの地区が活発になってきました。

・多くの地区で毎月定例会が開催されました。

・また、熱心ないくつかの地域運営協議会では、他地区と積極的に交流を図って意見交換を図ったり、市民活動サポートセンターを通じて市内のNPOと連携し、地域内で福祉や環境保全活動を実施しました。

・市民活動サポートセンターでは、地域や市民からの要請に応じ、登録されている市民活動団体と担い手を求める地域を引き合わせたり、各団体にアドバイスや情報提供するようになり、従来と比較してコーディネート的な仕事が大幅に増えてきていました。

・いくつかの地区では、小学校のリニューアルの際に、教育委員会との話し合いで「地域開放プラザ」を設置しました。設置は市ですが、地域で運営資金を負担することにより、様々な住民が集うことができ、印刷機を活用して広報を自前で安価に発行することができるようになりました。

・一方、地域運営協議会ができたものの、拠点の整備が進まずに新しい活動がなかなか実現できない地区もいくつかありました。

・こうした地区では地域担当職員も、活動が活発になるまでは地域に入れず、市役所から電話で各団体の代表者との連絡をしている状況です。協議の場でも決裂して終わってしまうことも珍しくありませんでした。

・市役所は、担い手の地域間格差を解消するため、協議会活動者を中心とした、地域活動の講座研修を定期的に開催することとしました。

・市自治会連合では、新しい人材が集まるように、自治会への加入PRを今まで以上に積極的に実施するようにしました。広報、FMおだわら、掲示板、スーパー店頭へのチラシ等様々な機会に自治会活動のメリットや求められる活動を謳いました。

・各自治会でも、人材獲得や事業の活性化のために、アパートやマンション住民に積極的に声かけを行い、加入や参加呼びかけのチラシを配布しました。

・S地区では、地域運営協議会の福祉分科会が地域担当職員と相談し、敬老行事の名簿などを活用することで、高齢者による老人クラブ加入促進活動を始めました。

・地域の役に立ちたいと考える高齢者の人たちに老人クラブで社会奉仕活動に従事してもらおうと考えたのです。Aさんも地域のお年寄りの世帯に老人クラブへの加入と活動の趣旨を説明して回り、多くの高齢者が賛同してくれました。この活動は高齢者の生きがいづくりを求める意向と合致したようで、短期間で大幅に加入者を増やす

ことができました。

- S地区のCさんは、自営の会社を最近長男に譲ったばかりで、何もすることがなくて日々退屈して過ごしていました。しかし、地区の老人クラブは旅行などのレクリエーションが中心で、物足りなく思い入会できず、何か地域の役に立つ社会的な活動をしたいと考えていたところでした。Aさんから老人クラブの活動の話を聞いて、大変意義深く感じ、早速入会を決めました。
- 老人クラブでは従来のレクリエーション中心の活動から、会員が増えたことで独居高齢者友愛訪問、河川清掃活動等の社会活動メニューが次第に増え始めました。Cさんを始めとする老人クラブの高齢者が独居の高齢者を訪問し、話し相手や安否確認をする活動も本格的に始まりました。
- Bさんの家にも、定期的にAさんやCさんが訪問してくれるようになっていました。Bさんは外出の機会が少なくなり、介護保険で民間の家事ヘルパーをお願いしていますが、Aさん達のおかげで周辺や地元の様子も詳しく知ることができました。自治会の中の情報や街並みの変化もヘルパーさんよりも詳しい情報をAさん達は教えてくれました。
- Aさんや、その友人の主婦達等も、こうした事業にボランティア参加することにより、これまで希薄であった高齢者と密な交流ができるようになり、顔を合わせると日頃の活動などについて相談をするようになりました。皆が地区に対して今までよりも愛着が湧いてきたようでした。

平成34年ごろ

- 平成 34 年頃になると、市内 25 地区の地域運営協議会の活動が、地域によって多少の温度差があるものの、全体的にかなり充実してきました。
- 全ての地区で月に1回の定例会を開催し、活動状況の報告、議論が行われています。
- また、協議会の拠点も、小学校のプラザの整備や、空き店舗の借り上げ等により、市内全地区に整備が完了し、地域担当職員が常駐できることになりました。
- 一方、早期の協議会の設立後、T地区とS地区では、地域担当職員抜きでも積極的な自立した活動が実践されるようになりました。職員は当初のように頻繁な打合せが減少し、地域での常駐の必要性が薄れてきたため、本庁に異動することになりました。
- 各地区の拠点ではサロン活動や催事が行われ、協議会の活動場所であると同時に、地域の交流場所としても機能しています。
- 市役所では、市内の団体に所属する 30～40 代の次世代リーダー達を対象に、視察や地域内探検など各種の研修事業を開催し、地域課題へのアプローチとその解決方法等を繰り返し啓発しています。
- リーダー達の連携を市役所から推奨していることもあり、定期的な講演会、連絡会、視察、意見交換会等は活発に行われています。
- これらの研修等が奏功し、地域を担う人材が多数おり、各協議会では活発な議論が展開されています。
- 地域運営協議会のリーダー達は、それぞれが運営に工夫を凝らしています。常に地域の課題について活発に意見を交換し、新たな取り組みを試みるなど、参加者のモチベーションを維持することを最優先に取り組んでいます。
- 協議会には地域担当職員も参加しており、高齢者問題等の地域の福祉の解決策について国内先進事例の詳細な情報提供や、市役所の福祉健康部と国庫補助申請での連携、市民活動サポートセンターや市内のNPO法人との事業連携等、様々なサポートを提供しています。
- S地区のボランティアAさん達は、NPO法人との連携で活動しています。共同で「見守りサービス」、「コミュニティサロン」等の福祉事業に取り組むために、協議会分科会にNPO法人も参加してもらい、定期的な話し合いを持っています。専門的な意見をもらえるため、高齢者との接し方などに参考になることが多く、活動に役立っています。
- S地区に住む一人暮らしの高齢者Bさんは、数年前から心臓病を患っており、日常生活に不安を持っているため、Aさん達からの勧めもあって、協議会の鍵預かりサービスに登録しています。
- 万一発作等で自分の部屋で倒れても、配達物に異常があった際には、協議会のボランティアやNPO法人に部屋に入ってきてもらえるので、最悪の事態には回避できると安心しています。
- その他の地区でも、協議会による高齢者問題等の福祉的な課題の取り組み等が増加しつつあり、市内の地域セーフティネットは一歩ずつ着実に構築されつつあります。

31　情報共有の推進

概要

作成：広報広聴室、秘書室、総務課

シナリオのタイトル：理想的な市民との協働

サマリー（概要）

・世界的な経済の長期低迷、人口減少・少子高齢化、財政難など、小田原市においても様々な課題が生まれてきています。行政が様々な情報を徹底公開した上で、市民と行政が一緒になってまちづくりを進めるときが来ています。市民の中には自分達で市のまちづくり政策について考えようとする機運が芽生え、自分達で様々なことを考えるため、行政から様々な情報を得ようとします。一方、行政は市民に情報を共有してもらうため、様々な方法で情報発信をします。行政は正確な情報を市民に提供すること、市民は行政の情報をきちんと把握したうえで自分たちの考えを述べ、行政と一体になってまちづくりを進めていくことが、小田原の明るい未来につながります。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「市民グループ」「自治基本条例」「行政情報の発信」「情報発信手段の拡大」「市民のまちづくり意識」

「市民からの意見提言」「地域コミュニティ」

平成23年ごろ

・平成 23 年、小田原市では、新総合計画を策定し、「新しい小田原」に向けて、市民ホールの建設などを含む、小田原駅周辺のまちづくりを進めていることを広報やホームページで紹介していました。

・飯泉に住むAさん（28歳、男性、会社員、独身）は、鴨宮から電車に乗って横浜の電器会社に通勤していたこともあり、あまり小田原駅周辺の市街地に出ることはありませんでした。したがって、小田原駅周辺の街中の様子や変化も知らず、市のまちづくり政策に興味を持つこともなく、市が駅周辺の整備をどのように行う予定なのか積極的に情報を得ることもありませんでした。

・ある初夏の日、Aさんは中学時代の同級生の結婚式に出席するため、久々に小田原駅に降り立ち、街中を歩きました。すると、お城通りやお堀端通り沿いの土地では、いろいろな工事が始まっていて、Aさんはたいへん驚きました。そして、今後小田原の街はどのように変わっていくのか興味を持つとともに、このまちづくりが歴史と風情ある街並みを活かしたものであるのか少し心配にもなりました。

・そこで、市がどのような方針でまちづくりを進める予定なのか、家に帰って、とりあえずホームページで調べてみました。市はホームページをリニューアルしたばかりで、Aさんが4～5年前にホームページを見たときよりはずっと検索しやすくなっており、小田原駅周辺のまちづくり計画のページをすぐ見つけることができました。そしてまちづくりについての市の今後の方針だけでなく、今まで出された市民の意見や政策策定に至った経過など、いろいろなことを知ることができました。

・しかし、Aさんは高齢の方でパソコン操作がわからない人やパソコンを所有していない人は、ホームページで情報を得るのは難しいのではないかと思い、また将来を担う子供たちにも易しく説明したものがあるとよいと感じました。そしてホームページ以外にも情報を得る手段があるとよいのではないかという意見や、その日、自分が歩いて感じたまちづくりについての感想を、市のホームページにある投稿欄に書いて市役所あてに送信しました。

・数日後、市からAさんあてに、情報収集の手段として、広報小田原や、事業ごとのパンフレット、地域に配布したチラシなどがあること、また市長と直接話ができる機会があり、そこでは意見交換ができるので是非参加してほしいこと、地域担当制という制度を開始していること、手紙やインターネットでも継続的に提案や意見を受け付けていることなどを説明したメールが届きました。そして、積極的に市政に対し意見を述べてほしいと付け加えられていました。

・それを読んだAさんは、1ヵ月後の夏の休日、近くで開催される、市民と市長とが直接話をすることができる席に参加してみました。そこでは、Aさんくらいの年齢の人はあまり多くなく、戸惑っていたところ、高校の同級生のBさん（男性、自営業、独身）から声をかけられました。Bさんは小田原駅前でお店を経営している若社長になっていて、小田原駅周辺の街づくりにとりわけ関心をもっていました。そして、同じ世代の、特に駅周辺でお店を経営している数人で時々集まっては意見交換会をし、このような機会にも参加して、市からの情報を収集するとともに、意見を述べるのだと話してくれました。

・その席ではいろいろな意見が出て、Aさんはその活発さに驚きました。しかし、中には自分勝手だなと感じる意見もあって、Aさんは自分なりに賛否の意見を持ちました。そしてこれからは、自分ももっとまちづくりに興味を持つべきだと考えながら帰ろうとしたときに、Bさんから今日の場についての感想を、自分たちの意見交換会に出席して話してくれないかと頼まれました。

・数日後、Aさんは、軽い気持ちでBさんのグループの意見交換会に出席して感想を述べました。皆、立場が違うAさんの意見を熱心に聞いてくれたので、Aさんは少しうれしくなり、そして、もっと市から詳しい情報を得て、きちんとした意見を述べたいと思いました。

・そこで市のホームページや広報などで、市のまちづくりの方針についての情報をいろいろ収集しようとしました。そこで改めて、自分の意見を述べるためには、知りたい情報が少ないこと、情報の発信が遅いことに気づき、市はもっと多くの情報をより早く発信すべきだという提案を市あてに送りました。

平成28年ごろ

・市は、Aさんのような意見が多いことを考慮し、それから数年間、情報発信に力を入れました。情報機器の進展に合わせ、市のホームページはリニューアルを再度行って、検索方法を増やすとともに、更にわかりやすくなり、財政状況や市が行っている業務についての内容などの情報をより多くより早く提供するようになっていました。

・また、平成22年に制定された自治基本条例に基づき、情報共有を含めた「市民参加推進の手引き」が作成され、市民に公表されました。

・その手引きに基づいて、市は市民にいろいろな情報を積極的に提供すべきだとして、市民から出された意見や質問に対する回答、公開請求された資料などは、すべての市民が見ることができるよう、すぐにホームページや情報センターで公開するようになりました。

・議会や、市の政策に関する公開会議などは、インターネットやケーブルテレビを活用して中継されるようにもなっており、リアルタイムで情報を得る手段も拡充してきています。

・インターネットの技術革新もあって、多くの人が簡単な操作でホームページを見ることができるようになり、Aさんは今まで以上に情報を得やすくなりました。

・その一方、広報誌やパンフレットなど活字による情報提供は、ダイジェスト版なども発行され、活用されるようになっていました。

・Aさんもホームページやパンフレット、行政資料コーナーなどで情報を収集し、まちづくりについて熱心に考えるようになっていました。そして、Bさん達の意見交換会などにも時々参加し、自分の意見を述べるようにもなっていました。

・Bさん達グループでは自分たちの意見も積極的に情報発信すべきだと考えました。そして、市のホームページに、市からの返事はいらないとしながら自由に意見を投稿したり、地域で開催される意見交換の場や説明会で意見を述べたり、自分たちでホームページを立ち上げ情報を発信するなどし始めました。

・またBさんはグループを代表するような形で、市民検討委員会に参加して提言するなどの活動もしていました。その委員会では、自分の主張を頑なに言う人もいましたが、Bさんのように市からの情報をきちんと得て意見を述べる人が大半で、委員会は大多数の市民意見を代弁する場として機能していました。

・市民検討委員会の意見はもちろん、様々な方法で出された市民からの意見の一部は、市のまちづくり政策に取り入れられています。今年はその意見を反映させた市民ホールも完成、全面オープンしました。お城通りの開発も着々と進んで、地下街も活気を取り戻しつつあります。

・そのような中、市民検討委員会委員が改任されました。その委員の中に、「市は小田原駅周辺の整備にもっと税金を投入し、行政が中心となった都市型開発を積極的に推進すべきである」と強硬に主張するグループの代表が参画しました。「市と民間とが協調して小田原の文化を活かした小田原駅周辺のまちづくりを進める」という、今までの市の方針に真っ向から反対し、委員会は意見を取りまとめることができなくなりました。

・そのグループの強硬な意見と運動に対し、市は財政状況や民間事業者の意見などを説明するとともに、市民ア

ンケートの結果、他の市民グループの意見などを示して説明を繰り返し、他の委員の賛同も得て、次期委員会でようやく委員会としての意見のとりまとめを行ってもらい、それを受けて市としての方向を決断しました。しかし、当初の市の計画の遂行は数年遅れることとなりました。

・Aさんは、その様子を見て、市全体のいろいろな情報をきちんと収集し、その内容をよく理解したうえで自分たちの考えを述べないと、かえって市政全体に混乱を招くことになると改めて認識しました。そして、それからは今まで以上に市からの情報をよく理解したうえで、自分たちの意見を発信するように心がけました。

平成34年ごろ

・Aさんが街づくりに初めて興味をもってから 10 年余がたち、その年に策定された新総合計画も最終の年になりました。Aさんも結婚をして、小学生の男の子と女の子がいます。

・ある休日に、2 人の子供たちと城址公園に遊びに来て、市民ホールや、お城通りのお店や公共施設、小田原地下街の活気あふれる様子をみながら、工事中だった十数年前を思い出しました。

・今もAさんは、Bさん達との意見交換会を続けています。市の地域担当者は地域の人たちと一緒に小田原のまちづくりの方向を考え、Aさん達も市の発信する情報を得ながら積極的に意見を述べて、市と一緒に市のまちづくりの方向性を検討しました。その成果は、来年出される新しい総合計画に反映されます。

・地域担当の職員と地域住民との話し合いを反映させ、一部の地域では地域担当の職員と地域住民とが一緒になって、地域の広報紙も作成されました。今後、いろいろな地域で作成が進みそうです。

・市は情報通信技術の躍進に伴う新しい情報発信の方法を検討しながらも、従来の活字による、誰もが活用できる情報発信の手段も形を変えながら充実させようとしています。

・小学校4年生の長男は、小学校の社会科の授業のなかで、広報やホームページを活用しながら、小田原駅周辺のまちづくりについて勉強したそうです。

・自治基本条例に基づく、「市民参加推進の手引き」は一般的に周知され、今は情報共有の一定基準として活用されつつあります。Aさんは、この頃、市民と行政それぞれの「情報共有」に係る考え方が変わってきたように感じています。

・これから小田原のまちはどのように変わっていくのだろう。Aさんは、2 人の子供たちに良い小田原を残してあげたいと願い、そして 2 人の子供たちも大きくなったら、市と一緒になって街づくりをしていってほしいと思いながら、子供たちを見つめました。

32　経営指向の行財政運営（行政）

概要

作成：行政改革推進課

シナリオのタイトル：市民や多様な民間主体との連携

サマリー（概要）

・景気低迷や少子高齢化で市の歳入の減少が見込まれる一方、市民ニーズの多様化などに伴い、公共に求められるサービスの範囲が拡大していくため、効率的な行財政運営を確立する必要があります。

・そこで、市民と行政の情報の共有化を行うことで、市の行財政の現状と課題について市民の理解を深めるとともに、市民の協働意識を高め、ひいては市民や多様な民間主体による公共サービスの提供や公共施設の有効活用につなげていきます。

・また、事務事業の見直しについては、市役所内部だけの取組でなく市民によるモニタリングも実施することにより、市民の理解も得ながら多くの事務事業を見直していきます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「景気低迷」「少子高齢化」「自治基本条例」「市民自治」「市民ニーズの多様化」「ライフスタイルの変化」

「公共に求められるサービス領域の拡大」「市民と行政の情報共有」「市民によるモニタリング」

「公共施設の有効活用」「市民や多様な民間主体との連携」

平成23年ごろ

・Sさん（40 歳、会社員）は、奥さん（35 歳）、小学生の長男、父（60 歳）、母（60 歳）の5人家族です。

・Sさんは、市の広報を見て、来年度から市の施設の使用料や手数料が引き上げられることを知りました。知り合いの市の職員のNさん（43 歳、総務部財政課・担当主査）に聞くと、日本全国の都市と同様、小田原市でも長引く景気低迷の影響で市税収入が大幅に落ち込んでいて、かなり財政状況が厳しいとのことでした。

・しかもそれだけではなく、急速に少子高齢化も進んでおり、市の推計でも 10 年後には、4人に1人が 65 歳以上となり、生産年齢人口も減少するという予測がされていたため、今後さらなる歳入の減少が見込まれているとのことでした。その話を聞いてSさんは、昨年の自治会のお祭りで若い担ぎ手がいないため、神輿が中止になったことを思い出しました。

・そんなある日、Sさんは、久しぶりに市民同士の勉強会に会社帰りに寄ってみました。この勉強会は、以前自治基本条例の検討に参加していた市民の有志により組織されたもので、制定された自治基本条例を本当の市民自治につなげるために、市民が何をすべきか具体的に考え、行動しようという目的のもと、まずは市政について勉強を重ねているのでした。

・その日、講師として招いた市の職員から、小田原市でも今後、高齢化の進展や公共施設等の維持・更新などの要因により市の歳出が年々増えるほか、市民ニーズの多様化、ライフスタイルの変化に伴い、公共に求められるサービスの領域も拡大していくため、これまでのように公共の仕事を市役所だけですべて行っていくことはできなくなる、という話を聞いたSさんは、これからは市の代わりに市民、ボランティア団体やNPO、さらには民間企業などが公共の役割を担っていかなければならないと思いました。

・そこで、Sさんは、勉強会の仲間とともに、行政を補完するサービスを自分たちがどう分担していったらいいのか、市民に呼びかけて話し合いを始めました。しかし、市民の多くは、市の現状にあまり危機感を持っておらず、なかなか議論が盛り上がりませんでした。

・Yさん(30 歳、会社員)は、妊娠中の奥さん（25 歳）と二人暮らしで、市内の建設会社で働いています。ところが最近の景気低迷のせいか、めっきり仕事が減りました。民間企業の発注する工事はもちろんですが、市の発注す

る工事も年々少なくなる一方でした。

- 市の財政も相当厳しいんだなと感じたYさんは、あるとき市の工事担当の職員のAさん（35 歳、下水道部下水道整備課・主任）と話す機会がありました。すると、案の定、税収が激減しているため、投資的な予算はもちろん、維持修繕的な予算まで大幅にカットされており、今後も景気が上向き、税収が増えるまでは、市の発注する工事も増えないのではないか、とのことでした。「まずは公共工事が増えないと景気も回復しませんよね。」とYさんが言うと、市の工事担当者のAさんは、「そうですね。で、市でも既存の事業を見直して、不要の事業を削って財源を生み出す努力をしているんですよ。市の職員数も以前に比べるとかなり減っていますよ。」と言いました。
- そう言われてYさんは、一昨年に見た「事業仕分け」のことを思い出しました。Yさんが小田原市の事業仕分けを見たときは、2日間で 80 件の事業が仕分けられ、大半の事業が「不要」や「要改善」と判定されていました。Yさんは、その判定のとおりに事業の取捨選択が進んでいけば、ずいぶん財源が生み出されるのではないのかと思いました。

平成28年ごろ

- 数年前、Sさんたちは、市民の意識を変えていくには、市の現状と課題について情報共有が必要だと思い、市の職員のNさんと相談した結果、市民と行政の情報共有を効果的に進めるための一つの手段として、市民自らが市の財政白書を作成している事例を紹介されました。
- それは、経常的な行政サービスにかかったコストや、現在の資産の状況、将来世代の負担となる債務の状況などが市民の目線から分かりやすく表されていました。Sさんは、これなら市の財政状況を市民が理解するのに役立つと思い、勉強会の仲間やその他の市民にも呼びかけて作成に取り掛かりました。
- 市の職員のNさんの方でも、率先して関係課間で連携を取って財務データを始めとする様々な情報を集めてSさんたちに提供し、Sさんたちが理解するまで丁寧に説明してくれました。
- こうした市の職員の熱心な姿勢に接し、市の職員の意識が変わってきたことをSさんたちは実感しました。これも自治基本条例や新総合計画の策定を始めとする市民と行政との共同作業の積み重ねによるものだとSさんは思いました。
- Sさんたちは、他の自治体の財政白書の作成にかかわった人を招いて勉強したりして試行錯誤を重ね、市の職員のNさんたちと共同で、やっと財政白書を完成させました。白書の作成過程で知り合った他の自治体の住民とも情報交換をして、他の自治体のデータとも比較できるようにしたため、その白書が市の広報やホームページに載るとその反響はかなり大きく、多くの市民から市の財政状況がよく分かった、このまま傍観しているのではなくて、自分たちもできることを考えようという声が上がるようになりました。
- そこでSさんは、市が市民に公表している施設白書に注目しました。それは、市内の公共施設の管理・運営にかかるコスト、施設の稼働率、将来想定される維持管理・更新に係る費用などが分かりやすくまとめられていました。Sさんは、施設白書を読んで、今まで特に意識もしていなかった図書館の本の貸し出しに相当のコストがかかっていること、地域によって同じ機能を持つ施設が重複して立地していることなどが分かりました。
- そこでSさんは、仲間と話し合い、公共施設も市民の財産だから、もっと有効活用することとか、統廃合して浮いたお金を他に使うこととか、効率的な管理運営をすることなどについて、行政任せにしないで、自分たちでも検討することにしました。仲間の民間企業経営者やNPO法人代表者からも、民間企業等による市民サービスの提供方法について具体的な提案がされました。
- Sさんは、皆の熱心な議論を見て、確実に市民意識が高まりつつあることを感じました。Sさんは、仲間と検討した結果を市に提案したところ、市の担当者も真摯に受け止め、双方で何回か話し合った結果、できるものから順次実施していくことになりました。
- 一方、Yさんが以前に見た事業仕分けのメリットを取り入れ、評価者として市民が参加した外部評価制度が何年も前から始まっていました。
- Yさんは、毎年、その会議を傍聴しに行きましたが、そこで資料としてあらかじめ市の職員が作成してくる事務事業評価表を見て、市には自分の知らない非常に多くの仕事があることや、市の内部でも毎年、目的妥当性、有効性、効率性、公平性といった視点で事務事業の評価をしており、その結果を事務事業の取捨選択や改善に反映させる作業をしていたことを初めて知りました。
- また、その会議の場での市の職員と市民評価者とのやりとりを聞いて感じたのは、確かに現場の職員は、皆熱心に仕事しているのですが、市役所の職員は、以前から存在する仕事というものは、それをやることが当たり前だし、そのやり方が一番だと思いこんでいるということでした。

・そこで、傍目八目という言葉もあるように、市役所以外の外部の目線で市の仕事の仕方をチェックしてみることで、今まで考えつかなかった斬新な視点で見直しができるという点が、外部評価という手法の優れている点だと、Yさんは思いました。

・Yさんは、そのことを外部評価の会議の場で顔を合わせた市の職員のAさんに話すと、Aさんは、「こういった市民によるモニタリングは、職員の説明責任能力が相当求められる場であり、職員はこれからますます市民生活の現場感覚と行政の専門的知識を身に付けていかなくてはいけないですね。」と言いました。

・そして、外部評価の回を重ねるたびに市の職員の説明を通してYさんが感ずるのは、市の職員が常に事務事業の成果やコストを意識して仕事に取り組むようになりつつあるということであり、市役所内部の事務事業評価と外部評価が事務事業の見直しだけではなく、職員自身の意識改革にもつながっているということでした。

・市では、外部評価の結果を参考にして、数多くの事務事業の見直しに取り組みましたが、評価者に市民が参加していたり、外部評価が市民に公開で行われているせいか、スムーズに市民の理解を得ながら事務事業の見直しを行うことができ、最少の経費で最大の効果を上げられるように行政資源の配分を行うことができました。

平成34年ごろ

・Sさんのグループからの提案を踏まえて、行政側では市の施設の管理運営等に市民や民間企業等の力を積極的に導入しました。市民による施設の管理運営は、市民目線でのきめ細かいサービスの提供が可能となるとともに、相当の経費が節減できるようになりました。また、市民自身が行政との協働をしているという意識高揚にもつながっています。

・Sさんのお父さんは、自治会の代表として地域運営協議会に参画していますが、近くの小学校の1室を改修し、協議会の拠点として自分たちで管理運営をしています。地域内の公園の管理も、必要な資材の支給だけ市から受けて、あとは協議会のメンバーがボランティアでやっています。公園で遊ぶ子供たちも、その姿を見て、自発的に手伝うようになりました。この他にも、道の掃除や街路樹の手入れなど地域でできることは、みな住民がボランティアで行うようになりました。

・Sさん自身は、市民ホール運営協議会で活動しています。以前市民ホールができた時に、Sさんの仲間から市民のためのホールなのだから自分たちで管理運営をしようという声が上がり、今まで市民会館を利用してきたいろいろな団体にも声をかけて市民ホールの管理運営を専門に行う協議会を立ち上げたのです。市民自身が考えた、市民にとって魅力的な企画が多いせいか、一年中多くの市民で賑わっています。

・Sさんの長男は、横浜の高校に通っていますが、新しくできた市立図書館を毎日のように学校帰りに利用しています。聞くと学生やサラリーマンで一杯で、中には仕事帰りに図書館のボランティアスタッフをしている人もいて、市民との協働による運営上の工夫もされているそうです。

・また、Sさんの仲間の民間企業経営者からの提案を受けて、指定管理者による施設の管理運営や、民間企業による公共サービスの提供など、民間活力の導入も大幅に進みました。市内の企業でも、社員の子どもを預かる託児施設を社内に開設するところが増えてきました。Sさんの奥さんが働く市内の会社でも最近社内託児施設ができたため、Sさんの奥さんは3年前に生まれた下の子を預けて安心して働くことができます。

・一方、Yさんの会社は大忙しです。市の事務事業の見直しを始め、施設の効率的な管理運営などによって生み出された財源により、市の公共工事も増えてきましたし、地場の素材や技術を活かした建築やリフォームの工事も大分発注されるようになりました。もちろんインフラだけではなく、福祉や医療、教育などの予算にもそれらの財源が回されるようになりました。

・Yさんの子供は、小学校4年生ですが、今年から、よりきめ細かな指導を行うためのスタディサポートスタッフがクラスに配置されるようになりましたし、通院の際の医療費助成も数年前から受けられるようになりました。

・こうして、市民や民間企業等多様な民間主体による公共サービスの提供や、公共施設の有効活用、事務事業の見直しなどにより節減できた財源を、市民生活の維持・向上や小田原の魅力を高めるための投資に充てることができるようになり、その結果、定住人口、交流人口とも徐々に増加し始めました。

32　健全な財政運営（財政）

概要

作成：財政課

シナリオのタイトル：共創社会の実現　～三位一体による財政健全化～

サマリー（概要）

・世界的な金融危機の影響などによる厳しい経済情勢を背景に、社会保障費の増加、市税収入の減少などがあいまって、本市の財政基盤も急激な悪化が見込まれています。このような中、真に必要な住民ニーズに応えるためには、様々な手法を使って行政改革を進め、効率的な行政運営を行わなければなりません。

・そして、ともすれば行政依存になりがちな市民の意識を変え、行政サービスへの市民参画の拡大を図るとともに、事業者自らが行動することによりもたらされる経済の活性化などを進め、「市民」と「事業者」と「行政」がそれぞれの役割を担い、「共」に「創」り上げていく社会を実現させ、健全な財政運営を堅持させていきます。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「少子高齢化」「住民要望の多様化」「行政に求められる役割の拡大」「行財政改革」「公共施設の維持」

「企業の撤退」「景気の低迷」「地域コミュニティの希薄化」「生産年齢人口の流出」

平成23年ごろ

・Aさん（35 歳女性）は、夫（40 歳）、小学生の長女、保育園に通う長男の 4 人家族です。

・Aさんの夫は、自動車会社に勤めていますが、まだ 3 年前の世界同時不況の影響から脱しきれず、給料も上がらない厳しい状況が続いています。Aさんは、二人の子どもを育てるために、パート勤務で家計を支えています。夫の給料が上がらず、生活を切り詰めながら、毎日の生計を立てています。

・ある日、広報おだわらを読んでいたAさんは、「当初予算の概要」と書かれた見出しに目が留まりました。今まで、気にしたこともなかった記事でしたが、「市の 1 年間の家計簿」という言葉に興味を感じたのです。我が家の家計簿は厳しいけれど、市の家計簿ってどんなものなんだろうと。

・収入のうち、約 6 割が市税であること。支出のうち、人件費や扶助費が、それぞれ約 2 割を占め、1 割を超える公債費と合わせると、支出のうち、半分以上が固定的な経費でなくなってしまうことが分かりました。

・また、市税収入は景気の影響を受けて、ここ数年落ち込みが激しく、それでも市民からの要望はたくさんあって、限られた予算をどう使っていくのか、難しい時代であることも分かりました。行政の収入や支出の仕組みは、よく理解できてはいないけれど、楽ではなさそうだなと感じました。

・Aさんの家でも、長女は放課後児童クラブに通っていますし、長男は延長保育を利用しています。今まで、当たり前と思っていたことが、いつまで続くのか、長男が小学校に入学しても、今と同じように自分が働き続けられるのか、少し不安な気持ちになってきました。

・Bさん（65 歳男性）は、5 年前に民間会社を定年退職し、今は、妻（63 歳）と二人暮らしをしています。子どもは、独立し、年金とアパート経営による収入で、自治会活動やサークル活動などに勤しんでいます。

・今年、自治会長に選ばれ、地域を引っ張っていくこととなりましたが、5 年前に役員をやったときに比べて、様子が違うことを感じるようになりました。

・町内清掃を行うと、出てくるのは役員と一部の人。一方、自治会長さんにお願いといって、要望は多くなるのみ。アパートに住んでいる人は、自治会にも入ってなく、どんな生活をしているのかが、見えません。

・連合単位では、「地域運営協議会」が設置され、Bさんも一員として、地域の自治能力の向上に力を注いでいますが、まだ、住民の意識は十分とは言えません。自治会長として、どうしていけばいいのか、悩んでいます。

・Cさん（50 歳男性）は、中心市街地で、コンビニエンスストアを経営しています。中心市街地の衰退が言われて

から 10 数年。幸いにも、Cさんのお店は、まだ人通りがある場所にあるため、どうにか生計を立てていますが、この何年かで同業者は少なくなってしまいました。Cさんが加入している商店会も、昔のようには元気がなく、毎年、決まったイベントを行っているだけです。

・そんな中、平成 26 年秋の開館を目指して、市民ホールの整備方針が決まりました。Cさんは、市民ホールとの連携で、商店会が変わればいいのだけれどと思っています。

平成28年ごろ

・Aさんの子どもは、中学生（長女）と小学生（長男）になりました。Aさんは、パート勤務も続ける傍ら、中学校のPTAの役員にも就いて、公私とも忙しい日々を送っています。

・ある日、バザー開催の打合せをしているとき、用務員さんと話す機会がありました。その時、現在、全ての学校の用務員は市の職員ではなく、委託会社から来ていることを知りました。改めて、思い巡らすと、ここ数年で、市の施設のイメージが変わってきていることに気付きました。図書館も最近、市民との協働による運営が進み、ずいぶんと身近で利用しやすく感じられるようになりました。

・何が変わっているのだろうと、興味を抱いたAさんは、市役所のホームページで「施設白書」を見つけました。数年前、市民と行政が一緒になって作ったもので、公共施設の管理や運営方法について、様々な意見が載せられていました。図書館も、この白書に基づいて民間活力を導入するなどの運営上の工夫がなされたことが分かりました。

・また、別のページでは、「事業仕分け」という項目を見つけました。ホームページでは、この作業を踏まえて、様々な検討を行い、長い間続いていた事業や補助金で廃止になったものがありますと記載されていました。そういえば、Aさんの知り合いが、ボランティア活動への補助金が切られたといって憤慨していたことがありました。活動の始まりには行政の支援が必要でしたが、年を経るにつれ、惰性になってしまい、補助金をもらうことが普通という感じになっていたのを、仕分け作業で不必要と判断されたようです。初めは、知り合いの仲間も不満の声を上げていましたが、多くの市民が参加した作業で、補助金の必要性が判断されたことや、確かに、必要性が薄れていると考えたようで、今では、自分たちで頑張って活動を続けています。

・Aさんが心配していた、放課後児童クラブは、今も活動しています。長い時間預けると相応の負担を支払わなければいけませんが、クラブ室は広く、明るくなり、部屋も二つに増えました。多少の負担増は我慢しても、安心して働けるのはありがたいし、何よりも、環境が良くなって続いているのが嬉しいことです。ただ単に続いているのではなく、他の事業や補助金を廃止したり、施設の運営を民間委託に切り替えたりしたりして、出て行くお金を抑えるとともに、公共施設を使った収益的事業の許可に伴う収入の増加を図り、そこで生まれたお金を、放課後児童クラブに充てていることが分かってきました。

・Bさんは、引き続き自治会長をしています。自治会長になって 5 年間。最近気付いたことは、行政からの情報提供が多くなってきたことです。以前の催し物の案内や工事の周知などではなく、事業の進め方や予算の使い方などの行政運営まで、様々な情報が提供されてきます。知り合いの広報担当者に聞いたところ、「市民の理解と協力がなければ、行政の事業は進められない。理解してもらうには、きめ細やかな情報提供が不可欠です」と返ってきました。そして、「これからは、行政に要望して何かをしてもらうのではなく、市民が主人公になって行うことに、行政がサポートする時代になる」と話してくれました。

・先日、最新版の「財政白書」が配られました。この白書は、市民が中心となって、行政と一緒に作成したもので、市民の目線に立って財政分析が行われたものです。Bさんは、白書をめくってドキッとしました。「市民が思っているより、市の懐具合は厳しい」「このまま市民要望が膨らんでいくと、小田原市の財政はパンクする」という記述に目が留まったのです。Bさんは、早速、「地域運営協議会」で、この白書を話題に出しました。メンバーの中には、Bさんと同じように感じた人も多くいて、地域の要望を単に行政に伝える会にはなりたくないという声も出るようになりました。地域の意識も、少しずつ変わってきたかなと感じているところです。

・市民ホールがオープンして2年。コンサートや演劇などを始め、市民の自主活動による催しも増えてきました。Cさんのお店が加入する商店会では、市民ホールのイベント開催に合わせて、ジョイント売り出しを始めました。イベントが決まると、主催者の方と話し合い、チケットとともにイベントにまつわる商品を売り出すことにしたのです。市民ホール内だけでイベントグッズを販売するのではなく、商店会でも買うことができるようにして、イベントに集まるお客さんを、商店会に呼び込むことができました。

- Aさんの長女は二十歳を迎えました。長男も高校に入り、子育てももう少しかなと感じる最近です。景気はまだまだ不安定な状況が続き、夫の給与もあまり上がっていませんが、仕事も楽しいし、できる限りは働いて、家計を助けていこうと思っています。
- 二十歳を迎えた長女は、成人式の実行委員として活動しています。以前は、市主催で行われていましたが、今では、実行委員会主催の成人式を開催しています。元々、企画や運営は全て新成人による手作りで行われていた伝統がありましたので、実行委員の先輩たちなどの支援も受けながら、経費も最小限に抑え、どうしても必要なものは、中心市街地の商店会と連携を図り、商業者にスポンサーとなってもらいました。Cさんのお店も、来客者に学生が多いため、スポンサーの一人として支援しています。市民ホールに掲げられた看板の隅には、Cさんのお店の名前が掲載されています。市役所は、ほとんど口を出さず、市民ホールの使用料だけは無料としてくれました。
- Bさんは、自治会役員を卒業し、悠々自適な生活を送っています。「地域運営協議会」も軌道に乗ってきました。行政に要望することが自治会役員の役目だった時代は終わり、本当に地域に必要かどうか、運営協議会で議論するのが普通となりました。地域でできることは地域で行うことが、実は、一番、効率的に地域のためになることに、住民が気付いてきたのです。市にお金を出させることを美徳としない風潮が根付いてきました。
- ポケットパークの管理、農道の清掃・修理など、住民で話し合い、自分たちで行うようになりました。Bさんも、まだ体力には自信がありますので、都合がつく限り、参加をしています。お休みの日には、子ども連れの家族での参加も見られるようになりました。市役所から来るのは、材料と道具だけです。でも、ここで浮いたお金は、子どもたちのために学校で使われたり、本当に大変なときに、時間を掛けずに対応してくれたりと、メリハリをつけて使われていることを住民も分かってきたからです。
- 「広報おだわら財政特集号」が発行されました。そこには、負債総額が 1000 億円を切ったとありました。「新たな市債の借入れは償還元金以内」という財政健全化の目標を堅持し、さらに行政が行わなければならない事業を絞り込むなどして、毎年、着実に負債を減少させた結果です。景気の動向は、相変わらず定まらず、必ずしも経済環境が改善されたとは言えないものの、行政に依存しない市民意識と行動が根付き、事業者も市民活動や行政の施策に機敏に対応し、連携を強めて経済活動を活発化させています。中心市街地における流動客調査結果や観光客数も、上向きになってきました。行政は、常に事業の有効性や効率化を考え、最小限の経費で最大限の効果が生まれる工夫を続けています。「市民の行動」「事業者の行動」「行政の行動」が連携し、共創社会の実現に向けて進んでいます。

33　市町合併と広域行政の推進

概要

作成：　企画政策課

シナリオのタイトル：「新おだわら市」、変わらない優しい日々

サマリー（概要）

・県西地域の2市7町は、平成26年4月1日に合併をし、「新おだわら市」が誕生しました。合併によって、「新おだわら市」の人口は約35万人となり神奈川県西部で唯一の中核市となりました。これまで県による公共投資は、人口規模の大きい市が多数ある相模川以東に偏りがちでしたが、「新おだわら市」が誕生したことで県西部でも多くの県事業が展開されるようになりました。元々、観光や各種産業、また住環境などの点でも、非常に高いポテンシャルを有していた県西地域ですが、合併によるスケールメリットを活かした、行政サービス水準の引き上げや都市基盤整備、観光地としてのブランドイメージの向上などにより、都市としての魅力、実力に一層の磨きがかかってきました。人口減少、少子高齢化の影響からか、神奈川県西部地域でも沈滞化に拍車が掛かっている自治体が多いようですが、時代の変化を読み合併という手段によって、的確に対応してきた「新おだわら市」では、あちらこちらの街角から今日も安全安心な日々の暮らしを営む市民の笑顔が溢れています。

シナリオに大きな影響を与えている要因・トレンド（キーワードレベル）

「財政状況」「人口減少」「少子高齢化」「首長のリーダーシップ」「行政サービスの維持」

平成23年ごろ

・小田原市内に住むAさん（40歳　妻、小学生の息子の3人家族）は、市内の企業に勤務しています。

・ある土曜日の朝、朝食を終え、市の広報紙を何気なく流し読みしていると、明日の日曜日に近くの公民館で市町村合併について説明会があることを知りました。Aさんは、これまで市が開催する説明会などには参加したことはなく、それほど市政に関心があるわけではありませんが、小田原市が何年か前から近隣の市町と合併について検討を行っていることは職場の同僚のBさん（40歳　妻と小学生の娘の3人家族、県西地域C町在住）から聞いて知っていましたし、ニュースなどでも全国的に市町村合併が進んでいることをよく耳にしていました。この説明会に少し興味を抱いたAさんは妻を誘って行ってみる事にしました。

・日曜日の午後、説明会場の公民館には30人くらいの人が集まっており、ちょうど市からの説明が始まるところでした。説明会では、地方分権の進展や財政状況の悪化など、小田原市周辺の小規模な町については市町村合併を真剣に検討すべき状況にあり、仮にそうした町から合併に向けた協議の申し入れがあった場合には、県西地域の中核都市として前向きに対応する考えであること、また、これまでの検討の結果では、合併には、都市の魅力向上や行財政基盤の安定化といったメリットが見出せること、財政力の弱い町との合併でも余剰となる職員を削減することで財政状況の悪化は十分防げることや、小田原市の人口が突出して大きいことから、仮に合併しても小田原市の行政サービスの水準など、市民生活に大きな影響が出ることはほとんどない見込みであることなどについて、市長自ら説明がありました。

・説明会の帰り道、「小田原市にとって合併って本当に必要なんだろうか」と何気なく口にするAさんに、「私たちの生活に変化がなくて、周りの小さな町にも良いことなら合併しても別にいいんじゃないの」と県西地域のD町に実家がある妻は明るく言いました。

・翌日、会社での昼休みのこと、Aさんが同僚のBさんに昨日の説明会のことを話したところ、同じくC町でも説明会があったことを聞きました。

・C町で開かれた説明会には会場一杯の300人もの参加者があり、非常に活発な議論が行われたようでした。あまりの雰囲気の違いに驚くAさんに「規模の大きな小田原市と違って、うちのように小さな町は飲み込まれるような危機感があるから議論も活発になるんだよ。合併には賛成の人も反対の人もいたけど、一つ一つの質問や意見に町長や町職員が熱意を持って、合併の必要性を訴えていたのが印象的だったな。」と言うBさんでした。

・各市町の説明会や議会で合併に対する概ねの了解が得られたのでしょうか。説明会から2ヶ月ほど経過したある日、Aさん宅に届いた広報紙には、2市7町による法定合併協議会が設立されたことを知らせる記事が大きく掲載されていました。

平成27年ごろ

・平成26年4月1日に「新おだわら市」が誕生してから約1年が過ぎました。

・法定合併協議会の設立から合併に至るまでには、新市の名称や合併によって周縁部となってしまう旧町域における利便性維持の方策などについて、2市7町の立場の違いなどから様々な紆余曲折があったようですが、最終的には行政サービスの充実や地域の活性化の実現といった大きな目的に向けて2市7町が一致して取り組もうという意思を確認し合った結果の合併でした。

・この1年間、市では「新おだわら市」誕生を記念して、旧市町の区域を巡るバスツアーや、市内の全小中学校合同の合唱コンクールを開催するなど、様々なイベントを開催して新しい市の一体感の醸成に取り組んでいます。

・また、首長や議員数の大幅な削減や、旧市町ごとに行っていた事業の統合など、早くも合併の財政的な効果が表れてきたほか、小規模な旧町などで懸案となっていた、ごみ処理施設の老朽化や消防力の強化などが「新おだわら市」の優先事業として位置付けられるなど、市民の目にも合併による具体的な変化が見えてきました。

・でも、旧小田原市の区域に住むAさんには、合併による変化はほとんど感じられません。行政サービスの内容も今までどおり、税金が増えるようなこともありませんでした。敢えて言えば年賀状を書くときに妻の実家の住所が「新おだわら市D区〇〇番地になったんだな・・・」と感じたことくらいです。「あの説明会で市が「ほとんど変わらない」と言っていたことは本当だったな。」と改めて思いつつも、未だに旧小田原市にとっての合併の効果について納得できない思いのAさんでした。

・一方、合併により住所が「新おだわら市C区」となったBさんの日常生活には、この1年間に様々な変化が生じていました。

・例えば毎朝のごみの出し方。合併前の旧C町では、可燃ごみはスーパーのレジ袋に入れて出せましたが、合併を機に有料の指定袋以外では出せなくなりました。Bさんの妻も合併直後は、「ごみ袋は買わなくちゃいけないし、分別も細かくなって負担だわ。」とぼやいていましたが、1年経った今では、新しい方法にすっかり慣れたのか、最近では細かいメモ紙などを分別せずにごみ箱に入れる娘に注意する光景をよく見かけます。

・またBさん自身は、旧市町の区域ごとに設置された地域自治区の地域協議会委員として新たな地域づくりに携わることになりました。Bさんの娘が通う小学校のPTA会長を務めていたことから、「地域のことは地域で話し合って決めていく、というこの新しい市民自治の仕組みに是非参加して欲しい。」との声が地域の自治会長さんから掛かったのです。はじめはあまり乗り気でなかったBさんですが、1年が過ぎた今では、この活動を通じて知り合った多くの人達とともに、より住みやすい地域づくりについて共に考え行動することに大きな意義を感じるようになりました。委員としての任期は今年度一杯ですが、来年度以降も何かの形で積極的に地域にかかわっていこうとBさんは考えていました。

平成34年ごろ

・合併から8年の月日が経過しました。

・「新おだわら市」が合併した平成26年度当時より更に進行した人口減少と急激な高齢化の影響で、全国では財政破綻寸前といった深刻な状況に陥っている自治体が数多く見られるようになりましたが、「新おだわら市」では、職員数の適正化など合併を機に着手した行財政改革が順調に進み、健全で強固な行財政基盤を有する自治体として、今や県内でも屈指の存在となっています。

・県西部唯一の中核市としての知名度、総合力を活かした積極的な企業誘致、広域幹線道路の整備促進などにより、市内には新たな工場、事業所が進出し多くの雇用が生まれるようになりました。また「新おだわら市」の豊かな自然を生かした魅力的な住宅地が次々整備されたことによって、職住近接が実現できる、東京や横浜などの県東部では望めないライフスタイルが得られるエリアとして定住者が着実に増加しています。

・また、合併の財政的メリットの大部分を市民に身近な行政サービスの向上に、中でも子育てや教育分野において、県内各市町が羨むほどの手厚く魅力的なサービスの提供に取り組んできた結果から、今では子育てしやすい街として広くイメージを持たれるようになり、子育て世代の人口増加が特に目立っています。

・定住者に加え「新おだわら市」を観光で訪れる人も増えています。アクセス道路の新設などにより、国内屈指の

観光地としてますます賑わっている箱根地区はもとより、南足柄地区と山北地区に跨る豊かな森林地域に整備された「あしがら森林公園」や湯河原地区の沿岸部に整備された「ゆがわら海洋自然公園」を拠点として展開される体験型プログラムなどとの連携により、日帰りから滞在型まで幅広く対応する観光エリアとしてのブランドイメージが高まっているからです。

・子育て世代を始めとした定住人口の増加、また観光客など交流人口の拡大を受けて商業も活性化しています。中里地区の大型商業施設の活況は相変わらずですが、一時期、かなり衰退した小田原駅周辺の中心市街地も交流人口の拡大とともに、訪れた人々が歩いて楽しめる街として活気を取り戻しつつあります。

・街が活気を取り戻していく中、Aさんの毎日には相変わらず大きな変化はないようです。でも、新聞などで知る他の自治体の状況、今や地域協議会の委員長となったBさんの姿、近隣の市から「新おだわら市」に引っ越してきた職場の同僚の話などを聞きながら、最近になってAさんは少し分かってきたように感じています。安心して過ごせる毎日を支えるまちづくりの難しさや、あの合併の意味を・・・。

・東京の大学に通うAさんの息子は、今、就職活動の真っ最中です。先日の家族そろっての夕食時のこと、就職活動の成果報告をする息子の、「これからも生まれ育った「新おだわら市」に住み続けたいから市内の企業に絞って活動をしているよ。」という言葉に何故かうれしい気持ちになり、思わず笑顔がこぼれるAさんと妻。「新おだわら市」で暮らす日々の心地良さをあらためて感じたひと時でした。